庶民がやってきた

夜桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
庶民がやってきた

【Ｎコード】
Ｎ０４０１Ｏ

【作者名】
夜桜

【あらすじ】
主人公は何処にでも居る一般家庭出身の庶民である。
唯一、他の高校生と違う点を挙げるならセレブが通う学園に通っていることぐらいだが、それさえ除けば何処にでもいる、ごく普通の高校生。
そんな彼の人生の分岐点となったのは一枚のチラシだった……。

プロローグ

こんな俺が言うのも説得力に欠けるかも知れないが、紅瀬弥生は極めて普通の部類に入る人間だ。そもそも普通＝平凡という考えが的外れなんだ。そんな俺だけど唯一、自分を取り巻く環境が普通じゃないってのは認めよう。

高校生の身でありながら俺はセレブが通う超が付くような上流階級が通う白鷺学園高等部に在籍している。断っておくが家柄を自慢する為にこの話を持ち出した訳じゃないからな？　家は絵に描いたと言えるくらい平凡っぷり。借金とか生活費とかそういうのは困っている様子はないけど、私立にいけるほど裕福って訳でもない。強いて他の家と違うトコを挙げるなら父子家庭で親父が刑事ってことぐらいだ。

話を最初に戻そう。そんなごく普通の家庭環境で育った俺がセレブたちが通う学園に籍を置けるのもひとえに奨学金制度によるもの。この学園は優秀な人材を輩出する傾向が強いからこの奨学生制度が採用された生徒は定期試験で常に上位をキープし続ける義務を負う代わりに三年間の学費諸々が都立高校並みになる。

そしてこれは俺という庶民が、セレブたちが通う学園で過ごすほんの一部分の話だ。

朝起きてまず何をするかと言えば朝食の支度をすること。一人っ子政策よろしく親父と二人で暮らしていると自然に家事は俺がすることになる。親父・紅瀬恭一郎は一課でバリバリ活躍してる刑事。そのせいか、帰ってくる時間が不定期で顔を合わせる機会が少ない。お袋のことは正直、殆ど覚えてない。親父からは交通事故で亡くなったとしか聞いてないからな。

で、俺が作る朝食だが申し訳ないぐらいありきたりなメニューだ。きつね色に焼いたパンにベーコンエッグを乗せたトースト。飲み物

はその日によってまちまちだが今日は紅茶にした。親父の分の朝食を用意して自分の分の食器を片付けてから俺は家を出る。

「行ってきます……と」

誰も居ない家に向かって言うのも変だがこれはもう習慣化してるし俺自身、変だとも思わない。

今日の天気は快晴。気持ちが良いくらい澄んだ空気をめいっぱい吸い込んで伸びをする。真っ先に浮かんできたのは数日前に行われた中間テスト。

正直に言おう、自分でも怖いくらいの手応えを感じた。走り出したペンが止まらないとはきっとあのことを言うに違いない。テストが終わってから自分で答え合わせをしてみても全教科を通して平均八十点は固い。入学当初は奨学生としての義務をちゃんと果たせるかどうか心配だったけど春休みに届いた教科書で予習しておいたお陰で周りの皆よりも気持ち控え目にゆとりを持って授業に臨むことが出来た。

ただ、同時にほんの少しだけ拍子抜けだったところもあった。良家の子息・息女が通うような学園だからハイレベルな授業内容を予想してたがその実、蓋を開けてみれば学力レベルは全国でいうところの上の下。勿論それでも上位をキープし続けるってのは大変だが日々の努力さえ怠らなければどうにかなりそうな範囲だ。そういう意味では度肝を抜かれたと言ってもいい。

学校へと近づくに連れて学園の生徒たちが増えていき、それに伴って高級車とも頻繁にすれ違うようになる。きっと日本中探しても国内外の高級車が頻繁に通る道路はここぐらいだろう。（因みに今さっきすれ違ったのはメルセデスとかいう外車）

そりゃあ良家の人間が多く通うような学園だし自動車通学が禁じられてないとはいえ、在校生の半数以上がお抱えの運転手に送迎を頼んでもらってる辺りは流石、セレブと言うべきか。

かく言う庶民出の俺は家から学園までは電車で二十分、駅から徒歩二十分掛けて登校してる。自動車の送迎が認められている癖に自

転車通学を認めない学園の横暴ぶりにはほとほと呆れている。畜生、誰だこの学園選んだ奴は。……俺でした。
「ごきげんよう、鳴海さん。先日はパーティーにお招き頂き――」
「今度、父上の会社で――」
セレブな世間話を聞き流し、のんびり登校してる生徒を掻き分けるよう歩いて校門を通る。ちょうどその時、頭上からばらばらと独特のエンジン音と風切り音が響き渡り、同時に風が巻き起こる。
（相変わらず迷惑な登校するねー）
車で登校するってのは小説やドラマの世界じゃよく聞くが自家用ヘリで登校してくるよーな奴は白鷺学園の人間ぐらいだ。しかも学園からのお咎めはなし。多分、週に一度のヘリ登校だから許容してるんだろーけど。
ぼんやりと校舎の屋上に着陸したヘリを見上げているとチラシが何枚か踊りながら地面に落ちていくのが目に止まった。興味本位で風に踊らされながら落下していくチラシを手に取る。
『素敵な学園生活を謳歌したいあなたへ
学園生活と言えば何を想像しますか？　学業もスポーツも魅力的だけど学生時代に料理修行をするのも魅力の一つじゃないでしょうか？　我が料理研究部はそんな生徒たちを応援する為に設立された部活です。料理を通して一つのことをやり遂げる達成感を味わった時、あなたはきっと料理研究部に入ってよかったと心から実感する筈です。
我が料理研究部は入部希望者を決して拒みません！　入部希望者は放課後、家庭科室まで来られよ！　料理研究部部長・桐生玲子』
この際だから断言しよう。勧誘期間のピークはとっくに過ぎている。うちは情緒教育を徹底するようなところじゃないから年中勧誘しようと節度を弁えていればお咎めはない。ただ、料理研究部というのは聞いたことがない。今年になってから出来た部活だろうか？
「料理研究部に興味ありませんかー！　まだ入部を決めかねている方は是非料理研究部へお越し下さーい！」

チラシを読みながら歩いていると、不意にそんな声が耳に届いた。
女子生徒（タイの色を見ると三年生だった）の第一印象は活発で何事にも全力で取り組む三年生と言ったところか。部員らしき人が一人もいないってのが少し気になるが。
（料理部ねぇ……）
毎日家事仕事をしてる人間としては少し興味があった。具体的な活動内容は書かれてないがチラシによると見学だけでもオーケーらしい。ただ、正式な部ではないらしく部員が足りない現状では部費は落ちず材料は自費だという。
それでも俺の興味が削がれることはなかったが、正直なところ入部は難しい。何故かって？　家に帰れば家事仕事という名の恋人が俺を待ってるからだ。皆が皆、青春を謳歌してる間に俺は一人で商店街で買い物を済ませ、家に帰るなり夕飯の支度をしたり洗濯物の面倒を見たり疲れた身体を引きずりながら勉強に励んで……やべ、自分で言っておいてちょっと泣けてきた。
でも……なんかいいよな、部活動って。中学までは親父の勧めで剣道やってたけど高校に入ってからは完全に勉強に切り替えている。奨学生の身としてはやっぱりちゃんと勉強という形で成果を残さなきゃならない使命感があるからな。
今でも部活動をしたいと聞かれればイエスと即答するが多分、この学校じゃ思うように馴染めないと思う。いかんせん周りは金持ちばかりで俺みてーな庶民が入り込む余地なんて欠片もないって感じがするから。
けどこの時の俺は多分――いや間違いなく予想もしていなかった。この一枚のチラシが切っ掛けで俺の人生はコメディよろしく賑やかなものへ豹変していくことを。

料理研究部同好会（前書き）

今にして思うとセレブ設定はちょっと無理があったかなと後悔。でもいいもん、やってみたかったから。
オリジナル小説ってやっぱり難しいですね。（´・ω・）

料理研究部同好会

白鷺学園の特色を挙げるとすればポイント制なるものが導入されていること。これは成績とは全くの別物で普通に過ごすなら気にするようなものでもない。

ただ、大半の生徒はこのポイント制を活用しているのが現実だ。というのもこのポイント制、学校行事や部活動、更には自主的な活動によって溜まるものでポイント毎に学園側から特典がもらえる。

クラス委員長の立候補、定期試験で上位に入る、大会で好成績を残す、体育祭で優勝する、新人漫画賞の受賞、エトセトラ……。

こうした自主活動によってポイントは溜まり、様々な特典と交換できる。その特典というのは部費の割り増しだったり学食を安くしてもらったり（これは俺も狙ってるがまだポイントが足りない）学校主催の夜会の招待券が貰えたり……まぁ大きく分けるとそんなところだ。中でもダントツ人気なのはさっき言った夜会。出席するだけで学園全体の注目を浴びるのは勿論だが、上手く取り入れれば将来の取引先に……なんてこともある。もっとも、この招待券を獲得するには三百ポイントという高いハードルをクリアする必要があるから毎年、出席できる人間は一人か二人。それだけ、学校側主催の夜会は特別な場所なのだ。（因みにこのノルマをクリアするなら中間・期末でほぼ満点に近い成績を取らなければ無理と言われてるぐらい難しい）

そんな一風変わったシステムを導入しているせいか、ここの学園生たちは他校と比べると非常に自主性が高い。勿論、ポイントに興味のない生徒だっているけど半数の生徒（当然その半数の大半がセレブ）は夜会の招待券目当てに日夜ポイント稼ぎに必死になっている。勿論、最終的にポイントにしていい活動かどうかは理事長の独断で決めることだけど。

……とまぁ、つまらない話はこのぐらいでいいな。俺もこんな話

してても面白いとは思わないし。
「ごきげんよう。弥生さん」
教室に入ってくるなり、耳障りの良い声が届く。うーむ、入学してから随分経つけど未だに彼女だけは慣れないんだよなぁ。さっきの挨拶といい、全身から滲み出るオーラといい……。
「弥生さん、どうしました？」
ほらな。俺が一人で勝手に悩んでいると親身になってくる。……いや、別に避けてたりとか嫌ったりしてる訳じゃないぞ？　ただその、なんつーか……慣れないんだよな。彼女の仕草とか。
「あぁゴメン雫さん、おはよう。少しぼんやりしてたよ」
「寝不足ですか？」
「そんなところ」
彼女の問いかけに答えつつ自分の席に付く。
彼女は相原雫。いわゆる女友達ってやつだ。元を辿れば華族という何とも雅な経歴を持つ古風な家柄。現在は投資家として経済界を影から支えている……というのが周りの風評。生まれがどうこうってわけじゃないけど雫さんの育ちの良さは本物だ。あと、先に断っておくと彼女とは本当にただの友達だ。幼馴染みとか腐れ縁とかそういうありふれた設定なんてない、本当に高校に入ってから知り合った間柄なんだが――
「そういえば先日、弥生さんが言っていたドラマ、私も見ましたわ」
ご覧の通り、彼女は俺に対して好印象をお持ちのようです。そして彼女のお陰で俺もこの学校の常識に馴染めたりしたのもまた事実。ただ、お互い距離が近いこともあってクラスメイトからは『いつまでも告白しないカップル』とか言われてる。
「あのドラマ、見たのか？」
「はい。ああいうお話は今まで見たことがなかったので新鮮味があって大変面白かったです。ストーリーの方も良く作られていましたから来週がとても待ち遠しいです」
そう言う雫さんの顔はお世辞でも何でもない、本当に俺が勧めた

ドラマを気に入ったみたいだ。内容は凄腕の探偵が狡猾な犯人と頭脳戦を繰り広げるサスペンスもの。サスペンスだから犯人は最初から分かっているんだが犯人と探偵とのやり取りが実に面白かったから娯楽物をあまり見ないという彼女に気紛れで勧めてみたところ、アタリだったみたいだ。

「また今度、面白いものがありましたら教えて下さいませ」

そう言い残すと雫さんは異性なら誰もが見惚れるような笑顔を見せてから自分の席へと向かっていく。流麗、とでも言うんだろうな。手の動かし方一つ取っても粗がない。伊達に箱入りはしてなかったってことか。

「……」

さて。いい加減構ってやらないと騒ぎ出しそうな奴が側に居るし、構ってやるとするか。

「いつまで拗ねてるんだ水瀬」

「拗ねてるだって？　失礼なことを言うなっ！　キミと僕とでは勝負にすらならないんだ。これは……そう！　高みの見物ってヤツさ！」

いやお前、そう弁解してる時点で拗ねてるの丸分かりだから。

「しかし、前から思ってたんだがキミという男は随分大胆だな。僕と雫は幼馴染みだからまだしも、彼女があんな風に異性と話すのはキミと僕だけだということを知ってるか？」

「いや、知らないな。……あとお前、雫さんと幼馴染みだったのか？」

「やれやれ……本当、庶民というのは周りの情報に疎いね。少しは僕のように周りにアンテナを立てるとかそのぐらいの努力をしたらどうなんだい？　それ以前に僕と雫が幼馴染みなのはこの学園じゃ一般常識だ」

「……」

相変わらず嫌味満載な言い回しだな。と言ってもこいつの場合、邪気がないから言うほど腹を立てることもないから俺も露骨に突っ

かかったりはしねーけど。
……あぁそうだ。こいつの自己紹介、すっかり忘れてたな。このナルシスな野郎の名前は水瀬哲也。セレブであることに違いないが家の方針で庶民とそう変わらない環境で育てられた。あまり公言したくはないが中学が同じだったこともあるし三年以上も付き合いがあれば自然と友人と呼べる関係となるんだが……友達と呼んでいいかどうかは正直微妙なトコだな。
補足すれば今朝、ヘリで登校してきた生徒の正体はこの男だったりする。こう見えて水瀬は有事の際に当主代理を務めるほどの力を持ってるらしい。まっ、当主代理とか言われても俺は生徒として振る舞ってる水瀬しか知らないから実感ないけど。
「キミも知っての通り相原家は元を辿れば華族だが、僕の家もまた昔は華族だった。しかも家は両隣！　ならば僕と雫が幼馴染みなのは当然と言える！」
そういうモノなのか？　うちのお隣さんは俺と歳は変わらないけど幼馴染みって間柄じゃないぞ？　それにお前の場合はたんに昔から付き合いがあっただけだと思うぞ？
「だからこそ雫が白鷺学園を受験すると聞いた時は我が耳を疑ったね。相原家の規則はキミが思ってる以上に厳しい。本来なら雫はお嬢様専門の女子校に通わせて大和撫子にする予定だったそうだ」
「ここも充分立派なところじゃないか。共学だけど」
「ふっ……その貧困過ぎる発想は如何にも庶民だな」
庶民で悪かったな。どうせ特待生で入学しただけのハリボテセレブですよ。
「いいか庶民？　白鷺学園はセレブの子息・息女らが多く通うところだが――同時にキミのような庶民生まれの奨学生が一クラスに一人二人ぐらいは居る。そしてここはセレブが通う学園特有の世間から隔離された空間……という感じがない。つまり、本物の金持ちたちからすれば白鷺学園など、ただの滑り止めでしかない！　それでもここを第一志望に選ぶセレブは僕のような家庭の事情を抱えてい

る人間ぐらいだろうねッ！」
　水瀬の言い分によればそうらしい。確かに白鷺学園は世間のど真ん中にあるセレブ向けの学園だ。校門から出て五分と歩かない距離にコンビニはあるし、もう少し足を伸ばせば主婦たちで賑わう商店街やらゲーセンなんかがあるから悪影響（あくまで金持ちの主観でだが）を与える要素は充分にある。何故そういう俗物が上流階級の人間に悪影響を及ぼすのか未だに分からないけど。
「その雫がわざわざこの学園を選んだのは恐らく社会勉強の一環だと僕は推測する。ご両親が折れたのか、それとも親の勧めで入ったかは定かではないにしろ、彼女は望んでここへ来た。……まぁ、入学当初は随分とキミみたいな庶民に頼っていたようだがね」
「それは――」
「僕は中学時代に嫌というほど庶民の生活を知ったが雫は違う。キミも思わず頭を抱えるような場面に遭遇したことぐらいあるだろう？」
「……」
　そんなことはない――とは否定はできなかった。流石にニュースで報道されている程度の芸能人は知っているみたいだけど年間で数える程度しか外食をしたことがないってのは凄く意外だった。なんでも食事は極力、お抱えのシェフが作ったものを食べるようにしているらしく、昼食が必要な時は弁当まで作らせるというから本当驚いた。
　……あぁそうだ。そういえば俺と雫さんが知り合いになった切っ掛けってのもその辺りなんだよな。
「何を考えてるんだキミは？」
　俺の回想は水瀬の言葉によって遮断し、無遠慮に顔を覗き込む。近づかれるまで気付けなかったので思わず椅子を引く俺。そのせいか、水瀬はますます探るように注視してくる。
「まさか、雫をダシにやましいことでも考えてるのかね？」
「べつに大したことじゃねーよ」

「そうかな？　人間というのは大したことを考えているときほどそういう受け答えをする傾向が強く見られる。さしずめ、どうやって彼女を口説き落とそうか考えてたところだろう」
「んなこと考えるかっ。大体俺はお前みたいに街に出てナンパとかしねーんだって」
「それはつまり、自分は身が固いんだという雫へのアピールかね？」
だからどうしてそういう方向性に話が進む？
「キミは彼女のことをただの友達だと言ってるが周囲の評価はそれとは違う。いくら良家のお嬢様とはいえ、毎朝『弥生さん、ごきげんよう……』なんて親しげに挨拶する場面を見れば誰でもそう思う！」
うぐっ。また痛いところを……。
この男の言う通り、雫さんはクラスの男子生徒のことを苗字で呼ぶけど俺だけは名前で呼んでるし俺も彼女のことは名前で呼んでる。オーケー、その点は認めよう。同学年の男子生徒の中じゃ俺が親しい人間だってことも認める。だがな――
「呼び方なんて人それぞれだろ？」
雫さんが俺をどんな風に呼ぼうが俺たちの関係は変わらないし、親しいからと言って互いの名前を呼び捨てで呼ぶ関係になるとも限らない。少なくとも俺はそう思ってる。
「ふむ、庶民にしてはなかなかの切り口だ。……しかしそれはあくまでキミ個人の考え方だ。もとより、呼び方というのは相手との距離感を表す重要なファクターだ。少なくとも互いを苗字で呼び合うよりも名前で呼び合えば親密度が高いように見えるのもまた事実」
水瀬の言葉に呼応するように周りで聞き耳を立ててた野郎たちが一同ウンウンと頷く。
……えーっと、なに？　俺ひょっとしてクラスの男子を敵に回しちゃってる感じ？
これから一方的な尋問でもされるかと思った矢先、奥のドアがガラガラと音を立てながら開いた。

「ほらほら皆さん、席に着いて下さい。本鈴が鳴ってから着席するのではなく、きちんと着席した状態で気持ちを構えて本鈴を聞くのが学生としての正しい在り方ですよ」

クラス担任の登場でそれまで騒然としてた教室に静寂が小波のように広がっていく。去り際に水瀬が『続きは後で訊こう……』なんて毒づいていたのはきっと気のせいだと自分に言い聞かせる。

うちのクラスの担任を勤める先生の名は柊隆一。爽やかな笑顔で人当たりもよく、生徒一人一人を大事にしていることもあって男女共に人気のある先生だ。（因みに教科は現代文）

柊先生の言葉を皮切りに学校全体に本鈴が響き渡る。その頃にはもう校門前で貰ったチラシのことはすっかり忘れていた。

滞りなく授業を進めていき、あっという間に昼休みを迎える。そうなると普通の高校なら開幕ダッシュならぬ学食ダッシュが校内で起きるものだろうがここではそんなのは起きない。家柄云々じゃなくて、たんに減点行為に入るから。それでも稀にやって風紀委員に注意されるのを見かけるのはやはりお決まりというのだろう。

いや、そんなことはどうでもいい。今日はテスト明けということもあるしたまの贅沢ということで学食でも活用するか。普段はコンビニで買ったパンだったり節約の一環で作る手作り弁当だったりするがたまにはこういう贅沢をしてもバチは当たるまい。

大方の人は既に予想してるかも知れないが当然、この学園の食堂にはいわゆる『B級グルメ』的なメニューが存在しない。辛うじて庶民の俺でも知ってるようなパスタは存在するがそれにもトリュフが使われてたりする。他にはフォアグラテリーヌだとか懐石料理だの日替わりフルコースとまーとにかく色んな意味でスゴイところだ。ここだけ聞けば当然、俺みたいな庶民には手が出ないように思えるかも知れないが一応、この学校は俺みたいな庶民出身の特待生のことも配慮して庶民でもお求め安い価格で提供している。

学食の券売機で紙幣を入れて小慣れた手付きでボタンを押す。本

日のメニュー、オーソドックスなスパゲティの大盛り。これで五百円の出費で済むのだから有り難い。町中にある外食店で同じものを食べようとすれば普通に千円は超えるからどれだけ安いかが良く分かる。（因みに最初に言ったトリュフのスパゲティは八百五十円で食べられる）

受け取り口で中年のおばちゃんからスパゲティの乗ったトレーを受け取って適当に空いている席を見繕って座る。俺が人影に気付いたのは椅子に座った直後のことだった。

「この席、空いてますか？」

「勿論、空いてるわよ」

そう訊かれたから何も考えずに答える。別に一人で食事をしたいとかそういう変な願望はないし、来る者を拒むほど野暮な人間じゃない。

「あれ？　キミもしかして今朝校門前でチラシ拾ってた子？」

ん？　校門前でチラシ？

……。

あー、そう言えばそんなもの拾ったっけ。言われるまですっかり忘れたな。

少し気になったので相手の顔を見てみると確かに今朝、校門前でチラシを配っていた女子生徒だった。朝の時点ではまともに顔も見なかったけど顔つきが日本人離れしている。人の目を引く銀髪に古典的な欧州美人、そしてモデルのような体躯。我ながらよくぞこんな美女を素通りしたものだ。

「どうして俺だって分かったんですか？」

「ん～、なんとなく目に付いたからね。それにチラシに興味を持ってくれた人は本当に片手で数えられる程度しかいなかったってこともあるから、かな？」

なるほど。それなら顔を覚えられるのも不思議じゃない。それにしても昨今のセレブはチラシもまともに受け取らないのか？　そう思うと急に先輩が配っていたチラシが街頭で行き交う人々に渡すポ

ケットティッシュと同等に見えてきた……。
「ここで会ったのも何かの縁だし、自己紹介でもしよっか。私は三年生の桐生玲子。今では同好会となった料理研究部の部長よ。キミは？」
「一年の紅瀬弥生です。ところで今では同好会となった、と言ってましたが以前はちゃんとした部活だったんですか？」
つい好奇心からそんなことを訊いてしまい、すぐにまずいと思った。これじゃあどう見ても脈アリって反応にしか見えねーじゃねぇか。完全に選択ミスったな、俺。
「うん。実は料理研究部は一昨年まではちゃんとした部活だったんだけど私が入部した時期は一年が私だけで後はみんな三年生だったの。で、去年は見事に新入部員がゼロだから事実上料理研究部は同好会に降格。ちゃんとした部として認められるには最低でも三人は部員が必要なの。そして普通の部活のように部費が欲しければ更に二人、計五人の部員さんがいないと駄目って訳」
なるほど。だからあんなに熱心に勧誘してたのか。しかも部費が欲しければある程度の部員数を確保する必要があるのか。部活勧誘も大変だな。
「大変そうですね」
と、さして興味なさそうに言ってスパゲティを食べる俺。そんな俺の反応が意外だったのか、それとも単純にさっきとは対照的な反応だったからか、桐生先輩は目を丸くして俺の方を見ていた。
「キミ、入部希望者じゃないの？」
「えぇ。チラシが舞い踊っていたのが偶然目に止まってそれを読んで同好会があると知っただけですし、俺には入部する余裕もありませんので」
放課後は買い物するなり朝出来なかった家事仕事を片付けたりしなきゃならないから部活なんかしてたら家の仕事が滞ってしまう。世の中家事仕事を甘く見ている野郎共が多いが家事ってのは突き詰めれば体力と忍耐がモノを言う世界だから決して楽な仕事じゃない。

うちは親父と二人暮しだからまだ負担が少なくて助かっているけど。
「う～……じゃあさ、部活見学だけでもしていかない？　今時男の子も料理できないと色々不憫でしょ？」
「はぁ……」
料理ぐらい普通に出来る――と言おうと思ったけど流石にそれは相手を侮辱するような気がしたので俺は曖昧に返事をした。個人的にはその、家事尽くしの生活は嫌だから今すぐにでも断りたい。
断りたい――のだが、どうしてか俺は困っている人間が居ると衝動的に構いたくなってしまう節がある。いわゆる、『頼まれたら断れない』タイプの人間って奴だ。と言っても俺自身、生活があるから安受けはできないけど――
（中途半端な気持ちで頷いちゃったらまずいよな）
勿論、相手ではなく俺がまずいという意味で。このまま話の流れで見学すれば多分……というか八割方入部してしまいそうな流れになる。なんかないか、上手く断る方法。
「あ、勿論無理にとは言わないよ？　紅瀬君にも考える時間は必要だから今は返事しなくていいから。……でももし見学だけでもしてくれるっていうなら放課後、家庭科室前まで来てね。私の家に案内するから」
「家？　部室じゃないんですか？」
「うん。さっき言ったように今の料理研究部は同好会だから部室が与えられてないの。だから実習は私の家ってことになるの」
あー、そういうことね。確かに部でもないところに部室を貸し与えたら他の部や同好会に示しが付かないよな。それでも部になったからと言って良い部室が貰えるとは限らないけど。
「そういうことだから入部、前向き考えといてね♪」
話はそれで終わったのか、先輩はようやく自分の分の昼食を摂り始めた。やはり先輩もイイトコ育ちなんだろう、よどみない動作でナイフとフォークを操ってハンバーグ定食を食べていく。食器の使い方が綺麗で気付きにくいがこの人、何気に俺より食べるの早いな。

俺がスパゲティを半分ほど食べ終えた頃には既にハンバーグ定食を食べきっていた。
「ご馳走様」
「えっと、お粗末様でした……？」
待て俺。律儀に答える必要あったか？　しかも最後、疑問系になってるぞッ！
「面白いね、紅瀬君って」
「いやいや、俺なんて面白くともなんともないですよ」
俺が面白いというなら水瀬なんかはもっと面白い部類に入るぞ。自分を格好良いと思い込んでるけど実際、やる気だけが空回りするタイプのキャラだし。……あくまで俺基準の話だが。
「……」
桐生先輩はもう食べるものがないので何気なく俺の方を見ている。別に気にならなくはないがこうも真正面からじぃ～っと見られたまま食事をするってのは落ち着かない。しかも相手はテーブルマナーが行き届いた人間。にわか程度しか知らない俺の食べ方なんて汚く見えるに違いない。先輩がそう言った訳じゃないけど、やっぱりそういう人間を前にすると意識してしまう。
「あはっ、さっきまで普通にしてたのにどうして急に緊張しちゃうの？」
「どうしてって……」
先輩がお嬢様っぽく見えるから――なんて軽率な発言が出来るほど俺は空気の読めない人間じゃない。金持ちに対して劣等感を抱いているというよりも自分の庶民っぷりにちょっとへこむというか……まぁそんなとこだ。雫さんや水瀬が居なかったら今頃はきっと変なコンプレックス抱えて塞ぎ込んだままの日々を過ごしていたに違いない。
「……」
無言で俺のことを見る先輩。なんかさっきまでのフランクな感じから一転してシリアスな雰囲気を匂わせる。観察というより相手を

見定めるように目を細めて何度か頷く。……あれ？　俺、今の流れで何か失言でもしたか？
「あの、先輩……もしかして何か気に障ることを言ってしまいましたか？」
　原因は分からないが桐生先輩の様子から言って俺に非があるという予想は付く。俺としてもこのまま気まずい空気の中で食事はしたくないからさっさと謝っておきたい。……が、先輩の口から出た言葉は俺が予想していたものとは少し違ったものだった。
「別にキミが悪い訳じゃないわ。私の方こそ空気悪くしてごめんね」
「……」
　言葉ではそう言っているものの、声色には僅かに不機嫌さが混ざっていた。
　もしかしてあれか？　昨日テレビでやっていたけど、どうも女ってのは男の些細な行動で幻滅するって言ってたな。……もしや、俺はそれを無意識のうちにやってしまったというオチか？
　もしそうなら彼女の態度には非常に納得がいくし、これ以上俺が藪を突けば先輩の機嫌を損ねるのは明白だ。だから俺はそれ以上、言及せずに黙ってスパゲティを食べることにした。さっきよりもいくらか緊張は解けたけど、やっぱり気まずい雰囲気だけは振り払えなかった。

お嬢様の調理実習（前書き）

箸より重たいものを持ったことのないお嬢様、いざ調理に挑戦！

……でも調理というほど調理してないという罠。

お嬢様の調理実習

「起立――礼！」

日直の号令と共に皆が一斉に同じ行動を取る。一日の授業が終わりを告げ、放課後がやってきた。俺は鞄に教科書を詰めながら今日の予定を頭の中で組み立てていく。

（洗い物はやってなかったから夕飯の支度する前にやっておくか。冷蔵庫の中は今日一日持つから買い物は明日にしよう。あと足りないものとかあったか？）

俺の記憶が確かならそろそろシャンプーと洗剤がなくなりそうだった気がする。別に今日買い物しなくても数日ぐらいは保つけどこういうものは早めに買った方がいい。それにインスタント食品もそろそろ底を尽きる頃だし、この際だからまとめ買いしておくか。

「それじゃあ雫さん、また明日」

「はい。弥生さんは真っ直ぐ帰宅ですか？」

「いや、商店街で買い物してからだな。雫さんは？」

「料理研究部の方に顔を出してみようと思っています」

「……。料理、研究部？」

「えぇ。弥生さんはご存知ないですか？」

「いや、知ってるけど……」

なんつったって昼休み、偶然席を同じにした部長に勧誘されたぐらいだし。もしかして雫さんは今朝、校門前でチラシを受け取ったのか？

「雫さんは直接、チラシを貰ったのか？」

「はい。……実は私、料理というものをしたことがないのでこの機会に少しでも料理ができればと思いまして入部しようと思ったんです」

「あー、なるほど」

雫さんに料理スキルがないと知っても俺はさして驚かなかった。

話の端々で推理してたんだがどうも相原家は大半の仕事を使用人に任せる感じがある。多分、両親も料理しないんだろうなぁ。お抱えのシェフに頼ってるみたいだし。

「弥生さんは料理の方は得意ですか？」

「手の込んだものじゃなければ」

俺が作る料理と言えば簡単で大量に作れるものが多い。その最たる例がカレーやシチューといったもの。あれは一度に沢山作っても二日ぐらいは普通に冷蔵庫の中で保存できるという小技が活きるから素晴らしい。餃子は未経験だが作ろうと思えば作れるかも知れない。餃子の中身だけ作って残りは冷凍保存っていうやり方があったから餃子の作り置きも出来る筈だ。

だが俺にはそうした、明らかに手間の掛かる料理を作る気はない。経済的な理由ではなく、単純に面倒だからという理由で。例外として焼き魚ぐらいなら時々作ってやってもいいかなって思う。こっちは好みの問題。

「弥生さんもどうですか？　料理のレパートリーを増やす良い機会だと私は思うのですが？」

「レパートリーねぇ……」

雫さんの言うことも一理ある。けど俺は基本、料理は本やテレビを見て勉強する派だから料理部にはそれほど興味が沸かない。毎日の食事は出来る限り安価で済ませようってタイプの人間だし。何より昼食の一件もあって少しばかり顔を出しにくい感じがあるが雫さんの言う、レパートリーを増やすってのは素直に名案だと思った。

……ちょっと待て俺。なに前向きに入部を検討してんだ？　いやでも、見学だけはいいって言ってたし全く興味がない訳でもないし……。

「……じゃあ、見学ぐらいなら」

言っちゃった、言っちゃったよ俺。しかも完全にその場のノリで返事しちゃったし。流石にあんなことがあった手前、堂々と見学するってのも気恥ずかしいものがあるけど……うん、友達の付き添い

ってことにしよう。
「では。早速参りましょうか」
にこやかな笑顔を見せてから雫さんは一直線に家庭科室を目指す。何処もH・R・が終わった直後らしく、廊下は人の往来が激しい。中には本当に躾の行き届いた生徒もいて、俺や雫さんみたいな下級生に対してもちゃんと挨拶してくる。雫さんは慣れた様子で返事をしたけど俺なんかは不意打ちも同然だったから思い切りどもったりカミカミで返事したりして笑われる始末だ。
「弥生さんって、もっと堂々とした方だと思っていたけど……意外ですね」
「俺だって緊張ぐらいするぞ」
目立つような功績もなければ運動部に所属している訳でもない。それに雫さんは知らないだろうけど入学当初なんか俺、まともに人と話せなかったんだぞ？　周りは中等部から持ち上がりで来る奴等が多いし昔からの友達グループがそのまま同じ学校選んだって連中が大半だったから非常に混ざりにくかった。
そんな世間話に華を咲かせつつ、三人目に会った上級生にごきげんようと声を掛けられた頃には俺も随分リラックスして答えられた。最初に挨拶した上級生（金髪セミロングでちょっとキツそうな女子生徒だった）なんかはなんか引け腰で挨拶してたし、俺。そんな過去の余韻に浸ろうとした時は既に家庭科室が目と鼻の先にあった。
「失礼します」
一言、断りを入れてから楚々とした仕草で扉を開けて入室する雫さん。釣られるように俺も足を踏み入れると先輩が少し退屈そうに据わっているのが目に留まった。
「ようこそ、我が料理部――て、紅瀬君じゃない。やっぱり来てくれたのね」
「えっと、自分は付き添いで来ただけです」
「……？」
俺の返答に若干の戸惑いを見せる雫さん。きっと彼女の中で俺は

入部を前提に見学しに来たということになってるんだろう。見学ぐらいなら、と言っただけなのに……。
「そう。……あぁそうだ、そっちの娘にはまだ自己紹介してなかったわね。私は三年の桐生玲子。料理研究部……と言っても今は同好会だけどね、部長をしてるわ」
「初めまして、桐生先輩。一年の相原雫と申します。……あの、先輩は弥生さんとはお知り合いだったんですか？」
「えぇそうよ。実はここだけの話なんだけど私と紅瀬君は幼馴染みでね、昔はよくお姉ちゃんって言いながら私の後ろに――」
「変な嘘教えないで下さいッ。……雫さん、桐生先輩とは昼休みの食堂で偶然会っただけだから」
「そ、そうでしたか……」
一緒に昼食を摂った時からそうだったけど先輩って案外フランクな感じなんだな。けどいくら冗談好きとはいえ、いきなりそういうネタを振られたら対応に困るぞ？　ぶっちゃけ、俺と先輩の友好関係ってまだ知り合いの一言で片付くものだし。
「よし！　今日はもう人が来る気配もないし、早速行きましょうか」
「行くって……先輩、他の見学希望者は待たないんですか？」
「えぇ。今朝配ったチラシを受け取ってくれたのは相原さんを含めて二人だけだから。そしてチラシを受け取ったもう一人はアタシの熱意も届かずあっさり断られちゃった。てへ♪」
いや、そんな可愛く言っても俺が入部しない限りは何も解決しないんじゃ？　しかもその断れた人ってのが暗に俺のことを言ってるように聞こえるのは気のせいか？
「あぁそうだ相原さん、今うちは同好会だから事実上、部室となる家庭科室は許可が下りないと使えないから代わりの私の家で見学会ってことになるけど構わないかしら？」
「はい。問題ありません」
「よぅし！　そうと決まれば早速行くわよ～！」
いやー、マジでテンション高いなこの人。でもって微妙に仕切り

魔的な臭いを漂わせてるよ。元気なのはいいことだが俺、先輩のテンションに付いてこれるかな？

桐生先輩の家は学校から歩いて十五分ぐらいのところにある高級マンションがそうだ。父は弁護士で母親は広告代理店勤め。白鷺学園で料理研究部をやるぐらいだからてっきり両親が料理家とばかり思っていたんだが彼女のそれは趣味でしていたのがいつの間にか自分の一部になったとか。

マンションのロビーでセキリュティを解除してエレベーターに乗る。先輩に言われるがまま五階と表示されたボタンを押す。

「何を作るかはもう決めてあるんですか？」

部屋に着くまで暇なので興味本位で聞いてみる。けれども先輩は笑顔で『それは着いてからのお楽しみよ♪』としか答えなかった。一体何を作る気でいるんだろう？

エレベーターが静止して、僅かな間を空けてから扉が静かに開く。先輩が先頭に立ち、借りてる部屋へと案内する。何気なく玄関先に付いているプレートを見てみるとそんなに入居者がいないことに気付いた。

「空き部屋が多いようですが、マンションというのは何処もこんな感じなんですか？」

俺と同じことを思ったのか、雫さんが思い切って先輩に尋ねる。

「どうかしら？　このマンションって結構イイトコだけど駅から離れているし人通りも少ないから正直、言う程人気はないと思うわ。……ところで相原さんは徒歩で通学してるの？」

「いえ。毎日送迎させて頂いてます」

「ふぅん。紅瀬君は？」

「俺は庶民ですから電車通学ですよ。本当は自転車使いたいんですけど学校側が認めてませんから」

寧ろ俺みたいな電車通学を希望する生徒は少数派だろう。徒歩で通学している人も半数ぐらいは居るみたいだけどそういう人たちっ

て大体、事前にガードマンが通学路の安全確認してるらしい。それらしき人間なんて見たことないけど。
「自転車通学かぁ。歩く人にはすごく魅力的な響きよねぇ。……と、ここがそうよ」
言われて、ネームプレートを見上げる。そこには確かに桐生と書かれていた。先輩は慣れた手付きでポケットから鍵を出すと難なく開錠して扉を開けて俺と雫さんを中へ招き入れる。
「お邪魔します」
「お邪魔します……」
「あはっ、そんなに固くならなくていいわよ。別に凄いところって訳じゃないんだから」
俺からすれば充分凄いです――
その言葉をどうにか喉元で飲み込んで靴を脱いで中へ案内してもらう。少し歩くと清潔感溢れるリビングが目に止まる。奥行きもあって、くつろぐには充分なスペースだ。チラリと、キッチンの方を見るとコマーシャルなんかでよく見かけるタイプのシステムキッチンだった。桐生先輩の言葉通り、古典的なお金持ち的な気品さは窺えなかった。
先輩に断りを入れてから鞄を椅子に置き、勧められるがまま椅子に座る。彼女は一度自室に戻って着替えると言って足早に部屋へと戻っていく。何もすることがないので俺はぼんやりと天井を眺めていたけど雫さんは興味津々といった感じで周囲を見渡していた。
「何か珍しいものでもあったのか？」
「いえ……。私、実はこういう所に入ったのは初めてなんです」
こういう所って……マンションのことか？　そう訊くと雫さんは短く『はい』と答えた。
「私の家……と言っても弥生さんも一度来たことがあるから分かると思いますけど、いわゆる洋館みたいなところでしょう？　ですからここは私の家と違ってとても生活臭があるように見えるんです」
そ、そうか？　俺に言わせればこれは生活臭って言葉よりも清潔

って言葉の方がしっくり来るんだが。もしこれで生活臭溢れる空間というならうちは豚小屋確定だぞ？　今朝の状態だと食器は流し台に入れっぱなしだしテーブルの上はゴチャゴチャしてるわ少し目を離すとビールの空き缶が隅っこの方に転がってたりともー大変なんだこれが。親父に何度注意してもビール缶をすぐに片付けるクセは身に付けてくれねーし俺も掃除をサボることがあるから小汚いイメージは拭いきれない。

「お待たせー！」

俺が一時の感傷に浸っている間に桐生先輩は着替え終え、上機嫌でリビングにやってきた。赤いハイネックの上から着けた花柄エプロンにジーンズ。これが先輩の勝負服って奴か？　……んなわけねーか。

先輩自身、この服装（というかエプロン？）がお気に入りなのか、紙袋を引っさげたまま上機嫌に俺と雫さんのもとへやってくる。……あれ、紙袋？

「どう、紅瀬君？　家庭的な奥さんって感じしない？」

「どちらかといえば花嫁修業中の恋人ですね」

非常に申し訳ないが桐生先輩の年齢じゃどう頑張ってもそれが限界だ。第一、家庭的な奥さんがどういう人柄なのか俺には分からないし。

「む～、紅瀬君冷たいぞっ。ねね、相原さんはどう見える？」

「はい。とても可愛らしいです。花柄のエプロンなんて桐生先輩らしくていいと思います」

どっちかと言えば花柄エプロンは雫さんの方が似合いそうな気がするんだがそれは俺だけか？　ついでに言えば俺は面倒臭がってエプロンなんか付けずに料理する。

「ところで先輩、手にしている紙袋は何ですか？」

「なにって……紅瀬君と相原さんのエプロンと三角巾だけど？」

「エプロンと三角巾、ですか？」

「うん。色々考えたけどただ見るより実際にやった方がいいと思っ

てね」
　なるほど、百聞は一見に如かずってヤツか。考えてみれば料理研究部の見学なんて見ただけじゃきっと入りたいとは思わないだろう。ならいっそのこと調理を体験して潜在意識下にある入部したいという気持ちを高めるのが先輩の目論見らしい。だけど相変わらず肝心なこと――つまりは何を作るかまでは聞いていないからいくらかの不安もある。
「それじゃ、早速説明に移るわね。今日、私達三人で作るのはいわゆるデザートものよ」
　デザートだって？　俺はてっきり食事もので来るとばかり思ってたんだが……。これには相原さんも俺と同意見らしく、少し遠慮がちに手を挙げている。
「あの、桐生先輩」
「はい、相原さん。どうぞ」
「今回作るのはデザート、なんですか？」
「えぇ。勿論うちのモットーはデザートに限らず普通の料理だって作るわ。ただ、今回は時間もないから簡単なものを作ることにしたの。手の込んだものを作るとやっぱり時間を浪費しちゃうからね」
　なるほど。先輩はこの辺りのことを考慮した上でデザートにした訳か。納得。
「今回作るデザートはずばり、ホイップクリームのチョコレートソース！　個人差があるけど大体十五分ぐらいで作れちゃうから」
　そう口で説明しながら先輩は手際よくキッチンと冷蔵庫から必要な道具や材料を取り出していく。その間、俺たち二人は渡されたエプロンと三角巾を身に付ける。俺はあやめの花で雫さんはクリスマスローズの柄をあしらったエプロン。この花柄は先輩の趣味なのか？　男が花柄エプロンとか想像以上に恥かしい……。
「弥生さん、エプロン姿がお似合いですね」
「あやめの花が綺麗だからそう見えるだけだろ？」
「そんなことありません。少なくとも私よりはずっと板に付いてま

すよ」
　雫さん、流石にそれは大袈裟だって。けど桐生先輩が着けてるヤツもそうだけどこの花柄エプロン……本当によく出来ているな。男の俺でさえちょっといいかもって思うぐらいの出来栄えだし。
「――オッケー、準備が出来たわ。二人ともキッチンの方に来て頂戴」
　先輩の声で我に返り、言われるがまま俺と弥生はキッチンの方へ向かう。そうだ、今日はおしゃべりをする為にここへ来たんじゃない。あくまで見学という名の調理実習を体験する為に来たんだ。キッチンにはラズベリーや市販のチョコレート、ホイップクリーム、他多数に加えて人数分の皿と道具が所狭しと並んでいた。
「まずはチョコレートを細かく刻んで。なるべく細かくね」
　言われるがまま、板チョコを包丁で細かく刻む。キャベツの千切りをするような感じでやってみたけど如何せん相手は板チョコ。キャベツと違ってサクサク切れない。なんかこう、おろし金で一気に細かく刻みたい気分なんですけど？
「そうそう、相原さん。時間は掛かってもいいから細かく刻んでね。そうした方が早く溶けるから」
　どうやら雫さんは先輩がしっかりとフォローを入れているようだ。包丁を握ったことがないのか、不器用ながらも上手くチョコを刻んでいる。
「さて、紅瀬君の腕前の方は……へぇ。紅瀬君、相原さんと違って包丁使い慣れてるわね。よく使うの？」
「ちょっとしたものを作る時に使う程度ですよ」
　実際、俺が包丁で切る相手なんてカレーに入れる野菜ぐらいだし。間違っても魚を三枚に下ろしたり大根のかつらむきなんて芸当は出来ない。
「ちぇ。折角頼れるおねーさんが手取り足取り優しく教えてあげよーと思ったのに。教え甲斐がないぞ、コイツめ」
　ちょんちょんと、俺の頬を二度三度突いてから先輩は再び雫さん

のフォローに回る。その頃にはもう板チョコを半分ぐらい刻んでいたから用意されてあった小さめの容器に刻んだチョコを入れて残りの半分に取り掛かる。

「紅瀬君、私が相原さんの面倒を見ている間に次の作業、お願いできる？　鍋に砂糖と水を入れて混ぜながら沸騰させて。で、沸騰したら私と紅瀬君、相原さんのチョコレートを入れるから。あ、その時に火は弱火にしてね」

「分かりました」

指示された通り、俺は次の工程の準備に取り掛かる。雫さんの指導に一区切り付いたところで先輩も自分の分の調理に取り掛かる。こっちはもう本当に上手い。プロも顔負け、とまではいかずともとにかく手付きが鮮やかだ。淀みない動作で板チョコを均一の大きさに刻みつつ、手捌きは素早く動かす。

「――うん、こんなところでいいわね。それじゃ、相原さんにはホイップクリームを作ってもらいましょう。ボールに市販の生クリームがあるからそれを入れて頂戴」

「どのぐらい泡立てれば宜しいですか？」

「そうねぇ……泡だて器で五分立て――なんて説明しても分からないわよね。液体だけど粘り気が出る前の状態になるまでお願い」

「分かりました」

どうやら雫さんの料理センスは目に見えて酷いというレベルではなさそうだ。箱入り娘とは言え、彼女は頭のいい娘だし要領は決して悪くない。ただ、料理をする機会に恵まれなかっただけで然るべき訓練さえ受ければ恐らく大凡のことはこなせるんじゃないかと思いつつ、砂糖水が沸騰したので刻んだチョコレートを入れてコンロの火を中火から弱火で混ぜる。頃合いを鍋を火から遠ざけてスプーンで出来栄えを確かめてみる。

……うん。チョコソースは初めて作ったけど上手く出来ている。先輩が予めきっちり材料を適量に分けていなかったらこうはいかなかったに違いない。

「あはっ。ちゃっかりつまみ食いしちゃってるのかなぁ～？」
「してませんって！」
いや、ちょっとはしようかなって思ったけど――なんて思った矢先に俺の横から何か腕が伸びてるその手は何ですか……？
「人に注意しておきながらつまみ食いしている先輩は何ですか？」
「私のはつまみ食いじゃなくて味見って言うのよ」
「人はそれを屁理屈と言うんですよ。知ってますか？」
「ノンノン、細かいこと気にしちゃ駄目よ、紅瀬君♪……さて、どうやら相原さんのホイップクリームも出来たことだし、早速飾りでも付けましょうか。あ、紅瀬君は出来上がったソースをお皿に入れて。そんなに沢山入れなくていいから」
言いながら、先輩は十センチ角の紙を三角に巻いてその先端をカットして、そこに大さじ一杯のホイップクリームを入れた。そのまま力加減を調節しながらホイップクリームを搾り出すとチョコソースの上に綺麗な直線が描かれた。
「わぁ……桐生先輩上手ですね！」
「そんなことないわよ。このぐらいならちょっと練習すれば誰にでも出来るわよ」
「いや。それでも先輩は上手い方だと思いますよ」
「もう、紅瀬君まで……二人してからかわないで」
からかってるつもりは微塵もないんですけど？　不器用な俺が同じことをすればその差は歴然だと思うし。俺と雫さんが感心している間に先輩は竹串でソースの上に描いた白線を等間隔に引っ掻いて幾何学模様を描いている。見た目はがさつに見えるけどこの人、センスはあるんだな。
「ほらほら二人とも、見惚れてないで私と同じようにやりなさい！
何事も挑戦、挑戦♪」
「が、頑張ります……っ！」
「善処します」
握り拳を作って応える彼女に対して俺は当たり障りのない返事を

返して作業に取り掛かる。先輩同様、ソースの上に生クリームで線を描こうとするがこれがどうしてなかなか、見た目の作業とは裏腹に地味に難しい。綺麗に描いたつもりでも実際は線がふらふらしてたり上手に線と線を結べなかったり……早い話が目を背けたくなる出来栄えだ。

雫さんも俺と同じような悲惨な思いをしてるだろうと、さり気なく隣を見ればすんなり幾何学模様を描けている姿が。……あ、なんかちょっと泣けてきた。三人集まって自分だけ下手くそだとなんか泣きたくなるよね？　俺の状況、まさにそんな感じです。

「そうそう、上手よ～相原さん。紅瀬君は……まぁ、頑張っている方じゃない？」

「気休めなんていりません。素直にこの下手くそがって罵ってくれた方が気が楽です」

「紅瀬君の下手くそぉ♪　出直して来いってね！」

「桐生先輩、痛いです……」

本気で言ったよこの人。しかも力任せに背中まで叩いたし。まぁ変に褒められるよりはずっとマシだけどさ。

苦労して竹串で模様を描き終えるといよいよ仕上げの飾りつけに入る。冷蔵庫からフルーツが盛られたボールを取り出して作業台の上に置く。ブルーベリーにラズベリー、旬のもので苺ととにかくまぁ庶民なら両手を挙げて喜ぶような代物ばかりだ。

「この中から好きなものを選んでトッピングすれば完成。デザインなんかを意識してやるとこういうのも結構楽しいよ。……あ、そうそう。さっき五分立てしたホイップだけど八分立てにしておいたから必要なら使っても構わないから」

それは美術センスゼロの俺に対する当てつけですか？　しかも微妙に糖分多めのデザートだな。いや、デザートだしこれくらいが普通なんだろう。

（適当に盛り付けちゃまずい、よな？）

俺としてはちゃっちゃと済ませたい気分だが隣で真剣に飾り付け

をしている雫さんを見るとそれが出来ない。あと親父の影響で昔から地味な作業にも手を抜くなと耳にタコが出来るくらい言われ続けてきた。

……えぇいままよ！　こうなりゃ下手なりに頑張ろうではないか！　一人で奮起した俺は早速ホイップクリームを搾り出す。ちょうど渦巻きソフトの渦みたいな感じで搾り出して、適当なところで止める。次にヘタを切り落とした苺に縦の切れ目を半分以上入れる。そしてセンスを開くように苺を横へスライスさせるとセンスが開いたみたいな形になった。これを頂上に盛り付けて周りにいくつか適当に置けば完成なのだが――

「う～む」

遠目から見ると扇状に開いた苺の見栄えが少し――いや、かなり悪い。ラズベリーの盛り付け方もなんか汚い。我ながら手先の不器用さを呪う一品である。全体像を一言で表現するなら粗が目立つ。

チラリと、雫さんと先輩の皿を見てみる。彼女は苺が栄えるように他の果物を上手に飾り付けしてある。カットしたものが混ざっているあたり、先輩の助けを借りたのだろう。

で、肝心の先輩だがこれがまた凄い。一見すると豪快にフルーツを盛りつけたようにも見えるけどそう見えるのは一瞬。次の瞬間にはその皿の上に花が咲いているかのような気品さが漂っている。特に中央のホイップに飾られている苺は扇状に開いて（こっちはもうマジで上手にできてる！）生け花の如く、渦巻き状のホイップに乗せてフルーツという華を開花させている。そりゃもう料理の見本に載ってもおかしくないぐらい、彼女の美的センスは素晴らしかった。

「よくデザート作るんですか？」

そのあまりの見栄えの良さに浮かんできた疑問を素直にぶつけてみることにした。すると先輩は遠くを見るように視線を泳がせてから答えた。

「昔、ね……お母さんに連れてってもらった店があったの。デザート専門店なんだけど季節の果物がメインなんだけどメニューが全部

コースなの」
「コース？」
それってフランス料理とかでよく耳にする単語を指してるのか？
「桐生先輩、それってコースメニューという意味ですか？」
雫さんも俺と同じことを思ったらしく、念を押すように尋ねてきた。先輩は無言で頷き、言葉を続ける。
「そのときに食べたデザートの味が忘れられなかったのは勿論だけど、一番驚いたのは飾りつけ。食材ってこんな綺麗な姿に変わるんだっていう感動と見た目に違わぬ美味しさに二重の喜びを覚えたわ。私がデザートにはまった切っ掛けはそこね」
ふむ、なんとも分かり易い理由だなそれは。つまり先輩にとってデザートは原点でもあり、忘れられない味でもあったのか。俺の場合は必要だから覚えたっていう感じしかないからな。正直、好きになったから覚えたっていう先輩をちょっと羨ましいと思った。
「はい！　昔話はこれでおしまいっ。一息付くにはちょうどいい時間だから二人の出来栄えをチェックしちゃうわよ～？」
昔を懐かしむような表情から一転して先輩は意地悪そうな笑顔を俺たち二人に向けてくる。そのギャップは一体何ですか？　どう考えても審査する人間の目じゃない。敢えて言うなら小姑でも言おうか。
「よ、宜しくお願いします」
「お手柔らかに……」
「私は手厳しいわよぉ～？　特に私のことを小姑なんて思った人には」
え、もしかしてバレた？　しかも今の言い方からすると先輩は自分が小姑っぽく見えることに自覚があるように聞こえるんだが。
「あ～、なんか今余計なこと考えたから紅瀬君は更に減点ね」
はい。藪蛇でした。
因みに俺の作ったホイップクリームのチョコレートソースの出来

栄えだが案の定、先輩にボロクソ言われたりその横で不器用ながら雫さんがフォロー入れたりとまぁ散々な結果だったと言っておこう。駄目元で男は普通デザートなんか作らないと言ったらパティシエを侮辱する気か！？　と言い寄られた。

いや本当、先輩にデザートの話題はある意味じゃタブーだということを身を以って知った見学会だったさ。

同好会、存続の危機（前書き）

料理って慣れるまでが大変ですよね。
私はあまり料理しない人間ですが、一人分を作るのでしたらまぁいいかなと思うのですが数人分だと……。（―――）

同好会、存続の危機

で、その日の夜。我が家の台所にて……。

「なんだこれは？」

帰ってくるなり親父こと紅瀬恭一郎がテーブルの上に置かれたブツに対しての発言である。そりゃあ、ウチでこういうものが出るのが珍しいのは分かるがもう少し言葉を選んだらどうだ？

「見ての通り、デザートだけど？」

そんな親父に対して俺は淡白に答えて晩御飯（面倒だからスパゲティにした）を黙って差し出す。先輩にボロクソ言われたのが悔しいから俺もやれば出来るんだという安っぽいプライドを取り戻すため、頑張って作ってみた。

ただし、時間の都合でデコレーションは殆どしてない。カットした苺をトッピングしただけの代物だ。

親父は特に言及することなく黙って上着を椅子に掛けて食卓に付く。少し遅れて俺も親父のように椅子に座る。

「最近遅いけど忙しいの？」

「ん？　あぁ……。ここ数年で隣の市に金持ちが住むようになっただろ？」

「知ってる。通学中にしょっちゅう外車見るし」

白鷺学園に通っていれば嫌でもそういう情報は耳に入ってくる。セレブの中にはわざわざアパートを借りてそこから通学している変わり者もいる。金持ちなんだから普通に車通学にすればいいのに。

「最近、あの近辺で不審者を見たっていう情報が相次いでな。まだ事件が起きた訳じゃないが用心するに越したことはないってことで私服の警官が巡回している。お前もあそこの学生なら気をつけろよ？」

「分かってる」

俺自身はともかく、白鷺学園に通っているだけで周囲からは金持

ちという目で見られる。庶民向けの奨学生制度があるとはいえ、学園の雰囲気がそうさせているのだ。
　これは余談だが白鷺学園にセレブが集まりやすいのはセレブの世界では比較的学費が安く、それでいて高水準の教育を受けられるからだと言われている。いくら金持ちとはいえ、学費を削れるというならそれに越したことはない。ましてや日本の納税は馬鹿にできない。多分、日本も海外みたいな納税システムだったら底辺でくすぶっている金持ちも幾らかマシになるんじゃないだろうか？　……いや、その前に庶民の生活なんとかしろって言いたくなるけどさ。
「……」
　親父と面と向かったまま黙って食事をするのも飽きたのでテレビを付けるとＳＣＣがやっていた。内容は飛行機が胴体着陸したとか円高の影響がどう出ているのかとかそんなのばっかり。他の番組を見ようと思ったけど夕飯の後片付けと宿題をやる時間を逆算するとそんな余裕はないかも知れない。
「ところでお前、どうしてデザートなんか作ろうと思ったんだ？」
「しず――相原さんに料理研究部の見学に誘われたんだよ。相原さんなら親父も知ってるだろ？」
「……。あぁ、あの相原さんか」
　思い出したように親父が何度か頷く。親父と雫さんは面識こそないが俺と彼女が友人だということは知っている。そうでなくとも職業柄、相原という姓には聞き覚えがあるに違いない。
「お前……あの娘と仲が良いのか？」
「それなりにね。学校じゃよく喋るから」
　確かに雫さんとは学校ではよく話すけど二人で遊びに出掛けたことは一度もない。家の人に止められたからとかそういう理由じゃなくて単に二人で出掛ける目的がないだけ。
「……」
　親父は押し黙ったまま俺を見る。こういう時の親父は相手の真意を推し量っている。隠し事という程でもないし言う必要がある内容

でもないから俺はその視線を軽く流して残りのスパゲティを胃に収める。
「……ま、何もなきゃそれでいいがな」
話はそれで終わりだとばかりに、親父は残ったスパゲティを食べ始める。既に食べ終えた俺は自分の食器をキッチンに置いておく。
「食べ終わったら流し台においといて」
「あぁ」
のんびり食べてる親父を一瞥して、俺は一足先に食器を片付けて自室に向かう。明日は英語の小テストがあるし数学は新章に突入するから予習と復習をする必要がある。元々レベルの高い学校だから奨学生としての義務を果たすのは決して楽なものじゃない。順位を落とせば何かしらの問題が起こると思うが、流石に金払えとかそんな横暴なことは言われないだろう。言われても払えるほど金持ちじゃないし。
「んじゃま、頑張りますか」
お気に入りの音楽をかけて学習机に向き合う。何だかんだ言って放課後の料理研究部の見学は俺にとってもいい気分転換にもなったし、今日の勉強はすこぶる集中できそうだ。

親父が話した不審者云々の件は学校側にもしっかりと伝わっていたようだ。いつもなら一人か仲良しグループで登校する風景が見られるが今日はまだ一人も学園生の姿を見てない。唯一、俺と同じように歩いて居るのは勤勉に働くサラリーマンぐらい。代わりに今日はいつも以上に高級車とすれ違う。そういや金持ちが持つ車と言えばリムジンだが未だにすれ違ったことねーな。多分、近隣の迷惑になるっていう理由で学校側が禁じてるんだろう。
校門が近づいてくると車が何台か止まっていてそこから学園生が執事やメイドさん、あるいはお抱えのＳＰに後部ドアを開けてもらって優雅に降り立つ。その中で雫さんの姿が見えたから軽い気持ちで呼びかけてみる。

「おはよ、雫さん」
「はい？　……あ、弥生さん。ごきげんよう」
俺の姿を確認すると嬉しそうに挨拶する。側に控えている執事も俺に気付いて挨拶する。
「紅瀬様、お早う御座います」
「お早う御座います。今朝は随分と遅いんですね」
俺の記憶が確かなら雫さんはいつも八時には登校している。早朝なら人の往来が少なくて不審者も目立つから警護する側も楽だと言う話を聞いたことがある。
「はい。実は少し寝坊してしまいました」
「この時間に登校して寝坊って……」
まだ本鈴が鳴る十五分前デスヨ？　これが寝坊なら俺は毎朝盛大に寝坊してるぞ？
「瀬場さん、ありがとう御座います。帰りも宜しくお願いしますね」
「畏まりました。それでは雫様、また後ほどお迎えに上がります」
雫さんに一礼してから瀬場さんは車を発進させる。相変わらず俺のこと嫌いですよー的なオーラ全快なんですが？　一応、ちゃんと挨拶してくれるけどそれとなく素っ気ないし、挨拶の時以外は俺の方なんか全く見向きもしないし。
「なぁ、雫さん？　やっぱり俺、あの執事に目付けられていると思わないか？」
「ふふっ、そんなことありませんよ。瀬場さんはとても良い人ですから。それに私、瀬場さんが側に居たこともあって同世代の、それも弥生さんみたいな男の人と話せませんでしたから」
あーなるほど。つまりお嬢様に悪い虫が付かないように頑張ってたんだな。なら瀬場さんにとって俺はどういう位置づけなんだろう？
「やっぱり俺も悪い虫に入るのかな？」
「いいえ。弥生さんは大丈夫だと思いますよ」
「できればその根拠を聞かせて欲しいんだが？」
「瀬場さんが何も言わないからです」

そういう判断基準ですか。普通に嫌いっていう考えはないんですかこのお嬢様は。
「瀬場は普段からあんな感じだぞ、紅瀬庶民」
「のわっ？！」
急に後ろから人の気配がしたので俺も雫さんも慌てて飛び退く。声がした方を見ると俺を睨め面で凝視している水瀬がいた。
「あ、哲君。ごきげんよう」
親戚同士からか、あるいは腐れ縁からなのか、雫さんは水瀬のことを哲君と呼ぶ。この二人、未だに仲がいいのかただの幼馴染みなのかよく分からない。でも雫さんはこいつの言動にいちいち反応してないし……やっぱり仲良しなのか？
「やぁ雫、おはよう。今日もいい天気だねぇ。……あぁそうだ、ついでに紅瀬も。おはよう、と言っておこう」
「人をついで扱いするな」
しかもあからさまに俺に挨拶する時だけ態度が違うし。少し不服そうに言い返してやっても水瀬は意に介さぬと言った様子だし。
「ところで水瀬、さっき瀬場さんはいつもあんな感じって言ってたけど、それは本当か？」
「あぁ、そうだ。瀬場は職務に忠実だから普通の人からすればとっつきにくい感じはある。しかし実際はそう見えるだけであり、あの人はあれで人情溢れる人間だ。ただし、無遠慮に雫に近づいてくる男には容赦しないというだけなんだが……」
「なんか含みのある言い方だな」
こいつ、絶対遠回しに『お前どうやってあの瀬場を丸め込んだ？』とでも言いたげな表情を浮かべてたぞ？
「あぁ、誤解しないでくれよ。僕が言いたいのは何故あの瀬場がキミに対しては何のリアクションもないのかが気になってるだけさ。堂々と雫と接している辺りから推理するに、キミは瀬場の洗礼を受けてなさそうだしね」
面と向かって言いやがったな……。お前は知らないだろうが俺だ

って瀬場さんの洗礼ぐらい受けたぞ？　雫さんと初めて会ったときのことだがちょっと話し込んだだけでなんかすんごい勢いで割り込まれ、一方的に俺を相原家の財産を狙う賊と言ってガチンコ勝負することになったのは今でも覚えている。
……今思うとあのとき、咄嗟に雫さんが仲裁に入ってなかったらどうなってたことか……。
「ん～……今の話を纏めると思い切り嫉妬してない？」
「嫉妬だって？　……ふっ、何故僕が庶民であるお前如きに――」
「水瀬、今の俺じゃないぞ。それから桐生先輩、お早う御座います」
「ごきげんよう。桐生先輩」
「おハロー！　朝から二人して仲良いわね」
おハローって……また微妙に古い挨拶だな。しかもこの人、ごく自然に俺たちの会話に混ざってきたし。
「紅瀬、こちらの先輩とは知り合いか？」
「あぁ。彼女は三年生の桐生玲子。料理研究部の部長だよ」
「ご紹介に預かりました、桐生玲子でっす♪　早速だけどキミ、料理研究部に入らない？　ちょっとキザッぽい人でも我が料理研究部は決して入部希望者を拒みません」
スゲー、まともな自己紹介もしてないのにいきなり勧誘いったよこの人。一日体験入部した限りだとかなりのほほんとした雰囲気だったけど……実は料理研究部の現状って相当まずいのか？
「桐生先輩、挨拶した直後に勧誘をすれば誰でも困ってしまいますよ？」
「うっ、確かに相原さんの言う通りね。……ごめんね、流石にちょっと唐突過ぎたわね」
「ふっ……この水瀬哲也、先輩の非礼に対して負の感情などただの一ミリたりとも抱いておりませんのでご安心下さい」
何様だよテメー。本当に水瀬は女が相手だと態度が全然違うよなぁ。これさえなければ少しはまともな人間になれるのに……。
「紹介が遅れました。私は一年の水瀬哲也と申します。彼の隣に立

っている相原雫さんとは親戚同士でもあります」
　それは自己紹介と言えるのか？　そんな風に名乗れば誰だって頭おかしい人間なんじゃないって思うぞ？
「へぇ～、じゃあキミはお坊ちゃまって訳だ。なんか全然そういう風には見えないけど？」
　訂正。どうやら先輩は特にそうは思わなかったようです。悪人には見えないから軽く流したのか？
「そんなことはありません。お金持ちなのは私の親であって、私が金持ちという訳ではありませんからお坊ちゃま、というのは語弊がありますよ、桐生先輩」
　嘘だろ、おい……。あの水瀬がこんなまともなこと言うの初めて見たぞ俺。熱でもあるんじゃないか？
「あはっ、水瀬君って結構マトモなこというのね。親はどんな仕事をしてるの？」
「金融会社の取締役を務めてます」
　金融会社と聞いて真っ先に思い浮かぶのがサラ金だろうが水瀬の親が働いている会社は断じてそういう悪どいところではない。（いや、元を辿ればそうかも知れないけど）
　今の金融会社はそういうイメージを吹き飛ばそうと必死だし誠実に対応してくれる……て、前に水瀬が言ってたな。コマーシャルで親近感を沸かせるようなキャッチフレーズも流しているからきっと、昔はかなりイメージ悪かったんだろう。
「あ、その金融会社って青い看板が目印の？」
「えぇ、その会社です。そういう桐生先輩のご両親は何をなさってるんです？」
「お父さんは弁護士でお母さんは広告代理店務め。由緒正しきって訳じゃないけど私も一応お嬢様ってことになるかな？」
　いや、桐生先輩の場合、お嬢様というよりはただの金持ちでしょう。何を基準にしてお嬢様なのかは知らないけど。
「さて、一通り挨拶したことだし……水瀬君、改めて訊くけど料理

研究部入らない？」
「やっぱ、部活には誘うんですね……」
「はいそこ、部外者は黙ってるよーに！　……どう、水瀬君？　入ってみる気はない？」
「お誘いして頂けたことにはまことに嬉しいのですが、御免なさい。私にはやらなければならないことがありますので」
　嘘付けこの野郎。思い切り放課後はナンパしに出掛けてるだろ！
「そう。でも、入りたくなったらいつでも私か相原さんに言ってね。さっきも言った通り、我が料理研究部は入部希望者を決して拒みません」
「分かりま――て、雫は料理研究部に入っているんですか？」
「雫さんは昨日、料理部に入部したんだよ。知らなかったのか？」
「なっ？！　何故僕も知らなかったような情報をキミが知ってるんというんだ！？」
　驚くポイントそこかよ！？　本当どうでもいいとこに反応するなお前って。
「紅瀬君もね、一緒に見学したの。でもねぇ……紅瀬君ったら料理はそこそこ出来るのにちーっとも私のラブコールに答えてくれないからお姉さんとしては悲しいわけ。しくしく」
「そうでしたか。それは失礼しました桐生先輩。この男はどうも空気を読むのが大変下手くそで私も手を焼いてる次第でして……」
　おい待て。その言い方じゃまるで俺がお前の世話になっているようにしか聞こえないぞ。突っ込むのも面倒だから黙っておくが後でその辺についてしっかり話し合う必要があるな。
「弥生さんも入部すればよかったのですけど……」
「悪いな、雫さん」
「いえ……。私のわがままに、弥生さんを付き合わせる訳にはいきませんから」
「そうか。……けど、応援だけはしてるから」
「はいっ。ありがとうございます」

「……」
残念そうに呟く彼女に、できるだけのフォローを入れる。それだけで雫さんはいつもの笑顔を俺に向けてくれた。そしてそんな俺たち二人の様子を水瀬は心底不機嫌そうに、先輩は面白モノを見つけたかのような瞳で観察していた。
「うーん……会ったときから鈍いだろうなーとは思っていたけどこれは紛れもなく天然ね」
「天然？　なんの話ですか先輩？」
「紅瀬君。キミ、誰かに鈍いとか良く言われない？」
「いえ。別に言われませんけど？」
いきなり何を言い出すんだ、鈍いとか微妙とか。独り言にしちゃ怖いぞ。
「ふぅ……そんな調子じゃキミに恋人なんてできる日は永遠に来ないだろうな。どうでしょう、桐生先輩？　私の胸ならいつでも空いてますよ」
「遠慮しとく。水瀬君って面白いけど私の肌には合いそうにないしちょっと軽そうだから」
流石、桐生先輩。最上級生なだけあって見る目がある。でも少し訂正させてもらうならこいつの軽さはちょっと程度じゃ済まない。ある意味、世の女性は皆俺の嫁！　みたいなところがあるから始末が悪い。流石にイイトコ育ちなこともあって悪戯に女性を傷付けたり踏み込ませない一線を明確にしているけど。
……いやちょっと待て。なんで水瀬なんかの弁護をしようと考えてる？　……自覚してることとは言え、俺って本当に誰だろうと困っている奴を放っておけない性分なんだな。
「それより皆、そろそろいかないと予鈴鳴るぞ」
少し無理な話題転換かと思ったが思いの他、水瀬も先輩もあっさり流れに乗ってくれた。時計を見てもまだ予鈴がなるまで五分もあるが白鷺学園の生徒からすれば予鈴前に教室にいないのは風紀上、好ましくない。俺みたいにポイント特典を気にしてる奴なんかは特

に。
「はぁ……出来ればもう少し君たちとお話したかったけど学食割引券を目指している身としては不要な減点を避けなければならないのでこれで失礼しますか。それじゃあ紅瀬君、相原さん、チャオ♪」
チャオって……さっきのおハローといい、桐生先輩って意外とオールドなネタが好みなのか？　そんな先輩の後ろ姿を見送りつつ、俺たちも自分たちの教室へと向かう。予鈴前ということもあってか、教室内は相変わらず賑わっている。特に明日は休みだから皆、仲良し同士集まって世間話に華を咲かせてる。
……話の端々に軽井沢の別荘とか伊豆のホテルとかそんな単語が聞こえるのは高校生の会話にしちゃスケールが大きすぎると思うけど。
本鈴がなるまでのあいだ、俺は復習の総仕上げにかかる。一時間目は世界史で、今は丁度ハプスブルク家について習っているがこの教師、なかなかマニアックな人でノートを書き写すだけで精一杯だ。だから世界史の授業に限り、俺みたいな特待生じゃない奴でも世界史が始まる前の時間は必ず予習してる生徒が多い。
本鈴がなるまでの短い予習。校門前で話し込んでいたのが裏目に出て、満足な予習も出来ずに鈴が鳴る。それと同時に担任が入って来た。俺と同じように予習をしてた生徒は一旦切り上げてノートを机の中へしまう。
柊先生は出席簿を片手に急かすように点呼を取る。だが急いでいるように動いても全くせっつかれている感じがしないのはある意味、あの教師だけがなせる技だろう。
「全員揃っているようですね。では、今朝のホームルームですが二つほど、皆さんにお知らせしなければならないことがあります」
知らせ？　一つは昨日親父が言ってた不審者の件だとして……もう一つの知らせってなんだ？
「一つ目は登下校に関する諸注意です。ここ数日ほど、学区内で不審者を見かけたという話を耳にしています。下校の際は寄り道をせ

ず、必要な人は必ず迎えの車を手配して下さい」
俺の一つ前に座っている水瀬がそっと舌打ちをする。流石にその反応は俺でもどうかと思うぞ？
「二つ目は部活に関するお知らせです」
次は部活か……。フェイシング部が大会で優勝でもしたのか？
「ご存知の方も多いと思いますが白鷺学園には正規部に勝るとも劣らぬ程の同好会が存在します。自治会では今後、部として成り立つ見込みのない同好会と部活は廃部にするという方針を取りました」
部として成り立つ見込みがないって……つまり同好会から部活になりそうもないところは無条件に廃部にするってことか？　もしそうだとしたら料理研究部、やばいんじゃないか？
「あの、先生……」
「何ですか？」
「学園にとって同好会の存在というのは、そこまで面倒なものなんですか？」
クラスメイトの一人が思ったことをそのまま口にして尋ねた。もう少し言い方があるんじゃないかと思いつつも、その点については俺も疑問に思っていたところだ。同好会は別に部室が与えられている訳でも部費が貰えている訳でもない。ただ、活動をする時は必ず何処かの空き教室と教師の付き添いが必要になるけど。
「えぇ。これ以上同好会が増えると我々教師としても不必要な時間を取ってしまい本職の方に時間を省けなくなる、というのが学園側と自治会の判断です」
なるほど。つまり遊びでやってるような同好会が活動をするのは教師からすれば迷惑だと言いたいんだな。言い方は乱暴だがその気持ちは分からなくもない。向こうだって貴重な時間を学生の遊びに割きたい、なんて思わないしやりたくもないからな。
「同好会と部の調査については自治会が担当していますので分からないことがあればそちらの方に訊いて下さい。では、今朝の連絡は以上です」

同好会の調査か……。これは思った以上にやばいかも知れないな。だってあの料理研究部、先輩が二年生の時から部員がいないって話だから今さら雫さんが部員として入ったとしても何の効果もないのは明白だ。

「……」

さり気なく雫さんの様子を窺ってみる。俯き加減で考え込んでいるように見えるけど落ち込んでいるようには見えない。多分、彼女なりに自分に何ができるのか必死に考えているに違いない。

雫さんはよく、気の弱いお嬢様っていう印象を持たれがちだけど本当の彼女は周りが思っている以上に芯がしっかりしている。……いや、若干天然なところがあるのは否定できないけど賢い方だし俺みたいに周囲に流されるようなタイプでもない。

（一応、声ぐらいは掛けておくか……）

一時間目に始まる世界史の準備を進めながら俺は密かに決意した。料理研究部に入るという訳じゃないが友人が困っているのは想像に容易い。深入りし過ぎだとか言われそうな気もするが友達が困っているのにどうして見過ごすことが出来るのか？　少なくとも俺にはとてもできない。もうそのことで後悔なんて、したくないから……。

放課後を迎えてすぐに俺は雫さんと一緒に先輩を尋ねていた。先輩はやはりと言うか当然と言うか、落ち込んでいた。

「ま、いつかはこんな日が来るとは思ってたんだけどね」

気丈に振る舞おうとする彼女だがそれが虚勢なのは雫さんでさえ見抜けた。だからと言ってすぐに慰めの言葉なんて出る筈もなく、適当に頷く。

「中休みを活用してザッと調べたんですが――」

ずっと黙っていても拉致が空かないので俺は生徒手帳を片手に本題を切り出す。

「調査が始まるのは来週ですからまだ時間がありますのでそのあいだに方針を立てましょう。次に廃部に関する件ですが早い話、部と

しての質が高ければ問題は解決します」
　クラスメイトから教えてもらった生徒自治会（俗に言う生徒会）が決めた方針を簡単に説明するなら廃部の対象となるのは質の悪い部だけ。要は料理研究部が遊びではなく、本気で活動してる場所であり、部員も活動する意欲が充分だってことをアピールすれば廃部を免れる可能性は高い。
「ちょ、ちょっと待って紅瀬君。もしかしてあの自治会に賭け合うつもり？」
「そうですけど？」
　あの自治会って……先輩はどういう目であれを見てるんだ？　そりゃ、あそこは普通の学校の生徒会より権限が強いところだけど話が通じない連中で構成されてる訳でもない。
「そんな前例聞いたことないわよ！？」
「……。私は一年ですから去年と一昨年のことは知りませんがそれはたんに前例がないだけだと思います」
　どうも言いたいことが伝わってないようなので俺は生徒手帳を開き、目的のページを先輩と雫さんに見せる。
「生徒会則・第四項。生徒自治会は風紀の粛清、並びに正規部・非正規部における活動の可否を承諾する権限を持つ。定められた規範を――」
「雫さん、そこじゃなくて附則を読んでくれないか？」
　なんか校則を読み上げるっていうより雅歌を謳っている感じがして緊張感に欠ける。……こういうのってある意味才能だよなぁ。
「あ、済みません弥生さん。……えっと、附則第四項。自治会の裁量に対して承服しかねる場合、提案者とその支持者二名を募り、申告書の申請が認められる。……弥生さん、これはつまり――」
「頭数は揃っているだろ？」
　提案者が先輩だとして支持者は雫さんと俺。これで料理研究部存続の為の申請が出せる。が、これで問題が解決した訳じゃない。申請が認められたとしてもこちらの熱意が自治会に通らなければ意味

がない。
「……紅瀬君、いいの？」
「いいも何も、入部する訳じゃありませんから大丈夫でしょう。それにこれは先輩の為だけじゃありませんから」
「へぇ～。私の為じゃないってことは……つ・ま・り……相原さんに格好良いところを見せたいのが本音かしら～？」
「……まぁ、若干それもあるかも知れませんけど、一番の理由は雫さんが友達だからです。後は……まぁ、ポイントのためですね。俺も学食の割引券、狙ってますから」
　基本、ポイントに関する明確な規則は存在しないが自ら進んで善行を行ったり試験で高得点を取ったりした場合は自己申請でポイント加算の可否が決まる。今回の件に関して言えばポイント云々はオマケみたいなモンだけど。
「そういう訳ですから先輩、早めに申請書に名前書きましょう。俺の名前はもう書いてありますから後は雫さんと先輩の名前、それと申告動機についての記入をお願いします」
「え、えぇ……分かったわ」
　面食らった様子で応えつつペンを走らせる。雫さんはと言えば――なにやら生徒手帳に記されてる会則のページを熱読してる。……そんなに熱中するものか、それ？
「……正直、盲点でした。弥生さんは会則のページを全て暗記していらっしゃるのですか？」
「まさか。休み時間の合間に調べたら行き着いただけだよ」
　政治に不満があればそれを申告できる制度があるように、この学園にもそうしたシステムがある。ただし、先輩の話を聞く限りじゃ会則の存在がどれだけ空気と化しているのかが良く分かった。かくいう俺も最近まで忘れていたけど。
「紅瀬君、書いたわ。あとはこれを自治会に提出……するには遅いわね」
「そうですね。自治会は運動部と違って毎日活動してる訳じゃあり

ませんから」
　運動部と違い、文化部には休みがある。しかも部活の大半が郷土研究部や書道部だったりとマジで地味な部が多いのはお嬢様学校の宿命だろう。しかもこういう部に限って案外生き残ったりするから正直、タチが悪い。活動日数が少ないだけで真面目に活動している奴等多そうだし。
「さて。次に具体的なアピールだけど、どうやる？」
「それなんですが桐生先輩、一度私の家に来て話し合いませんか？」
「相原さんの家！？　行く行く！　お嬢様の家って実はすっごい興味あるのよねー！」
「……」
　雫さんの家、か……。一度だけお邪魔したことがあるがいろんな意味でトラウマになりそうなところだった。主に庶民な俺と住む世界のギャップと一部の使用人に。両親には会ったことがないからどんな人か分からないけど。
「弥生さんはどうします？　もし予定があるのでしたら無理にとは言いませんが……」
「いや、予定は特にないけど……」
　あっても家事仕事だし、そんなのに没頭するぐらいなら料理研究部についての打開策を一緒に練った方が建設的だ。
「では、決まりですね。すぐに迎えの車を用意させますから」
　一度両手をポンと叩いてから、雫さんはスカートのポケットから携帯を取り出して電話帳に登録してある番号を呼び出す。使用人と二言三言話してから電話を切って俺たちの方に視線を戻す。
「今、学園の近くまで来ているそうです。早速参りましょう」
「あ、あぁ……」
　彼女が正真正銘のお嬢様だってのは認識してるけど何度聞いてもとんでもない会話だよな、これ。多分、というか間違いなくこの学園を卒業したらこんな体験は二度と出来ないに違いない。先輩と顔を見合わせるとポンと、肩に手をおかれた。

「キミ、本当に凄い娘が友達なのね……」
「お陰で毎日が刺激的ですよ」
できるだけ皮肉を込めながら俺は先輩にそう言った。

初めての料理（前書き）

正義の味方よりはアクセス数が多くて個人的には満足。でもきっとこの作品には「何か」が足りない。
……何が足りないんだろう。（´・ω・）

初めての料理

校門前まで来ると一台の車と瀬場さん、そして見たことのないメイドさんが待ち構えていた。初めて相原家にお邪魔した時は瀬場さんしか使用人を見なかったからこれはちょっと新鮮。

「お嬢様、お客様方、荷物を預からせて頂きます」

俺と先輩の姿を確認すると控えていたメイドが歩み寄って来て、そんなことを言ってきた。なにこのセレブなおもてなし？　ここは普通に荷物渡せばいいのか？　雫さんは当然のように荷物渡してるみたいだけど――

「あ、お願いしまーす」

「……」

俺がどうしようか迷っているすぐ隣で先輩はさも当たり前のように自分の荷物預けて乗り込む。……ハァ、これじゃ俺が浮世離れしてるみたいじゃないか。とほほ……。

「深く考える必要はありませんよ、紅瀬様」

「はぁ、お気遣いどうも……え？」

今このメイド、俺のこと苗字で呼ばなかったか？　少なくとも俺はこのメイドとは初対面の筈だ。……ひょっとして何処かで会ったことがあるっていうオチ？

「ご紹介が遅れました。わたくし、レディースメイドの白南風咲夜と申します。紅瀬様のことは兼ねてからお嬢様より伺っております」

「そ、そうでしたか」

なんだ。雫さん経由で俺のことを知っていたのか。どんな風に俺のことを話したのか少し気になるけど彼女なら変なことは話してないだろう。……そう信じておこう。

不慣れな手付きで白南風さんに鞄を渡して車内へエスコートされる。煙草を吸う親父が持つ中古車と違って全然ヤニ臭くないし座り心地も格別だ。すげぇ、これが高級車ってやつか。こんな凄い車に

雫さんは毎日乗ってるのか。
「小さい車で意外でしたか？」
その言葉は誰に対して言ったのか分からないが、急に雫さんが口を開いた。言うほど小さい車ではないが確かに金持ちが載る車としては小さいなっていう感想はある。
「車のこと？　そうねぇ……正直な話、リムジンみたいな奴を想像してたからちょっと意外かな」
「先輩、リムジンが頻繁に通ったら迷惑になりますから」
徒歩通学者ならすぐ分かると思うけど通学路は一方通行だ。車道の幅は両脇に通行人が歩いていても問題ない広さだが、リムジンが通るには何かと不便だし、もしかしたら車体の関係で曲がりきれないのかも知れない。
「リムジンのような車が何台も走ると近隣の住民にご迷惑が掛かる、という理由で学校側が禁止しているんです。あと、降車も可能な限り早くするようにとの通達も受けてますので必然的に小回りの効く車になるんです」
「学校側が禁止してたんですか？」
「はい」
やっぱり学校が規制してたのか。もしかしたら生徒手帳にちゃんと記されているかも知れないが少なくとも俺は見たことがない。元より興味なんてないし。
「あとは、瀬場さんがリムジンの免許を取ってないのも理由の一つです」
「え？　そうなの？」
「はい。お恥ずかしながら」
先輩の驚きに答えるように瀬場さんが申し訳なさそうに口を開く。別に執事だからと言ってリムジンが運転できるとは限らないんじゃ？
「執事と申しましても私の仕事はお嬢様の警護に御座います。お嬢様のお世話は基本的に役立たずな私ではなく、白南風さんのお仕事ですからな」

「まぁ。瀬場さんったら、ご謙遜を……。警護と言っても瀬場さんは一人でアメリカのシークレットサービス数人分のお仕事をなさるじゃないですか」
「元・軍人ですからな。そのぐらいのことはしなければ今の時代、私のような一芸達者な人間は解雇されますよ」
シークレットサービス数人分の仕事量って……充分過ぎるほど有能じゃないか。しかも元・軍人ということはヘリや戦闘機なんかも操縦できそうだぞ、この人。
「じゃあ、白南風さんは普通に使用人として働いているんですか？」
「基本はそうですが週に二度ほど、社交界の場に必要な教養を教授しております」
「なるほど。家庭教師も兼任しているという訳ですね」
「はい。レディースメイドともなれば、このぐらいは出来て当然のことです」
「レディースメイド？　それって何ですか？」
それは俺もスッゲー気になってた。気になると言っても話の流れで大方予想は付くけど。
「メイドの階級と思って下さればいいです。レディースメイドは会社の役職に例えるのでしたら副社長に当たる立場ですね。もっとも、この役職はハウスキーパー……要するに使用人たちの社長ですね。この役職に就いてる方の人事権の及ばない特殊な存在となるのでレディースメイドとハウスキーパーは独立したものだとお考えになって下さって結構です」
なんかただのメイドの筈なのに軍隊みたいな感じだな。しかし、俺はまだ相原家の使用人には白南風さんと瀬場さんの二人しかまともに話していないがもしかしてこれが標準レベルか？　だとしたら相原家の使用人は皆、一流揃いだったりして。
「因みに、私達はお嬢様の側近ですから優秀なだけです。屋敷に駐屯している使用人どもは誇張も過小評価もなく普通レベルです」
「え？　白南風さん、俺口に出して言ってましたか？」

「紅瀬様、貴方はもう少し己の器を知るべきです」
うわ、やっぱ今日の瀬場さん機嫌悪いよ。言葉遣いこそ普段と変わらないけど今日はやけに風当たりが悪いぞ。……これ、どう考えても俺が乗っているせいだよな？
「瀬場さん、いくら何でも紅瀬様にそのような言い方をされては気分を害してしまいますよ。……紅瀬様、瀬場のぶしつけな発言、どうかこの白南風に免じてお許し下さい」
「い、いいですって白南風さん！　そんなに畏まらなくても！」
そもそも瀬場さんは雫さんに悪い虫が付かないように職務をまっとうしているだけだから俺みたいな男にああいう態度を取るのって当たり前なんだ。だから俺は瀬場さんの態度や言葉遣いにいちいち驚くことはない。それに俺も瀬場さんの気持ち、少し分かるし。
「ねぇ、紅瀬君？　ぶっちゃけあの執事さんに何か恨まれるようなことでもした？」
「誤解ですよ先輩。瀬場さんは雫さんに近づく男には誰だって容赦ないからああなんですよ」
「ほんとにぃ～？」
「疑り深いのも大概にして下さい」
ああもう、女って生き物はどうしてこう男の言う事を信じようとしないかね。

雫さんの家は車で一時間ほど走ったところにある。もう少し詳しく話すと雫さんは都心ではなく、隣の県に住んでることになる。邸宅は丁度小高い丘の上にあって、部屋から眺める山脈の景色は実に素晴らしかった。初めて来た時は気持ち的な余裕がなかったから凄いところだっていう印象しかなかったけど今なら雫さんがどれだけ良い所に住んでいるか実感できる。都会の喧騒とは無縁だし空気だって美味しい。極めつけは邸宅のある場所には天然の温泉が湧いていて、それを家の浴場へ流しているというから凄い。身も蓋もない言い方をすると源泉を独占してるってことになるけど。

車から降りた後は雫さんに先導されて彼女の部屋まで案内される。初めて来た時からそうだったけどこの家は豪邸というよりもとてつもなく大きな武家屋敷を彷彿とさせる。もしかすると普通の豪邸よりも建築費用が掛かっているかも知れない。

「皆様どうぞ。こちらが私の部屋になります」

言うと同時に雫さんは廊下の中ほどにある扉の前で歩みを止めて言った。ネームプレートには達筆で雫と書かれてある。

鍵を使って開錠して部屋へ招かれる。武家屋敷だから中も和風な感じかも知れないがそんなのは外だけ。個人の室内ともなればそりゃもうえらいギャップを感じる。

だってアレだぞ？　鴬張りの廊下を行き来して部屋へ案内された途端、フローリング張りの部屋に天蓋付きのベッド、サイドテーブルに飾られた洋花、あえて言うなら全くの別世界へ迷い込んだ気分だ。

「へぇ……中は普通なんだね」

入室を躊躇っている俺とは対照的に先輩は興味津々に部屋を眺めている。部屋の前で立ち往生しても仕方ないから俺も先輩に習って部屋全体を見渡してみると流し台と簡易キッチンが部屋の隅に備え付けられていることに気付いた。

「雫さん、部屋にキッチンがあるけど何に使ってるの？」

「あれは、お茶を淹れる為です」

お茶を淹れる為って……。それにしてはちょっと豪華過ぎないか？　しかもこの部屋、多分というか間違いなく学校の教室ぐらいの広さがあるだろ？　部屋の隅にある家具やテレビ、中央付近にあるテーブルやソファーがあるけどそれでもまだ少しのゆとりがあるんだから。

「今、お茶を淹れますから少しお待ちになって下さい」

「お嬢様の淹れるお茶かぁ……なんかすっごい興味をそそられるわねー」

「そうですね」

先輩の言葉に同意しつつ、一言断りを入れてから鞄をソファーの端に置いて腰掛ける。ぼふん、なんて野暮な音を立てることなく身体が沈んでいく。どんだけいい物使ってるんだここの家具は。
「テーブルマナーに社交ダンス上達の秘訣に盆栽の褒め方……あ、普通の漫画もあるんだ。へぇ……」
一方で、先輩は未だに室内を探索中だ。俺も視線だけで部屋を観察してみると動物のぬいぐるみが山のように積んであったり、学習机の上にはたまにペットボトルのおまけとして付いて来るミニジオラマが飾られていたり、棚には流行りのアイドル系歌手のCDが並んでいたりと……金持ちというステータスを除けばごく普通の女の子の部屋だと実感できる。
「あ、このお城のジオラマシリーズってお茶のペット買うと付いて来るヤツ？」
「はい。始めはそうでもなかったんですが、今では出掛けるとき、必ずそれが付いて来るお茶を買うのが日課になっちゃったんです」
「へぇ～。相原さんって意外と庶民趣向なのね。誰かの影響？」
「いえ。興味本位で買ったのが切っ掛けで……あとはもう御覧の通りです」
「はぁ、よくこんなに集めたわねぇ……。ペットのお茶が一本百五十円ぐらいでここにあるのが大体五十個だから――」
先輩、悪いことは言わないから計算しない方がいいぞ。かくいう俺も今まさに暗算してるけど。
「――大体七千五百円かぁ……。しかも一ヶ月で七千円使ったってことだから、えーっと……」
「先輩、下賤話はそのぐらいにした方が……」
「いいえ！　こんな機会は滅多になんだから庶民との格差を徹底的に検証するわよ！」
庶民との格差調査って……それをすることに何の意味がある？しかも途中から目的が変わってるし。
「格差調査は料理部存続の具体案をまとめてからにして下さい」

「うっ……平部員の紅瀬君にそう言われちゃうと部長として動かざるを得ないわね」
「平部員って、勝手に部員にしないで下さい……」
言っておくが俺は部員になった覚えは一度もないぞ。今日、ここに居るのはあくまで支持者として来ているだけ。できうる限りの協力はしても料理部には入らない。俺が手伝っている理由はあくまで友人のため。そこから先は先輩と雫さんの問題だから俺が手助けするべきことではないと思ってる。
「紅瀬君のいけずぅ。素直に料理部に入っちゃいなよ、ユー。今ならオイシー特典、付けちゃうぞ♪」
「……結構です」
特典云々以前に刑事の息子である俺がそんな問題起こしちゃ世間的にもかなりまずいからな。もしそうなれば俺は間違いなく親父に勘当されること請け合いだ。
「――お話中、失礼します」
「あ、　白南風さん」
いつの間に雫さんの部屋に入ってきたんだこのメイドさんは？
それとも俺たち二人が口論に夢中で気付かなかっただけか？
「白南風さん、どうしました？」
「お客様にお出しするお茶請けをお持ち致しました」
「お茶請け……あ！　そうですね、お茶請けは必要ですよね。　白南風さん、わざわざ済みません」
「いえ。仕事ですから」
またエラくストイックだな。優秀な人間ってみんなこんな感じなのか？　瀬場さんの場合、ストイックと言うより情熱的って言った方が正しいけど……。
配膳台から手際よくお茶請け（名前は知らないが見るからに美味そうなケーキだと言っておく）を並べる。
「白南風さんもご一緒にどうです？　実はちょっと相談したいことがあるんです」

「私に、ですか？」
この言葉は意外だったのか、　白南風さんが目を丸くして　白南風さんの方を見やる。雫さんは彼女の返事を待たずテキパキと白南風さんの分のお茶を淹れる。彼女は一度だけ、小さく溜め息を付くものの、素直に雫さんの言葉に従うと決めたようだ。
「ぶしつけな質問ですが……本日、ご学友を屋敷へ招いたのはその辺りが理由ですか？」
「えぇ。勿論それもありますけど一度、友達を家に招待したいと思っていたんです。……駄目、でしたか？」
「いえ、良いことだと思います。少なくとも相原の姓を聞いても尚、お嬢様と普通に接しているのは私を知る限り、そこにいる方々が初めてですから」
相原の姓を聞いたらって……周囲の人間は相原家に対してどんな印象を持ってるんだよ？　どこぞの強欲セレブじゃあるまいし……。
「私が料理研究部に入ったのは昨日、お話しましたよね？」
「はい。最低限の自炊ができるようになりたいという動機で入部なされましたね」
「その料理部が今、窮地に立たされているんです……」
一度言葉を区切ったあと、雫さんは一つ一つ確かめるように説明していく。のんびりとした口調で回りくどいように聞こえるかも知れないが彼女の説明はちゃんと要点を抑えてあるから分かり易い。
「――つまり、お嬢様は料理研究部がちゃんとした部活であると、生徒自治会の方々に認めてもらいたいという訳ですね？」
「えぇ。何か良いアピール方法がないかと思って、今日は弥生さんと桐生先輩と一緒に相談しようと思って呼んだの」
「……」
雫さんの説明が一通り終わってから白南風さんは人差し指を唇に添えて考え込む。運動部と違って料理部には大会なんてものはない。同好会の調査と言っても活動している場所を観察するだけじゃないよな、どう考えても。

「自治会の方々がどのような審査法を取るか、私には分かりかねますが部活動で作る料理が一般家庭以上の出来栄えであるなら、廃部を免れるのではないでしょうか？」
「一般家庭以上……」
そこはかとなく絶望的な声色で雫さんが呟いた……ように聞こえたのはきっと俺だけじゃない。だいたいこの前作ったデザートは雫さんが望むべきものじゃなかったし、彼女の実力は未だ正確に把握してない。料理研究部が本気であることを証明するよりも先に彼女の実力を知るべきだろう。
「念のため訊くけど相原さん、ご飯物の料理とかは……未経験よね？」
「はい……。本を見ながらでしたら辛うじて出来ると思うのですが……」
その自信は一体何処から湧いて来るのだろう？　ちっともいい予感なんてしないのですが？
「と、とりあえず相原さんの料理レベルを今すぐ知る必要があるわねっ。幸い、キッチンが部屋にもあることだし……」
「分かりました。……白南風さん、何か適当な材料を持ってきてくれないかしら？」
「畏まりました。それで、お嬢様は何をお作りになるのですか？」
「えっと……スパゲティ？」
雫さん、頼むから疑問系で答えないでくれ。しかもスパゲティは殆ど茹でるだけだから。ミートソースも作るなら別だけど……。
「それじゃあ実力を知るには不十分よ。ここは定番だけどカレーにしましょう」
カレーか……それには俺も賛成だ。カレーなら少なくとも皮を剥く、野菜を切る、炒める、煮込むと、最低でも四つの作業を体験できる。伊達に料理研究部の部長を務めているだけのことはあるな。毎日自炊していても手抜きを前提としている俺とは天地の差だ。
「畏まりました。それではすぐに材料と道具を揃えて参ります」

言うなり、白南風さんは音もなく足早に退室していった。扉って開け閉めする時にどうしても僅かに音が鳴るものだけどそんな些細な物音さえ立てずに出て行くとは……これが相原家のメイドに求められるレベルなのか？！　……んな訳ねーよ。

白南風さんが必要な道具と材料を運んでくるまでの間に先輩は料理の段取りについて講義をしていた。カレーを作る手順だとか調理をするにあたっての優先順位とか素人は絶対にフィーリングで料理をしちゃ駄目だとか、そういう説明。これだけ事前に説明しておけば大きな失敗はないだろう――そんな風に考えていた時期が、俺たちにもありました。

「ちょっと待ったぁあああっ！」

開始から僅か数十秒にして先輩の叱責が飛んだ。ちなみに俺は調理には参加せず部屋にあった料理関係の本を読んで完成待ち。キッチンのスペースが狭いということもあるが指導するのに二人も要らないという理由で席を外しているだけだと言っておこう。

「ジャガイモもそうだけど皮を剥くならピーラーを使う！　それにこんな剥き方じゃ食べられる部分も捨てることになるから駄目！」

どんな剥き方したんだ雫さん……。興味本位でキッチンの方を覗いてみると先輩が怒るのも頷けた。こともあろうことに彼女は包丁で、それもジャガイモをナイフで削るように皮むきをしてた！　これじゃあ食べられる部分も一緒に切り落とされるし食材を無駄にしてしまう。

食材の無駄遣いもそうだが包丁の使い方が非常に危ない。一人でやる時もそうだがあんな扱い方をすれば近くにいる人が怪我する原因にもなる。仮にも刃物を扱う人間として、あれは見過ごせない。

「いい、皮を剥く時は大抵このピーラーを使えば問題ないわ。慣れてる人は包丁で全部やっちゃうけど貴女には百万年早いわ。機会があればリンゴ相手に皮むきの練習をするといいわ」

「はいっ」

リンゴの皮むきか……きっとお嬢様学校で育ってきた彼女には未経験なんだろうなぁ。普通なら小学校の家庭科の授業でやるもんだが……。

余談だが俺はこの授業で指を軽く切って周りの連中に笑い物にされたという苦い思い出がある。

「あの、先輩――」

「相原さん、今は先生と呼びなさい。貴女は今、物を教えられている立場なのよ？」

「わ、分かりましたっ。桐生先生」

「うむ、素直で宜しいぞ。相原生徒」

なるほど、先輩は形から入る人間であると同時に仕切り魔だったのか。ならば不用意に先輩には逆らわない方がいい。

「紅瀬く～ん、今失礼なこと考えてたでしょ？」

「いえ、別に」

相変わらず女って生き物は勘が鋭いな。俺は顔に出るタイプだから充分に気をつけなければ。

（つーか雫さん、マジで料理とは縁遠い生活送ってたんだな……）

雫さんの手捌きは一言で纏めるならとにかく危なっかしい。要領は思ってたよりも悪くはないが初歩の初歩から教えなければ前に進めないのは俺も先輩も揃って頭を抱えた。しかも何処で覚えたのか、中途半端に変な知識を覚えているから始末が悪い。

例えば――

「桐生先生、材料の中にリンゴとハチミツが見当たらないのですが……」

「そんなものを入れる必要なんてないわぁ！」

「えっ？　ですが、白南風さんもカレーを作る時は入れると言ってましたから、つい……」

「相原生徒、それを入れることによってカレーにコクが生まれるのは事実だがそれはハードモード……いわゆる応用編よ。確かに私はリンゴとハチミツを加えて旨みを増す方法を知っている。けどね、

そんなのを入れなくたってカレーは普通に美味しくできるわ。何故ならカレーは、花嫁修業の基礎でもあり、奥義でもあるから……」
と、若干電波の入った講義が開かれたり――
「あの、桐生先生……。私、辛いのは苦手なのでスパイスは少なめで――」
「スパイス？　そんなのはインド人か専門家が使うものよ！　むしろスパイスをれっきとした調味料として使えるなんておこがましい考えは捨てなさい！」
なんてインド人に真っ向から喧嘩売るような発言したり……まぁそんな感じで料理修行は進んでいく。……学園の名誉の為に言っておくが誰もが雫さんのような料理オンチではないことをキッチリ明言しておく。むしろ彼女が特殊なだけで他のお嬢様は花嫁修業と称してプロの料理人に教授してもらっていることが多いらしい。
「あの、桐生先生……。つかぬことをお聞きしますがこの料理本の記述にある大さじ一杯というのは？」
おおい、大さじぐらいは知っとけよ！　しかも今あなたが作ってるのはカレーだぞ？！　計量カップを使うような場面じゃねーだろっ。ほら見ろ、流石の先輩も呆れて頭を抱えてるぞ！
……あぁ、お嬢様って生き物はある意味希少種なんだって改めて痛感したよ。
「……ねぇ、紅瀬くん」
「何ですか？」
「私は相原さんに何処から突っ込みを入れたらいいの？」
「寧ろ俺が教えて欲しいです」
さて。教えるのは簡単だがここで何でも教えてしまっていいのだろうか？　ギャルゲーで言えば選択肢が出てくる場面。本当のことを教えるか、嘘を教えるか、あるいは考えさせるか？
……そもそもカレー作るのに何故計量スプーン云々が出てきてるのかは突っ込まないことにした。きっと適当に見開いたページに見慣れない単語があったから訊いたんだろう。

「雫さん、それは後で使用人たちに訊くことを勧めるから今はカレーに集中した方が――」
「はいそこ！　外野は料理が出来るまで待つ！　言っとくけど今日の夕飯は相原さんが作ったカレーだからね！」
マジですか先輩？　お嬢様発言全快な会話を間近で聞いた身としてはものすっごい不安なんですが……。

とまぁ、彼女の家ではこんな事があった訳だ。そして先輩の宣言通り、出来上がったカレーの半分は俺が持ち帰ることになった。
なに、味はどうだったかって？　いやこれが普通に不味いレベルで済んだから正直、ちょっとだけホッとしてる。水の分量を間違えたルーは水っぽいし野菜が大きすぎたりジャガイモが煮崩れしてたり……要するに絵に描いたような失敗作だった。後で使用人に何故煮崩れしにくいメークインじゃなくてジャガイモにしたのか訊いてみたら単に保存庫に無かったからだと言ってた。
ただ、この調理実習最大の失敗は作る量が明らかに度を越えてたってこと。白南風さんは作り直しを前提に多めに材料を持ってきたつもりだったがその材料全てを一度に使った結果、とんでもない量のカレーが出来てしまった。お陰で俺はタッパーでカレーを持ち帰るのではなく鍋をそのまま持ち帰る結果となった。
折角の食材を捨てることが出来なかった俺は結局、休日の食事は三食ともジャガイモが溶けた水っぽいカレーになった。これのせいでしばらく作り置きができるカレーを作りたくなくなったことを証言しておく。

自治会からの挑戦状（前書き）

自治会とクーデレ（？）会長さんの登場です。需要……あるのかこの属性？
それと全く関係ない話ですが銀レウスの執筆状況が好ましくありません。スランプ状態って奴です。ｏｒｚ

自治会からの挑戦状

休み明けの胃は激しく不調を訴えていた。いや、身体がどうこうしたって訳じゃないが、こう……言葉にするなら美味いモン食わせろやコラー！　と言った感じだ。そんな訳で今朝の朝食はいつものトーストと目玉焼きにフルーチェなんかを加えてみた。あぁ、俺はようやくあのカレー地獄から解放されたんだ。その感動を先輩に伝えたところ――

「いくら何でもオーバーよ、それは」

と、真顔で言い返された。オーバーなものか、先輩はあのカレーを大量に食べてないからそんなことが言えるんだ！　先輩には冗談にか聞こえないかも知れないが、土日は半分寝込むことになったんだぞ！？　マジで！

「次から料理部の試食は辞退しますから」

「あら？　可愛い女の子が作った手料理に魅力を感じないのは男としてどうかと私は思うけどなぁ」

「作った本人が味見して納得したものならともかく、味見もしないで人に料理を出すなんて論外です」

いくら料理に疎い俺でも味見ぐらいはする。そもそも料理をする以上、下手なものを出せばそれは相手への侮辱として捉えられても不思議じゃない。基本的に味を求めない俺だが、それでも人に出して恥かしくないものは作れる自信はある。

「今度、弥生さんに料理を食べさせる時は最高の料理でおもてなし致します」

と、先輩とは対照的に健気に言ってくる雫さん。努力家である彼女ならきっと、俺ぐらいのレベルに追いつくのにそれほどの時間を必要としないだろう。

「その日が来るのを気長に楽しみにしてるよ。……と、ここがそうだな」

言って、俺たちは目的地である部屋の前で一旦足を止める。扉にあるプレートには自治会室と書かれている。普通の学校にある生徒会と違い、自治会に入るには書類審査に合格しなければならない。選考基準までは知らないが少なくとも俺のような庶民は自治会で活動したくてもできない。そのせいか、自治会は恐ろしいところだという印象が非常に強い。現実問題、頑固者が多いって噂だけど。

「ほら紅瀬くん、早くノックしなさい」

「えっ？　どうして私がノックするんですか？」

「男の子でしょ？」

理由にすらなってないから。大体今の世の中は女尊男卑、つまり男よりも女の立場が強いんだぞ？　それに今日、用事があるのは厳密に言えば俺じゃなくて先輩の方だ。

「雫さんはともかく、私はあくまで支持者です。そんな人に頼りっぱなしでは料理部存続なんてものは夢のまた夢ですよ？」

「うっ……それを言われるとキツいわね……」

「大丈夫ですよ。ただノックして落ち着いて受け応えすれば済む話です」

その言葉で納得したのか、先輩はうんうんと頷き、やがて意を決したような表情で自治会室の扉をノックする。

「……はい」

少しの間が空いてから女の声が聞こえた。声から推理するところ、相手は恐らく古典的な金髪ロールでツンデレのツン状態の会長だろう。うわっ、なんか会うの嫌になってきた。

「料理研究部同好会・部長の桐生玲子です。本日は会長にお話があって参りました」

「どうぞ」

中にいる役員の許可を経て俺たち三人は自治会室へ足を踏み入れる。選ばれた人間のみが活動を許された自治会室は特別な場所だろうと想像してたけど――予想に反して内装は普通だった。

折り畳み式の長テーブル。パイプ椅子。良く分からない賞を飾っ

た額縁の数々。てっきりソファーやら専用テーブルが立ち並ぶゴージャスな部屋を想像してただけに、これは拍子抜けだった。
自治会の役員は一人しかいなかった。窓際の一番奥に座っている生徒はこちらの姿を確認すると遅々とした動きで席から立つ。残念ながら彼女の髪型は金髪ロールではなく、金髪セミロングだった。うん、惜しいところを突いてたな、俺。
「ようこそ、自治会へ。何か御用でしょうか？」
その自治会役員――タイの色が青だから三年だろう――から感じられるのは威圧的な雰囲気。言い換えるなら彼女がこの空間を支配しているような凄みが確かにあった。
「生徒会則第四項・附則に基づき、自治会の裁量に異議を申し立てに来ました」
「異議？　それは部活動の件についてですか？」
「そうです。申請書はこちらにあります」
おぉ、あの天真爛漫で考えることが大の苦手な先輩が小難しい言葉を並べている……。妙な新鮮さがあってちょっと感動を覚えた。俺がそんなどうでもいい感傷に浸っている間に役員は先輩が提出した申請書を軽く目を通してから、ハッキリとした口調で宣言した。
「受諾できません」
「なっ……！」
受諾できない？　この展開は俺も予想外だぞ。いくら自治会が特別な存在だからと言って申請書の受諾を拒否すれば生徒の不信感を募るのは火を見るより明らか。それとも彼女は個人的な恨みでもあるというのか？
「理由をお聞かせ願いますか？」
いち早く状況を飲み込んだ雫さんが気丈にも反論してくる。そうだ、いくら何でもこれは横暴が過ぎる。それ相応の理由がなければ納得できないぞ。
「この同好会、以前は部として成り立っていましたわよね？」
「はい」

「料理研究部が同好会となったのは充分な部員が確保できなかったからです。そこまでは何処にでもある話ですが問題なのは一年という時間がありながら部員の確保もままならず、自治会の決定に異を唱えるという身勝手な振る舞いを前に、どうして異議申請書を受諾できるのです？」

確かに……。俺は一年だから去年のことなんて全然知らないから何とも言えないが理屈は通る。同好会になったのが去年の三月としてそこから今に至るまで凡そ一年と二ヶ月の猶予があった。つまり、この人の言い分は『それだけ時間を与えられたにも関わらず部員を確保できなかった方が悪い』と言うものだ。

それは分かる、理解できる。だけど――

「役員だけの依存でそのような事を決めていいのですか？」

「会長の依存よ。何か不服でもあるのかしら？」

会長だったのかよ、この三年。言われて見れば確かにそれっぽく見えなくもないけど……会長と言ったら腕章ぐらい付けるだろ。

「だいたい、私に言わせれば料理部なんてお遊びみたいなものよ」

その言葉には流石の俺もカチンと来た。だが、ここで声を上げてしまえば相手の思うツボだ。我慢、我慢……。

「部員もいない癖に先生方の迷惑も顧みずに――」

「遊びじゃないわよ」

会長の言葉を静かに、けれども確固たる意志を込めて桐生先輩が腹の底から唸るような声を出す。人をおちょくって楽しむ、いつもの先輩じゃない。その瞳には確かな怒りが宿っている。

「部員を確保できなかったのは確かに私のミスよ。でもね、満足に活動視察さえしてない人間に遊びなんて言われる筋合いはないわ。少なくとも私は料理に手を抜いたことなんて一度もないわよ」

「どうかしら？　今年になっても部員の確保さえ出来てない人間の言うことなんて信用できないわ」

「部員ならここに居るわよ。今、アナタの目の前にいる相原雫さんと紅瀬弥生くん。どう？部費が出るにはあと二人足りなくても頭数

は揃ってるでしょ？」
「あの、俺――いえ、何でもありません」
ちょ、間違いを訂正しようとしたら思い切り足踏まれたよ俺ッ！
酷くないですか奥さん？！　俺はただの支持者としてこの場に居合わせているだけなのに本人の了承もなく部員としてカウントされた挙句、発言権さえ認められないんですよ！？
「あら、ここにいる子たちは部員だったの。てっきり、支持者を募るための数合わせかと思ったわ。……もっとも、申請書が提出されてなければ何の意味もありませんけど」
同意するのは癪だが実際その通りだ。その程度のアドリブが通用するほど白鷺学園の会長は甘くないぞ。
「それに二人とも一年のようですし、これでは同好会の質はますます落ちる一方でしょう。そんな未来のない同好会を、部として認めてしまえば他の部に示しがつきません」
「いいえ、そんなことはありません！　この二人は私が手塩を掛けて育てた立派な部員です。少なくともその辺にいる主婦よりはずっと料理上手です！」
「なっ……先輩？！」
ちょっと待ったぁああ！　今からでも遅くはないからその台詞は撤回した方がいいって、絶対！　後戻りが出来るうちに恥を忍んでその発言を訂正――
「面白いことを仰いますのね。あなたはそこに居る一年に絶対の自信がある、と？」
「あります」
ないないないない！　自信なんてこれっぽっちもないって！　雫さんを見ろ！　動揺が収まるよりも早く新たな動揺が来て落ち着く暇さえないって状況だぞ？！
「……いいでしょう。そこまで仰るのでしたら証明してもらいましょうか。料理研究同好会の実力とやらを……」
なんかトゲのある言い方だな。今の会長、まるで親の敵を前にし

てるような雰囲気だ。
「望むところよ！　私が自信を持って勧める愛弟子の――」
「誰が貴女の意見を聞く、などと仰いましたか？」
先輩の言葉をぴしゃりと遮り、目線だけで雫さんを見つめる。まさか、この展開は……。
「そこにいる一年生……相原雫さんでしたっけ？　彼女があなたの言う、並みの主婦を上回る部員であることを証明できれば部としての昇格を検討して差し上げます。……その代わり、彼女の腕が並み以下であるならば料理部は廃部。また、そこにいる一年の相原さんと紅瀬さんは在学中、同好会という形であっても料理部の再興を一切認めません」
「なっ……！」
そら見ろ。予想通り面倒なことになったじゃないか。しかも俺が部員じゃないことに気付いてるっぽいし。
「嫌なら別に逃げても構いませんわよ？　その場合、あなたの代で活動が認められないだけでそこにいる二人が来年、料理部を再興するというのでしたら何の問題もありませんから」
これは明らかな挑発だ。そもそもこの料理部は先輩がいて初めて成り立つ場所なんだ。雫さんに至っては先輩に教えを請う為に入部してきたというなら先輩の重要性は言うに及ばず。
「先輩、ここは――」
「いいわ。その条件呑むわ」
おぉい、俺がフォロー入れるよりも早く返答するとか。少しは空気を読んでくれ～！
「その代わり、相原さんのことを認めたら――」
「その点は心配しなくても結構ですわ。会長である私が自らの発言を撤回すれば、周りに示しが付きませんから」
そう言う会長の口元は明らかに笑っている。間違いない、この人は自分が負ける訳がないと確信してる。そうでなければあんなあからさまな挑発なんてする筈がない。

「それで、具体的にはどうすればいいの？」
「そうですね……私、洋食の中でもオムレツが好きですから相原さんにはそれを作って頂きましょうか」
「……」
「試食会は今週の金曜日、この時間に行います。依存はありませんね？」
「えぇ。せいぜい首を洗って待ってなさい」
「あら？　首なら毎日洗っていましてよ？」
あぁ……なんかもう色々ありすぎて収集なんてとてもじゃないけど付かないよ。しかもこの後、俺自身がどうなるかさっぱりわかんねーし。
てか本当、勝ち目なんてあるのかよ？

ひとまず雫さんには先に帰ってもらい、俺は先輩とじっくり話し合うことにした。俺の性格上、ここでなぁなぁにしてしまえば気付けば家庭科室に顔を出してる……なんてことになりかねないからな。
「えっと、その……御免なさい。正直、かなり身勝手な判断だって反省してます、はい」
開口一番。先輩の口から出た言葉がそれである。一応、俺に対して悪いとは思っているようだ。その証拠に俺は先輩の奢りで喫茶店の軽食セット（デザート付きでジャスト千円）をご馳走してもらっている。
「言っておきますけど俺、料理部には入りませんから」
「もぅ、相変わらずツンデレなんだから。幽霊部員という形で手を打つって気はないの？」
「調べられたら一発じゃないですか……」
先輩は知らないだろうが俺は奨学生として学園に通っているんだ。今でも結構、時間をめいっぱい使って家事仕事と勉強を両立させている。それに咥えて部活動までしたらとてもじゃないが成績の維持が難しくなる。

「それより先輩、雫さんのことですけど本気で勝てる見込み、あると思いますか？」
「四日も時間があるのよ？　気合いとやる気があればどうにでもなるって」
　またえらく少年漫画的なノリだな。そんな根性論でどうにかなるような問題でもないと思うのだが……。
「俺、真面目に訊いているんですけど？」
「分かってるわよ、それくらい」
　そう言って、桐生先輩はカップに満たされたミルクティーを飲み干して気分を落ち着かせる。
　因みに頼んだメニューだが俺はサンドウィッチと珈琲、デザートのケーキという、文字通り軽食セット。先輩はサンドウィッチにパスタ、デザートのパフェまで注文してる。この組み合わせ、絶対太るな。
「スポーツ選手が自主的に反復練習するのと同じことよ。諦めたらそこで終わり。幸い、卵焼きは美味しく作るのは難しいけど複雑な工程を必要としない。期日も少し長めに設定して貰ったからどうにかなるわよ、きっと」
「人を巻き込んでおいてよくそんなことが言えますね」
　まるで自分が与えられた課題をこなすかのような口ぶり。……いや、たんに開き直っただけか？　どちらにしても料理部の未来は雫さんに懸かっているのが現状だ。
「ところで先輩、課題のオムレツですが……あれって難しい料理なんですか？」
「紅瀬くんはふんわりとしたオムレツを作れる？」
「……」
　先輩に言われて自分がオムレツを作る姿を想像……しようとして断念した。作ったことがないのも理由の一つだが、箸を使って引っくり返すやり方が全然分からないからイメージのしようがない。
「時間があったら挑戦してみるといいわ。どれだけ難しいのか良く

分かるから」
　別に挑戦する気はないんだが……そこまで言うなら体験してみるか。あーでも、今日の夕飯は焼きうどんだから作るのはフライパン洗った後だな。
「私は明日、雫さんの様子を見に行くけど紅瀬くんはどうする？」
「いや、俺が行ってもやることなんてないと思いますが……」
　そもそも先週末に彼女の家に行った時も俺、本を読んでるだけだったし。味見だって俺よりもキャリアのある先輩の方が適任だ。しかも雫さんの家にはお抱えシェフまで居る。一番の近道は専門家に教授してもらうこと。つまり、俺の出番はないという訳だ。
　けど、何かないかな。俺にしか出来ない形で雫さんの力になれること。先輩の為じゃなくて、友達として雫さんを助けてあげたい。
「……分かった。元々巻き込んじゃったのは私だし、紅瀬くんがそういうなら何も言わない。ただ、会長には紅瀬くんは部員だって言っちゃったから金曜日にはちゃんと顔出ししてね？」
「分かってます」
「うん。宜しい♪」
　あぁくそ、何かないだろうか。俺にしか出来ないこと……。

　次の日から雫さんの特訓は始まった。いや、正確には昨日の夜からオムレツ作りに挑戦してたようだ。朝、それとなく手応えを訊いてみたら空元気で大丈夫としか応えてくれなかった。多分、自分の不器用さが浮き彫りになったんだろうな。手にいくつも貼ってある絆創膏がそれを物語っている。
　そこまではまだいい。だが事情を知らない人間がこれを見たら必ず勘違いを起こすのが世の常だ。具体例を挙げるなら水瀬。どうもあいつは彼女が陰で苛められているものだと曲解したらしく、俺が登校してくるなり食って掛かってきた。雫さんの弁護でどうにか事情を理解してくれたけど。
「最近ヤケに相原さんと仲がいいとは思ってたが、まさか俺の知ら

ないところでそんな事が起きていたとは……」
「いや、伏線はあったと思うぞ？」
それ以前に彼女が料理部の人間とコンタクトを取っている時点で普通は気付くと思うんだが……もしかしてこいつ、至上稀に見る鈍感男か？
「それよりお前、最近やけに帰り早いけど何してるんだ？」
「あ～、先週は家の集まりでゴタゴタしてたから。思い切って遊べるようになったのは昨日から」
街で遊んでた訳じゃなかったのか……。軟派なイメージが先行して家督を継ぐとかそういうイメージが全然湧いてこないんだが？
まぁそれはそれとして、俺はこいつに少し訊きたいことがある。
「なぁ水瀬、自治会の会長ってどんな奴か知ってるか？」
「自治会の会長？　……あぁ、鳳条院燈華のことか」
むぅ、なんか聞いただけで難しそうな漢字が羅列しそうな名前だな。どうして由緒ある家柄って奴はわざわざ字画の多い漢字ばかり使いたがるんだ？　雫さんの苗字なんか相原だぞ。誰にでも親しみ易くて覚えやすいから是非とも見習って欲しい。……あ、今から苗字替えるとか無理か。
「鳳条院議員は知っているな？」
「流石にそのぐらいは知っているぞ」
鳳条院議員――参議院議員でありキレ者の野党として知られている。昨今の福祉事情が良くなったのもこの人のお陰だと言っても過言じゃない。
けどまさか、彼女が議員の娘だとは……。でもそのわりに鳳条院議員みたいな正義感とかそういうのがあまり感じられなかったぞ？
「父親は正義感が強いし彼女にもそういうのがあるのは確かだが、規律に関しては結構、神経質みたいだぜ？　あれは絶対計画通りに物事を進めないと気が治まらないタイプだ」
誰もそんな評価訊いてねーよ。……しかし、規律に五月蝿いとなると少し厄介なことになりそうだ。首尾よく雫さんのオムレツに合

格点が与えられたとしても俺が正規部員でないことを口実に反論してくる可能性がある。そうなったら多分、料理部の存続は難しくなる。いや、俺が幽霊部員という形だけでも取ってその場を凌ぐという手がない訳でもないんだがそういう卑怯臭い手段は使いたくない。この辺の正直さはきっと親父譲りだな。

「そんなことより、だ。俺はお前がどうしてそんなに考え込んでいるのかが気になる。相原さんと仲違いしたと言うなら両手を挙げて喜ぶとこなんだが」

「どうやらお前に雫さんについての相談を持ちかけたのは間違いだったようだな」

「おいおい、ちょっと待つんだ友よ。俺がいつ相談に乗らないなんて言った？」

「相談に乗るとも、乗って欲しいとも言ってないと思うんだが？」

「たった今、気が変わった。今から相談に乗ることにしよう。さぁ、胸にしまいこんでいたものをぶちまけたまえ！」

……俺は本当にこいつに相談していいのだろうか？　こんな気紛れで優柔不断っぽく見えるこの男は信じるに足りるだろうか？

（まぁ、相談することは雫さん絡みだし、そこは信じても大丈夫だろうな）

それでもやっぱりこいつに話をするのは躊躇われたが、俺も中途半端な立ち位置で応援はしたくない。先輩は味見係として放課後は雫さんの家に立ち寄る。だから俺も俺にしか出来ない形で何か手助けしてやりたい。

「……話せば長くなるんだが――」

そう切り出してから俺はこれまでの経緯を短く纏めて説明した。雫さんが料理部に入った切っ掛け。部の現状。自治会が出した条件。俺が思っていること。諸々の事情を一切隠さずぶちまけていくと思いの外、気が楽になった。これで相手が水瀬でなければ最高だったんだが……ま、贅沢言えるような状況でもないしな。

「ふむ……。要するに、今キミは自分にしか出来ないことがなくて

困ってるってことか？」
「いや、始めからそう言っていたんだが……」
「なら話は早い。紅瀬、お前も試食係に加われ」
「はっ？」
試食係に加われ、だと……？　どうしたらそういう流れになるんだ？
「いいか、俺としては不本意極まりないが恐らく――いや、間違いなく相原さんはお前のことを頼りたいと思う反面、迷惑は掛けたくないという思いが渦巻いてる。授業中、チラチラとお前の方を見ていたから何かあるとは思っていたが今の話を聞いて確信した」
「……」
水瀬、お前勉強そっちのけでそんなところを観察してたのかよ……。
「けど、試食するんだったら多少なりとも専門知識を持っている先輩の方が――」
「やれやれ、キミという庶民は本当に鈍いな。桐生先輩が試食するといっても結局は放課後だろ？　ならばこっちは昼休みにそれとなく誘って、オムレツを分けて貰って感想言うだけでいいんだ。あの生真面目な相原さんのことだ。今日の弁当箱には絶対に自前のオムレツが入っている……」
その根拠と自信は何処から湧いてくる？　でもまぁ、全く参考にならなかったって訳でもなかったし、水瀬もたまには役に立つんだな。……本当にたまに、だけど。
「と、いう訳で情報料として本日の昼食は俺も参列する。異議は認めん」
「そんなの面と向かって誘えばいいじゃないか。親戚同士なんだし」
「親戚同士でも恥かしいものは恥かしいんだっ！」
「小学生かお前は……」
さっきは人に偉そうなことを言っておきながら恥かしさを理由に俺をダシに使って同伴しようとするとは……。策士なのかただの照

れ屋やのか判断しかねる。けど、こいつのお陰で少しだけ自分が進むべき道って奴が見えた訳だし……うん、そのぐらいの働きはしてやってもいいか。そうと決まれば膳は急げ。思い立ったが吉日。早速雫さんを昼食にお誘いしとくか。

「雫さん」

「はい？　……あ、弥生さん」

声の主が俺だと分かると雫さんは嬉しそうに顔を綻ばせた。前の授業で出された課題をやっているのか、ノートの端々には計算式が羅列してる。

「今日の昼休み、一緒に食べないか？　つっても水瀬の奴も一緒だけど」

「哲君も一緒？　……えぇ、構いませんよ」

雫さんは少しだけ考える素振りを見せてから快く返事をしてくれた。俺の後ろで何か一風変わったガッツポーズを取っている馬鹿がいるが全力で無視しておく。俺はこいつの奇行にあれこれ突っ込みを入れてやるほど寛大な人間じゃない。主に突っ込みどころ多くて処理しきれないのが理由だということを付け加えておこう。

「昼は何処かで食べる予定とかある？」

「いえ……。何処で食べる、という予定もありませんし教室でいいですか？」

教室か……無難な選択だな。食堂は場所取りが大変だし弁当組みが居座るのも居心地が悪い。中庭や屋上は仲の良いカップルとか居たら気まずいし。

「弥生さん」

「なんだ？」

「実は今日のお弁当、私が作ったオムレツを入れて来たんです。……それで、弥生さんに味見を、お願いしてもいいですか？」

おぉ……よもや水瀬の言葉通り自作のオムレツを持ってきていることは。一日二日で目に見えて上達していとは思わないが雫さんのことだ。きっと猛特訓して作ってきたに違いない。それに個人的には

前々からお嬢様のお弁当って奴に興味があったし。
「美味いと不味いの二択しか言えない男でよければ」
「ふふっ。弥生さんは専門家じゃありませんからそこまでは期待してませんよ」
「……」
うっ、なんだ……表面的には期待してない風に見えるのにその裏では俺からの意見をすっごく期待してますよ～的なオーラが滲み出てる気がするんだが。ついでに後ろからどす黒いオーラが俺に向けられているせいで若干、居心地が悪い。
「……。水瀬、橋渡ししてやった人間にそういう態度を取るのは正直、どうかと思うぞ？」
「うるせぇ、どーせお前は分かっちゃくれねぇよ。このガラス細工のように繊細な少年の気持ちがお前なんかに分かる訳ねぇ……」
「分からないって決め付けたら本当に分からないぞ。いいから話してみろ」
「相原さんの態度を見なかったのか？　全く、これだから朴念仁って奴は……」
「だから何が言いたいんだよ……」
「やかましいっ。お前なんか前髪で目元が隠れた主人公になっちまえ！」
何だよ、前髪で目元が隠れた主人公って。ちょっと想像したけど滅茶苦茶こえーぞ。しかも何に対しての嫉妬なのかさっぱり分からない上に逆ギレされたし。
「雫さん、水瀬は何に対して怒っているか分かるか？」
「多分、哲君は友達を取られて悔しがっているんだと思います」
「いやいやそれじゃ俺とこいつはおホモ達になるからっ！」
うむ。それについては激しく同意だ。何かの間違いで俺がバイだとしてもこんなチャラい奴なんか願い下げだ。一体何をどう考えればそういう結論に辿り付くのかワカラン。

生徒会長と放課後（前書き）

他の人の二次創作を読んでいたら一週間も間が空いていたことに気付く。

……時が経つのは早いものですね。（遠い目）

生徒会長と放課後

昼休み。雫さんとの約束通り、俺と水瀬は教室で机を寄せ合って食事をする。名家の子息女が通う学園というわりには弁当を持ってくる人間は多い。どんな理由で弁当持参なのかは知らないが、お金持ちでも弁当箱を突いたりするんだなーと思うと親近感が沸く。

さて。肝心の弁当だが恐らくというか間違いなく俺の弁当が一番地味だ。中身は昨日の夕飯に作ったハンバーグを活用して作ったサンドウィッチ。他にもハム、チーズと種類を揃えているが、ぶっちゃけ男が食べる弁当としては物足りない。

それに比べて、水瀬と雫さんの弁当は文句なしに美味そう。水瀬は豚の角煮やひじきの煮物が食欲を誘うし、雫さんの弁当は春巻きやエビフライが目立つ。しかも揃いも揃って重箱とかどんだけゴージャスなんだよと突っ込みたくなる。

「お前の弁当、なんか女みてーだな」

「そう言うなら自分で弁当作ってみろ。家事仕事がどれだけ大変か知るにはいい機会だ」

「いやー、ウチって結構考え方が古くてさ。男子厨房に入るべからずって言われてるから俺、自分ン家のキッチンには入ったことないんだよ。信じられるか？　ちょっとお湯沸かして珈琲飲むのさえ、使用人任せなんだぞ？」

未だにあるんだ、そんな古い仕来り。そもそも男が厨房に入っちゃ駄目というなら飲食店で働いている男はどうなるんだ？

「哲君の家って、元はうちと同じ華族だよね？」

「まーな。そうは言っても家自体はイマドキって感じだから全然実感ねーけど」

そうか。水瀬の家は元・華族だったのか。どうりでこいつの弁当は和食が多い訳だ。目の前の存在のお陰で胡散臭さが付き纏うけど。

「雫さん、問題のオムレツってどれ？」

「あっ、はい。それならこの下にあります」
そう言って、雫さんは別の弁当箱を広げて俺の前に差し出す。パッと見た感じ……はっきり言って上手く出来てるとは言い難い。しかも焦げ目も結構目立つし形も悪い。カレーを作った時からそうだったけど実は雫さんって不器用なんじゃないだろうか？
明日もこんな調子なら多分――いや、よほどの特訓を積まなければ絶対に間に合わない。
だが食べると約束した以上、ちゃんと食べなければ収まりが悪い。彼女から箸を受け取り、早速問題のオムレツを一口食べてみる。
「……」
「どうでしょう？」
「ん。不味くはないけど会長が食べたら間違いなく不合格だな」
「ですよね……」
俺の素直な評価に明らかに落胆する彼女。気の利いた言葉ぐらい掛けてやりたいところだがどうも俺は昔からそういうフォローが苦手なんだ。なんて言うか、自分の感情を素直に表現するあまり相手を傷つけてしまうことは一度や二度じゃないし、それが原因で対人関係がもつれたこともある。そういう意味では水瀬と雫さんはよく俺みたいな人間と付き合えることに感心する。
そんな俺に続くように水瀬も雫さんの作ったオムレツを一口食べる。
「……うん。初めて作ったにしては上出来だよ、相原さん」
「そんな。こんなのまだまだです」
「それでも相原さんって料理したことないんだろ？　一日二日でこんなに上達したんだから絶対相原さん料理の才能あるって！」
すげぇ、ただ褒めるだけじゃなくて相手の一長一短をちゃんと把握した上で褒めてるぞこいつ。しかもさり気なく俺を一瞥して如何にも『俺の勝ちだ』とでも言うような笑みを浮かべやがって……。
「……」
いやちょっと待て俺。何故水瀬なんかに対抗意識燃やしている？

俺は別に雫さんと水瀬が付き合おうがどうしようが構わない。雫さんは大事な友達だし、彼女が望んだことならば俺は特に反対なんてしないんだが……何故かこいつと雫さんが仲良くしているところを想像するのはあまり面白くない。

「おやぁ？　何やら不服そうな顔をしているようですが何か嫌なことでも御座いましたかな、紅瀬君？」

何キャラだよ、それ。今時そんな怪しい口調で話すような奴、いねーぞ。

「あ、弥生さん。もしかしてお弁当のおかずが欲しいんですか？　もしそれなら欲しいおかずを言って下さい。弥生さんのお弁当箱にお裾分けしますから」

しかも雫さんは雫さんで思い切り的外れなことを言ってるし。そりゃあ、おかずが欲しいかと聞かれれば当然欲しいと答えるさ。だって名だたる財閥の下で働いている料理人が作る弁当だぜ？　興味がないなんて言ったら嘘になる。

「あー、それじゃあその春巻きをもらえないか？　あとは雫さんのお見立てで」

「承りました」

笑顔でそう答えた雫さんは手際よく弁当の蓋の上におかずを乗せていく。……あれ、ちょっと待て。そういや俺今日箸を持ってきてないぞ？　あーでも、手で食べるという手段もなくはないが周りには良いトコ育ちの同級生がいる手前、そんなはしたない事は極力避けたいし……どうすれば？

「弥生さん、私の箸で良ければお使いになられますか？」

あぁそうか、箸を借りればいいのか。確かに春巻きやオムレツなんかを手で食べるのは抵抗が――いや待て俺。さっきどうやってオムレツ食った？

……。

記憶巻き戻し中。検索結果、雫さんの箸を使って頂きました。

「弥生さん、どうかしましたか？」

「雫さん……すごく今更な気がするんだが……」
「？　はい……」
「思い切り関節キスになるぞ？」
「〜〜〜〜ッ？！」
俺に指摘されて気付いたのか、ぼんっ！という効果音が出そうなくらいに顔を朱色に染める。くぅ、ちょっと可愛いじゃないか。
「え、えとその……だ、大丈夫ですよっ。不潔になる訳ではありませんし……」
「いーや！　これ以上箸を不潔にするのは衛生上、良くない！　紅瀬、相原さんからもらう料理は手で食べろッ！」
水瀬、それフォローどころか思い切り喧嘩売っているから。
「駄目だよ、哲君。おにぎりやサンドウィッチじゃないんだから。哲君は水瀬の人間なんだからもう少しモラルを勉強した方がいいっておじ様も仰ってたよ」
「はぁ……。どうして俺は金持ちの家なんかに生まれてきちゃったのかねぇ。家督を継げとか言われない庶子が羨ましいぜ」
「その気持ちは何となく分かるよ」
この学園に居ればそうした話題は自然と耳に入ってくる。ドラマや小説だけの世界だと思っていた親同士で決めた婚約者とか政略結婚紛いなこととか、さっき水瀬が言ったような家督を継がせる為の修行ナドナド……。自分の家に誇りを持っている生徒は意外と少ない。流石にこの男みたいに大っぴらに庶民が羨ましいという奴も珍しいけど。
「雫さんは水瀬みたいに金持ちの家が嫌いになったことってある？」
彼女から貰った春巻き（色々ゴネたけど手で食べることにした）をじっくり味わい、束の間の至福に浸ったところでふと思った疑問をぶつけてみる。多分、俺みたいな庶民は誰もがこういう疑問を抱いてはいてもそれを尋ねる勇気というのはなかなか出てこない。もっとも、俺はその辺そんなに気にしてないが流石に訊いちゃいけないことと、そうでないことの分別ぐらいは付く。

「ありますよ。私だって人の子ですから。もっとも、今はもう自分の環境を受け入れて前に進もうと決意してますけど」
自分の環境を受け入れた上で前へ進むって……さらりと凄いこと言ったぞ？　下々の人間があれはヤダ、これが気に入らないとか文句ばかり言うなか、雫さんは周りの環境と戦う覚悟を持ったのか。
……正直、凄くカッコイイって思った。俺だって戦おうって気持ちは充分あるけど彼女ほど断固たる決意を持ってる訳じゃない。魔が刺してきてそれに負けることだってある。理不尽なことを飲み下せるほど強くもない。けど彼女の言葉にはそうした、口では表現しきれないモノが凝縮されてる感じがした。
「雫さんは凄いな」
だからこそ、俺はその言葉を素直な気持ちで言うことが出来た。そして目の前にいるクラスメイトが掛け値なしの努力家なんだと改めて思い知った。きっと、こんな凄い友人を持てた俺は幸せ者だな。
「凄くなんかありません。私はむしろ、勉強と家の手伝いをきちんとしてらっしゃる弥生さんこそ、凄い人だと思っています」
「別に、凄いことなんて……」
もともと勉強は嫌いじゃなかったし、歴史や古典なんかは好きだ。数学なんかは『うっ……』と来るものがあるし、苦手意識はあるけどそれだけだ。勉強が好きという訳じゃないが自分の趣味を刺激させる教科は今でも意欲的に学んでいる。
「ん？　どうした紅瀬。サンドウィッチ要らないならもらっとくぞ」
「……」
だから水瀬、どうしてお前は空気を読んだ上でそういう行動に出るんだ。雫さんなんかお前の行動見てから笑いしてるぞ？
「やれやれ。そんなんだからお前は雫さんに振り向いてもらえないんだよ」
なんて、少し大袈裟気味に言って水瀬に習うように奴の弁当箱から豚の角煮を奪い、ひょいと口に放り込む。
「んなー！　それは俺の角煮ーッ！」

「因果応報。そう思って諦めろ」
「だとしても俺の方が代償でかいだろっ」
いや、お前シェフに弁当作ってもらってるんだから代償も何もないだろ……。
「えっと、哲君。弥生さんも悪気があってやった訳じゃないし、哲君も弥生さんのお弁当食べたから許してあげたら？」
「ぐっ。確かにそうなんだが……」
そうも何もまずは自分の非を認めろよ、お前。入学当初から気になってたんだがどうして水瀬は事ある毎に俺に突っかかってくるんだ？　俺としては退屈しないで済むし本気で迷惑とは思ってないからいいけど被害者としてはやっぱり気になるトコだ。
「……。悪かったな紅瀬。だからお前も角煮盗ったこと謝れ」
なんか誠意に欠ける謝罪だな。まー言葉だけでも反省してるから良しとしよう。
「あぁ。俺も悪気があってやったことだが許せ」
「弥生さん、悪気があってやったんですか？」
いや雫さん、今のは言葉のあやだから……。

放課後になると雫さんは真っ直ぐ校門付近で待機している自家用車へ向かう。俺は今週、掃除当番だから途中まで彼女と帰ることは出来ない。しかも白鷺学園は掃除の方法も少し変わっていて、水で湿らせた新聞紙を敷き詰めて、それをゴミと一緒に出すという何とも変わったやり方で掃除する。
前に何故こんな面倒な方法で掃除をするのか柊先生に訊いてみたら――
『埃が飛び散るのを防ぐ為です。それに新聞紙なら普通にモップ掛けするよりも綺麗になりますからね』
と、答えてくれた。そりゃ新聞紙にそういう使い方があるのは生活の知恵として知ってる。けどそれを毎日実戦するのは面倒だ。普通にモップ掛けすればいいものを、何故わざわざこんなことを……。

「紅瀬ー、そっち終わったかー？」
「終わった。あとは新聞紙一箇所に纏めて乾拭きして終わり」
「じゃ、早く終わらよーぜ」
俺の言葉に賛同するように水瀬は手際良く新聞紙を一箇所に集めていく。こういうときのこいつは実にいい働きをしてくれるから助かる。と言っても効率よく仕儀とをするのは単に遊ぶ時間を増やす為らしいが。
水瀬が新聞紙を回収しているあいだ、俺はクラスメイトに乾拭き用のモップを配り、新聞紙を捨てる為のほうきとちりとり、ゴミ箱をセッティングする。
「焼却炉までは誰が持ってく？」
「俺が持ってくよ。毎週自主的に掃除をすれば一ポイントもらえるし。塵も積もれば山となるってね」
「誰が上手いことを言えと言ったっ！」
近くでじゃれ合うクラスメイトには目もくれず黙って乾拭きする。水瀬が積極的に動いてくれているお陰で今日も早めに掃除が終わりそうだ。
「――うしっ。掃除終わり！　俺先に帰るわ」
「いやお前、まだ最後の片付けが――」
「あとよろ～」
あとよろ～って何だよ。ちゃんとした日本語使えって、全く。もう姿の見えなくなった水瀬にありったけの怒りの念を飛ばしつつ掃除道具を片付ける。残りのクラスメイトは焼却炉へ向かったから流れ解散になるだろうな。
（自主性も協調性もあるけど、こういうのは止めて欲しいよなぁ……）
思わず溜め息が出るが、恨み言は特にない。彼らは自分の仕事をキチンとこなした。だから文句は言えない。俺もそのまま帰ろうと思い、鞄を持って教室から出る。最短距離で階段へ向かう途中、見覚えのある生徒が目に留まった。

（あれ？　あの人って確か……）
後ろ姿を見ただけでピンと来た。自治会長の鳳条院だ。料理研究部のことがなかったら多分、総会でもない限りお目にかかることはないと思ってた。
「あら？　あなたは……」
会長も俺の存在に気付き、少し驚いた表情を見せる。できれば会長とは顔を合わせたくなかった。何かをしたって訳じゃないが、素直に気まずいし威圧的な雰囲気をまとっている人間はどうも生理的な拒絶反応が出てしまいそうだから。
「ちょっと宜しいかしら？」
うわぁ、来た。来ましたよこの人……。なんかもう全力前回で嫌な予感しかしないってこれ。
「済みません。今忙しいので……」
「そんなに警戒しなくてもいいわよ。取って食べる訳じゃないんだから」
むぅ、言われてみれば確かにそうだ。
「何か御用でしょうか。鳳条院会長」
「あるから声を掛けたのよ。ちょっといいかしら？」
そう言って会長は小脇に抱えていたファイルケースから何枚かの用紙と万年筆をセットで渡してきた。紙に目を通してみると部活の各部活の評価シートだと分かった。
「あなた、料理研究部の部員じゃないでしょう。あのときはうやむやにしといてあげたけど、本当はただの支持者。違うかしら？」
「やっぱりバレていましたか」
「これでも生徒の代表よ。見誤らないでくれる？」
うーむ。伊達や酔狂で会長職に就いている訳じゃないのか。流石は政治家の娘、と言っておくべきか。内心で感心してるあいだに会長は一度、言葉を区切ってから俺に向かってこう告げた。
「交換条件よ。あなたの事を黙認する代わりに各部活の評価を手伝って頂戴。断れば当然、桐生さんにあなたのことを言うけど、引き

受けてくれたら黙認しといてあげるわ」
「……。どうして俺なんです？　こういう仕事は普通、役員が――」
「役員は今いないのよ。私以外はね」
なん、だって……？　生徒自治会の役員が会長だけってどういうことだ？　そりゃあ、前に訪ねた時は鳳条院会長しかいなかったけどマジで他の役員がいないのか？
「……あぁ、勘違いしないでね。本当に私以外の役員がいない訳じゃないわ。一応、副会長に会計、書記がいるけど全員、訳アリの家柄なの。会計の娘だけは来てくれてたけど先週から実家の用事で放課後まで残れないから事実上、今の自治会を動かしているのは私だけよ」
あっ、なるほど……そういう訳か。どうして会長がわざわざこんな雑用じみたことをしてるのか、少し気になっていたけどそういう事情があったのか。だが俺にはどうしても一つだけ確認しておきたい事があった。
「それを引き合いに今後も……なんてことは言いませんよね？」
「その点は心配しないで。約束は守るわ」
「……分かりました。手伝います」
「ありがと。じゃあ早速だけど今日中に正規部は全部回るから。付いて来なさい」
今日中に正規部を全部回るって……うちの学園って確か部が二十近くあった気がするんだが。……もしかして会長はそれを全部一人でやろうとしてたのか？

会長との部活めぐりは自分でも驚くほど充実していた。目新しいものが目立つということもあるけど部活の内情を知るのは知的好奇心を刺激するには充分なことだ。
一例としてあげるなら陸上部と野球部。敷地の関係で運動トラックとグラウンドが合併しているせいで時々、ボールが飛んでくるから部員たちは困っている。今日はあくまで部の監査が目的だから苦

情の類は提出書に纏めて書けと一蹴した会長はなかなかサマになっていた。
で、各部を回っているあいだ俺は何をしてたかと言えば備品の状態と部員の出席率、部に対する意欲をシートに書き込んでいく。これ、絶対俺がしていいような仕事じゃないよな？　けど会長は『貴方のことは知ってるから任せても問題ない』とか言ってるし。
（奨学生ってそんなに目立つ存在なのか？）
念のため断っておくが俺は先輩と生徒会室へ向かうまで会長の存在を知らなかった。つまり俺は知らなくても会長は一方的に俺のことを知ってることになる。何処で俺のことを知ったか気になるがそれは今度訊けばいいか。
そんな調子で各部を回り続け、運動部・文化部全てを見回り終えた頃には空が茜色に染まっていた。
「あなた、思ってたより手際がいいわね。自治会に欲しいぐらいだわ」
「これぐらい、普通だと思いますけど？」
「そんなことないわよ。同じことを役員にやらせてたら一日じゃ終わらなかったわ」
それは一日で終わらないことを前提に動いていたと、解釈するべきだろうか？　けどこれって褒められてるんだよな？　淡白なのは変わらないから分からないけど……。
「優秀ついでに最後の一仕事も頼んでいいかしら？　強制はしないわ」
「構いませんよ。乗りかかった船ですから」
やべ。つい何時もの調子で軽返事しちまった。けど今日、親父が家を出るとき『帰りは明け方になる』って言っていたから特に問題ないか。
「下校時刻は大丈夫なんですか？」
「多少過ぎても問題ないわ。迎えの車を用意してもらうって言えば先生方も文句は言わないから」

あー、それは一理あるな。これが完全に女の子の一人歩きなら問題ありまくりだけど付き人がいるなら問題ないな。……それに比べて庶民な俺は駅まで徒歩か、とほほ……。

会長に案内されるまま、生徒会室までやって来る。監査に時間を割り当てるつもりだったのだろう、小山と化した資料が二つ三つほど並んでいる。

「付箋が付いているでしょう？　色毎にファイルケースにしまって頂戴。そのあいだに私はさっき貴方が評価してくれたシートを提出してくるから」

「え、えぇ……。分かりました……」

さらりとそう言ったけどこれ、結構な量だぞ？　俺が呆けている間に会長は机の上に生徒会室の鍵を置いてさっさと出て行った。一言にまとめるとスッゲー冷たいです。ツンデレというより一切のデレがないツンツン属性？

（いや待て俺！　ツンツンとかワケ分かんねーよっ！）

何となく胸中でセルフ突っ込みをしてみる。が、やっぱり虚しさが残るだけだったから素直に付箋毎に分けてファイルケースにしまうことにした。そこに書かれてあるのは自治会が生徒宛に配布するプリントや予算案など、部外者である俺が見ていいような内容じゃない物も混ざっている。

（いいのかよ、役員でもない生徒に任せて……）

自治会の未来に不安を感じたがそれ以上は考えないことにした。そんなことよりも今は資料の整理が先だ。なるべく余計なことを考えないように資料に集中して、無言でファイルケースへしまっていく。そうすると自分でも驚くほど無心でいられた。

「……」

こういう作業をしていると思い出すのは親父のことだ。今でもリビングで持ち出した資料を睨むように凝視したりしている。家のことなんてあまり気にかけるような人じゃないし、家族旅行なんて数えるぐらいしか行ってない。父親としてはともかく、刑事としては

立派なものだと俺は思ってる。
前に一度だけ、親父の部下と話をしたことがあって、その人によれば親父は捜査に対する執念が半端ない上に悪は絶対許さない正義感溢れる人間だと言ってた。俺にもそういう血が流れているかどうかは分からないけど、俺はそんな親父を尊敬している。あくまで刑事として、だけど。
「……うん。こんなものか」
資料の整理を始めてからおよそ十分。思いの外早く作業は終わった。十分弱しか経ってないにも関わらず外は夜の帳が降りかかろうとしていた。
さて。整理したはいいがこのファイルケース、どうするんだ？特に何も言われてないからその辺の戸棚に置いとけばいいのか？会長専用の机らしきものは見当たらないし……ま、本棚の目立つ場所に立てかけておけばいいか。何処においたかは鍵を返すついでに伝えとけばいい。
机の上に置きっぱなしにしてあった鍵を取って、出て行く前に簡単な戸締りの確認をしてから生徒会室を出る。扉を施錠して、ちゃんと鍵が掛かっているかどうかを確認してから職員室へと向かう。流石にこの時間ともなれば運動部と言えども皆、帰宅している。恐らく校内に残っているのは俺と会長、教師と一部の職員ぐらいだろう。
職員室の前まで来て、俺は一度だけ深呼吸をする。別に呼び出しされた訳じゃないが何故か職員室の前に立つと緊張するのは間違いなく全国の学生に共通することだと断言してもいい。……いや、そうあって欲しい。
「失礼します」
控え目にノックしてから断りを入れて入室する。会長以外の生徒がまだ校内に残っていたのが意外だったのか、教師達は驚いた顔で俺を見る。うわ、なんか俺スッゲー悪い事してるみたいじゃないか。
「えっと、生徒会室の鍵を返しに来たんですが――」

「鍵？　……あぁ、自治会の鍵ね。こっちに寄こして頂戴」
俺が職員室へ入って来たことに気付いた会長が柊先生と一緒に歩み寄ってくる。
「はい、ありがとう。……それより紅瀬君、まだ校内に残ってたんですか？　用もないのにこんな時間まで校内に残っているのは感心しませんね」
「それは――」
「いえ、柊先生。私が部活監査の件で無理矢理引き止めたんです」
俺が事情を説明するよりも早く、会長が事情を説明してくれた。そっと表情を伺うと後悔の念が浮かんでいた。
「鳳条院さん？　貴女が彼を呼び止めたの？」
「はい。私が紅瀬さんに監査の手伝いを要求したんです。私の配慮が足りないばかりに彼をこんな時間まで残らせてしまったのは私の――」
「会長、別に気に病むことはありません」
「紅瀬さん、ですが……」
「経緯はどうあれ、私は自分の意思で残りました。会長に物事を強要された覚えはありません」
「ふぅむ……」
俺の弁護を聞いて柊先生は考え込むような仕草を取る。正直なところ、減点は免れないと思っている。そもそも部活の監査が終わった時点で会長との約束は果たされたようなものだから断るべきだった。そのことを知った上で会長は俺に正面からお願いをしてきた。
断ろうと思えば断れた筈だ。けど俺は性分からか、拒否することをしなかった。監査のときと違い、自分の意思で手伝うと言った以上は責任の一端は俺にもある。だから会長が自分だけが悪いと言う風な言い回しには少し腹が立った。俺のことを少しでも信用してくれたのならそういう言い方はしないで欲しかった。
「……まぁ、今回は特例で許してあげましょう。それから鳳条院さん、次からはちゃんと役員に仕事を頼んで下さいね」

「はい。申し訳ありませんでした」
「結構です。では二人とも、帰り道には気を付けて下さい」
「はい。失礼しました」
「失礼しました……」
会長に続くように俺も職員室を出て行く。腕時計に目をやると午後七時半を回っていた。……あっ、時間を意識したら何か腹が減ってきたな。しかもなんかモーレツに肉食いたくなってきた。よし、今夜はちょっと贅沢してカツ丼にしよう。
「御免なさい。私の段取りが悪かったばかりに……」
「もう終わった話でしょう？　俺はそんなに気にしてませんから」
「それでもよ。お詫びに家まで送らせてくれないかしら？　あなた、徒歩通学でしょう？」
「普通の学生なら今頃帰るって子も結構いますから大丈夫ですよ」
「そうだとしても貴方は白鷺学園の生徒だということを忘れてない？」
うっ。確かにそれを持ち出されると反論出来ない。普段はそういうの全然気にしてないけど、世間的にはそうはいかないよなぁ。
「……そういうことなら、お言葉に甘えさせてもらいます」
「始めからそう言えばいいじゃない」
そう言いつつ、会長は携帯を取り出して電話をかける。二言三言やり取りをしてから電話を切って、俺の方を見てくる。
「すぐそこまで来てるみたいだし、待つことはないと思うわ。行きましょう」
一歩先を歩く会長に引っ張られるように後を追う。俺と会長との距離は五十センチぐらい離れている。
奇妙な感覚だった。部のことで対立している者同士がこうやって人気のない学園の敷地内を歩くその姿を想像すると実に変な気分だ。しかも相手は三年生で、親が政治家というオマケ付き。立場は違えど、互いの親は国民を護るという責務を負った大人を親に持つ子供。
「自分でもこんな事を尋ねるのは変だと思うけど、どうして私の手

伝いをしてくれたの？」
「どうしてって……」
「貴方と私は言わば敵同士。監査の件ならともかく、私の頼みを聞く義理なんて貴方にはないでしょう？」
義理って……そりゃ理屈から言えばそうだけど敵とか味方とかそういうのは全然考えなかったんだけど？
「確かにそうかも知れませんけど、それとこれとは別問題じゃないですか？」
「別問題って――」
「少なくとも俺は、敵とか味方とかそういう風には考えていません。それにそういうのって、何だか疲れませんか？」
「分からない」
俺の投げた問いかけに、会長は間を空けずにそう答えた。
「あやふやなモノを抱えるより、白黒はっきりさせた方が楽だから」
なるほど。確かにそれはあるな。いつも自分の優柔不断が原因で周りに流されてばかりの身としてはそれを実行できる人間は強いと思う。俺にはこれと言ったものがないからな。
「会長はなんでも白か黒で割り切るんですか？」
「えぇ。それの何処がいけないの？」
「いけないとは思いませんよ。少なくとも迷いながら前へ進む人間より、ずっと強いと思います。そういう人間はなかなか居ませんから」
そう――多くの人が迷いや後悔を抱えて、引きずりながら生きているのに対してこの人はそうしたしがらみを全部消化しながら進んでいる。弱さの裏返しと揶揄する輩もいるかもしれないけどそういう風に生きられる人間を俺は強いと思う。
「……。貴方、結構変わってるわね」
「そうですか？」
「えぇ。相手のことを素直に認めたり、嫌味なしに褒められるのはある種の才能だと私は思っている。……これで貴方が周りの人間に

流されるような人でなければ文句ないんだけど」
　それは言わないのがお約束ですよ。俺自身の名誉のため言っておくが、俺は言うほど周りに流されてるつもりはないぞ。ただちょっと困っている友人を方っておけなかったり簡単なことなら軽返事しちゃう人間なんだ。
　そんな感じで会長と話しながら歩いていると校門前に黒塗りの高級車が止まっているのが見えた。いやホント、冗談抜きで自動車通学してる人間の車は存在感が違うよ。親父が乗っている銀のクーペとはエライ違いだ。
「お嬢様、そちらの方が件の？」
「えぇ。紹介しておくわ。彼は一年の紅瀬さん。この人はボディーガードをしている柳瀬浩一さんよ」
「あ、どうも。一年の紅瀬弥生です」
　慌てて背筋を伸ばして挨拶をする。雫さんの付き人は壮年の執事って感じだけど柳瀬さんは若い。多分、二十代後半なんじゃないだろうか？　柳瀬さんに諭されるように車に搭乗する俺と会長。それを確認してから柳瀬さんも運転席に乗って車を走らせた。
　この時の俺はまだ気付けなかった。のちに起きるトンデモ騒動に巻き込まれることを。

濡れ衣で済む話じゃねーぞ！（前書き）

また遅くなってしまった。ｏｒｚ

あ、一応次が最終回です。

濡れ衣で済む話じゃねーぞ！

その日の雫さんは珍しく時間ぎりぎりに登校して来た。かく言う俺も今朝は慌しかったし弁当なんて作る暇がなかったから人のこと言えないけど。

「お早う御座います、弥生さん」

「おはよ。急がないと本鈴鳴るぞ」

校門前でばったりと会う俺達。思えば雫さんとは教室よりも校門であることが多い。お互い登校時間が同じ時間帯とはいえ、珍しいことだ。

残り少ない時間を気にしながら俺は走る。それとなく横を見ると雫さんもしっかり付いてきてる。本気で走ってないとはいえ、よく追いつけるな。

「雫さん、運動できたのか？」

「あっ、はい……っ。中学までは、剣扇舞を少々……」

剣扇舞って……確か刀剣とか扇子を使う舞いみたいなやつだよな？　詳しいことは全然分からないけど。

昇降口を抜けて階段を二段飛ばしで駆ける。ここまで来ると流石にキツいのか、雫さんは息を荒くしながらも懸命に足を動かしている。一生懸命付いてくる姿が子犬みたいで可愛いな。

四階まで一気に登って行き着く間もなく教室へ駆け込み、俺より十秒ほど遅れて雫さんが入ってくる。そのとき、タイミングを見計らったかのようにチャイムが鳴った。

「お、おはよう……ございます……」

「おはよう、相原さん。今朝は随分と慌しいわね」

「はい……。ちょっと、寝坊してしまいました」

寝坊ねぇ……。大方、夜遅くまでオムレツ作りに挑戦してたんだろう。勉強の他にも習い事だってある筈なのに……ちゃんと寝ているかちょっと心配になってきた。

「時間ぎりぎりじゃねぇか、紅瀬。しかもタッチの差ときた」
タッチの差だって？　何を言っているんだこいつは？
「お早う御座います、紅瀬君」
「ひ、柊先生……」
やべっ。昨日のこともあって流石に今回ばかりは減点されても仕方ねーぞ。しかもめっちゃ爽やかな笑顔を向けてるから余計に怖いッ！
「本来なら遅刻は限定対象ですがタッチの差で紅瀬君の方が早かったようですし、今回も見逃してあげますよ」
「あ、ありがとうございます……」
うわっ、言葉にすんごい棘を感じるんですが……。俺、もしかしたら柊先生に目ぇ付けられたか？　奨学生という身分を忘れた不良生徒とかいうレッテルを貼られるのだけは勘弁だぞ。
「では皆さん、ホームルームを始めますので席に付いて下さい」
そしてそれまで騒がしかった教室を仕切るように一際大きな声で先生が声を出す。こうして、今日も一日が始まっていくのを実感しながら俺も大人しく席に付いた。

昼休みは大人しく食堂で食べることにした。本当は雫さんと一緒に食べようと思ったけど今日は他の友達と約束をしてたらしい。水瀬に至っては『おホモだちに見られたくないやいっ』なんてワケ分からないことを口走ってたし。
そんな訳で一人で食堂へ向かってみると――
（うわっ……）
食堂に出るとそこは相変わらずの盛況だった。狭い食堂という訳じゃないがそれでもここは全校生徒の半数しか入らない規模らしい。何でも大きくする白鷺学園にしてはわりと地味なスケールだ。
券売機でキャビア丼（これもビックリするほど安い）の食券を買って受け取り口で食券と交換する。人混みを分け入りながら席を探すべく、目線をあちこちに配らせていると桐生先輩が食堂の隅でご

飯を食べているのが見えた。初めて先輩と会った時とは逆の立場だな。それならここはあの時と同じように振る舞ってみるか。
「ここ、空いてますか？」
「どうぞ――て、紅瀬君じゃない」
「先輩も今日は学食ですか？」
先輩と向かい合うように腰掛けて無難な話を切り出す。遠くから見つけた時は学食のご飯を食べているように見えたがどうやら違ったようだ。
「デザート目当てですか」
「えぇ。ここのシフォンケーキ、結構美味しいわよ～。紅瀬君は食べたことある？」
「美味しいという話なら沢山聞いたことあるんですがね」
どう考えても一個五百円は高いだろ。近所のケーキ屋でも高い奴が三百八十円だからそれを考えればどれだけ高いか容易に想像が付くだろう。
なに、発想が貧困？　うるせー、庶民ならこの程度の金銭感覚は当然なんだよっ！
「ところで先輩……」
「ケーキならあげないわよ」
いや、頼まれてもケーキ取らないから大丈夫だって。
「いや、そうではなくて……食べる順番、逆じゃないですか？」
普通、ケーキやアイスといったデザートの類は食後に食べると相場が決まってる。が、先輩は食前にデザートを食べている。……多分、突っ込んだらいけないことだろうけど気になった以上、突っ込まざるをえないだろうこれは。
「いいのっ。食後にまた頼むから問題ないわよ」
食後にまた食べるって……明らかに金の無駄遣いだから。別に止めたりはしないけど……。
「そういう紅瀬君こそ今日は学食？」
「弁当作る余裕がありませんでしたから」

「ふふん、駄目だよ紅瀬君。弁当を作る余裕を持つのも家事仕事のうちよ♪」
「現役で専業主夫やってる人間によく言えますね」
「あら？　私も家事仕事ぐらいするわよ」
本当かよ？　家事仕事は料理だけじゃないんだぞ？　日曜日だって朝起きてご飯作ったり洗い物やったり洗濯物を片付けたりしてるのか？
……まぁ、うちは親父と二人暮しだからそんなに手間は掛からない方だけど。
「あぁ、そう言えば先輩に一つ報告しておきたいことがあります」
「そんなに食べたら太る、とでも言いたいのかしら？」
「それもそうですが……俺が同好会の部員じゃないこと、バレてましたよ」
「うっ……。やっぱりバレてたんだ、紅瀬君のこと。……それで、鳳条院さんは何て言ってた？」
「黙認してくれるそうです」
「ふーん、黙認ねぇ……」
「何か不満でもあるんですか？」
「あるわよ。なーんか貸しを作られたみたいですっきりしないのよねー」
あぁ、そういう風に解釈したのか。それならちゃんと説明しといた方がいいな。
「別に貸し借りとかじゃないですよ。俺に一日限りの手伝いをさせる代わりに黙認するって言ってましたから」
「自治会の手伝いなんかしたの？！」
「そうですけど？」
なんだよ。自治会ってそんなにおっかないところなのか？　俺がそんな顔を浮かべていたかどうかは分からないけど先輩は思い出したように首を小刻みに振って俺の目を見てくる。
「紅瀬君は新入生だから知らないでしょうけど、前の自治会は本当

酷かったのよ？」
　そう前置きしてから先輩は一度だけ咳払いをして、話を続けた。
「二年前までこの学園はね、部活も同好会も結構多かったのよ。けど当時の会長だった人が相当融通の利かない奴でね、半分以上の同好会と部活を廃部にしたの。今の三年生なら誰でも知ってることよ。勿論、廃部になったところはそこまで真面目に活動しているところじゃなかったしその年は充分な予算が確保できなかったっていう背景があったみただけどね」
「だからと言って自治会を敵視する理由にはならないと思うのですが？」
　今の話を聞く限り、当時から自治会に相当な権限があるのは分かったけど先輩の反感を買うほどのものだとは思えない。
「いいえ。決定的なのはその年の秋に起きた出来事。そのとき、素行の悪い生徒が何人か目立ってたけど多分、普通の高校と比べたら許容範囲内なんだけど、あろうことかその会長はその生徒たちを退学処分にしたのよ」
「えぇ？！」
　退学処分って、明らかに生徒の裁量に任せていい問題じゃねーだろッ！　教師がそうした処分を言い渡すのならまだしも、自治会の権限で退学はやり過ぎってもんだろ。
「その当時、会長……鳳条院先輩も関わっていた、と？」
「そりゃそうでしょ？　鳳条院さんは入学当初から副会長の座に付いてたんだし」
　いや、一年で副会長とか別に珍しくないぞ。規則では副会長は二年と一年が一人ずつ就任するよう義務付けられてる訳だし。
「とにかく、そういうことがあったから自治会の存在は絶対だし誰も逆らおうとは思わないのよ。誰だって大事な場所を奪われたくはないでしょう？」
「……」
　先輩の言う言葉を、俺は素直に受け入れられなかった。

確かに先輩が入学した当時の自治会は問題があった。だけどそれは当時の会長に問題があるだけで鳳条院先輩が悪いとは思えない。約束は守るって明言してたし、部活の監査をする時もあくまで公正に判断していた。何より自分のせいで俺の帰りが遅くなったお詫びにと車で送ってくれるような人が悪人だとは思えない。

「今の話を聞いて紅瀬君はどう思った？」

「少なくとも、の会長は悪い人ではありません」

「そう思う根拠は？」

「自分の目と耳で会長の仕事ぶりと人柄を体感しましたから、では理由になりませんか？」

先輩が会長をどう思おうが俺は口出しする気はない。けどそれはちゃんと今の会長を知ってからにして欲しい。料理部の件については妥当な裁量だと思うけどそれとこれとは別問題だ。

「先輩、料理部のことを悪く言われた時こう言いましたよね。活動視察さえしてない人間に遊びなんて言われる筋合いはないって」

「うっ……はい。言いました」

「会長には会長の事情があるように、俺達には俺達の事情があります。立場が違えば対立するのは自然ですから会長イコール悪い奴だと決め付けるのはいけません」

「うぅ……一年なんかにいいように言いくるめられている自分が果てしなく悔しい」

「いや、別に言いくるめている気はないんですけど……」

俺はただ自分が感じたことをそのまま口に出しただけだし。喋っている途中で先輩の反感を買うんじゃないかって結構ヒヤヒヤしたけど。

「けど、相原さんの味方をするわりにはあの会長さんのこと気に入っているように見えたのは私の気のせいかしら？」

「茶化さないで下さい。あれはあくまで俺個人の評価ですし、会長派に寝返るようなことなんて絶対しませんから」

「分かってる。冗談よ」

冗談だったのか……。結構本気にしちゃったぞ。そんなに親しい間柄ではないが先輩は自分が楽しむ為なら俺をいくらでも弄り倒すような人間だと思ってるから油断できないんだよなぁ。
「紅瀬君は少し固すぎるわよ。もうちょっと肩の力を抜いて生きてみると楽しいわよ」
「目の前に肩の力を抜きすぎている人が居るように思えるんですが？」
「失礼しちゃうわね。人よりちょっと青春を謳歌してるだけよ」
どっちも同じジャン。まぁ先輩にはデザート専門のフルコースを作るパティシエになるっていう夢があるから努力は怠ってないだろうけど。
「で、話は変わるけど紅瀬君」
「なんですか？」
「今日はどうして一人なのかな？　おねーさんに話してごらん。ほれほれ～」
「何の話ですか？」
「とぼけなくてもいいわよ。水瀬君に相原さんを取られちゃったから拗ねて学食に来たんでしょ～？」
「違います。雫さんは今日、別の友達と一緒に御飯を食べてるだけです」
「とか言っちゃってぇ～。本当は水瀬君に取られたんじゃな～い？
正直に話してくれたらおねーさん直伝のオンナを口説く秘訣を教えちゃうぞ♪」
「だから本当のことを言ってるじゃないですか」
全く、ああ言えばこう言う、こう言えばああ言うと来たもんだ。しかも雫さんの名前出されるまで一番訊きたかったこと忘れてたし。
「俺のことより雫さんのオムレツ作りの成果はどうなんですか？先輩、昨日も雫さんの特訓に付き合ったんでしょう？」
順序が逆になったけど先輩に会ったらまずそれが訊きたかった。我ながらとんでもない遠回りをしてしまったと思う。ギャルゲーで

言えばフラグクラッシャーってところか。
「露骨な話の逸らせ方だけど……ま、今日はこのぐらいで勘弁してあげるわ」
　別に話を逸らした気はないんだが……いや、突っ込むまい。ここで反発してしまえば間違いなく墓穴を掘ることになる。
「正直、ちょっと厳しいわね。最初の頃と比べたら幾分かマシになったけど……鳳条院さんの下を唸らせることは難しいわ。少なくとも今日の段階で格段に成功率をあげない限り、勝機はないって思った方がいいかも」
「そんなに酷いんですか？」
「ううん。一応オムレツにはなってるわ。ただ、形が悪かったり焼きすぎたりして完成には程遠いってだけ」
　あっ、なんだそういうことか。言われてみれば確かにオムレツとしての原型は留めているが皆が想像するようなふんわりオムレツではない。そこまで完璧なものを作るよう明言された訳じゃないけど、ここには例外を除けば生粋の令嬢とお坊ちゃましかいない。生半可なものは食べ物として認めてもらえないだろう。
「雫さんの心配をしているのは分かるけど、紅瀬君は自分に出来ることは見つけられた？」
「俺がそれを模索しているの、分かってたんですか？」
「ううん。でも紅瀬君のことだから黙っているとは思わなかっただけ。で、実際のところどーなの？」
「オムレツ作りの要点をまとめたメモの手渡しぐらいなら考えたんですが、役に立ちそうもないでしょう」
　そもそも雫さんはお抱えのシェフに調理法を伝授してもらっているんだ。素人も同然である俺が調べ上げたことなんて役に立つ訳がない。
「充分なんじゃない？」
「えっ？」
　ところが、俺の考えを否定するように先輩はきっぱりとした口調

で俺に告げた。充分って、そんなんでいいのか？
「相原さんも一応、シェフに作り方は教わっているみたいだけど向こうも忙しいでしょう？　それに一人でコツコツ作業するよりは競争相手が居た方がいいと私は思うの」
　あー、互いに競い合って切磋琢磨するって発想はなかったな。いや、俺はオムレツに関する資料を集めただけで実際にはまだ作ってないが。
「じゃあ紅瀬君は今日の放課後、雫さん家に来る？」
「いえ。今日は今日で予定がありますから明日でいいですか？」
「雫さんの手伝いより大事な予定？　それってなんなの？」
「家事仕事ですよ。足りない食材や洗剤なんかを買い足したりしているとあっという間に時間が過ぎますから」
「あー、それなら仕方ないか……」
　よく、生活費と小遣いを一緒にしている輩がいるがウチはそんなことはしない。それにその金は俺のじゃないからよく考えて使うべきだから無駄遣いは絶対に出来ない。ただし、材料を無駄にしてしまうことはよくある。具体的な例を挙げるなら夕飯作っておいたけど食べてくれなかったりとか。そういうときは問答無用で朝食か弁当のおかずになることが多いけど、痛みやすいものだった場合は捨ててしまう。
「別に一日ぐらい親に任せてもいいじゃない」
「親が宛にならないから自分で家事仕事をしているんです」
「紅瀬君のご両親って、共働き？」
「いえ、父子家庭です。親父は刑事ですが最近は忙しいみたいで不規則な生活送ってます」
「……父子家庭、だったんだ」
「えぇ。私は全然気にしてませんけど」
　そりゃ、子供の頃はわりと寂しんボーイな少年だったけど成長するにつれて親父の仕事を少しずつ理解してきたし、それがどれだけ大変かって知ることができたからこそ、俺が家事仕事を積極的にや

るようになった。
「じゃあさ、今度紅瀬君の家に遊びに来ていい？　相原さんも一緒に」
「俺の家、ですか？」
「うん。で、そして二人で御飯作って紅瀬君に食べて貰うの。お袋の味とまではいかないけど女の人が台所に立って御飯を作るっていうのを一度ぐらいは味わいたいって思うでしょ？」
「いや、別にそうは――」
「思うわよね？」
だからどうしてイエスと答えろと言わんばかりに詰め寄る。
「私と相原さんの手料理、食べたいわよね？」
「……はい」
結局先輩の有無を言わせない迫力に根負けしちゃった俺。まぁ日程までは決めてないし、ただの口約束で終わるだろう。気まずいものを隠してる訳じゃない。家の中が散らかってるから上げたくないだけだ。
想像して欲しい。机の上に食べ終わったカップ麺や食器、新聞が置かれた机。乱雑に積まれた雑誌の山。脱ぎ捨ててある衣服。小汚い床。はっきり言って他人を招待できるような家じゃない。そもそも俺、片付けに関してはわりとルーズだからそういうところはあまり知られたくないし見られたくもない。
「そのうち遊びに行くから楽しみにしててね♪」
「気長に待ってますよ」
できればそんな日は一生来なくてもいいがな。

例によって例の如く暇を持て余す放課後。雫さんは先輩に料理指導。水瀬は街で知り合ったという女の子と遊びに出掛けた。
ありのままの心境を話そう。めっちゃ寂しいです、俺。いくら買い物するためにお誘いを断ったとはいえ、流石に寂しいものがある。きっと、俺の背中には哀愁がむんむんと漂っているに違いない。

「ずいぶんと辛気臭い顔してるわね」
そんな哀愁を漂わせていたせいか、俺は昇降口付近で呼び止められた。相手は振り向かなくても分かる。鳳条院会長だ。
「今日も自治会の活動ですか？」
「いいえ。今日は親戚同士の集まりがあるから欠席」
「今の自治会は会長しかいないなら欠席も何もないと思いますが」
「それもそうね」
俺の言葉に鼻で笑うと会長はさっさと上履きから靴に履き替える。革靴なんてよく履けるよなぁ。俺なんかくるぶしに淵が直撃して痛くて痛くてもー堪らない。
「……。靴紐結わくの、面倒ではなくて？」
「庶民にとってはこれが普通ですから」
そもそも運動靴が庶民の靴というのは流石に偏見だろ。運動部に所属する人間なら誰でも靴紐ぐらい結ぶし、あの雫さんでさえ靴紐のある靴を当たり前のように受け入れてる。
程なくして靴紐を結わき終えた俺は会長の後ろをそれとなく歩いて校門を目指す。お互い、何かを話すことはなかったがさりとて気まずい雰囲気でもない。共通の話題もないし立場上、俺と会長は敵同士だから馴れ合う訳にはいかない。
「……？」
校門前まで来ると、俺と会長は足を止めた。背広を着た大柄な男が二人。男の一人が俺達の姿を確認すると歩み寄ってくる。しかも男の頬には刃物で切られたような跡が残ってる。やばい、身に纏ってる空気からして嫌な感じがする。
「鳳条院の人間だな？」
「……」
男の質問に会長も俺も答えない。後にして思えばここは違うと即答するべきだったかも知れない。男はその沈黙を肯定と受け取り、ポケットから無骨なモノを――スタンガンを取り出す。まさか、この展開は――

（営利誘拐！？）
そういや親父が前に言ってたっけ。この近辺で不審者の目撃情報が相次いでるって。まさかこの男がその不審者か？！　いや、そんなの考えてる暇なんてない。早く助けを――
「……ッ」
暗転。俺が声を上げるよりも早くもう一人の男が俺の鳩尾に重い一撃を喰らわせる。あまりの痛さに呼吸さえ出来ず、瞬く間に身体の自由を奪われる。一瞬だけ会長の姿が見えたがスタンガンで気絶させられていた。
その後はもうあっという間だった。自由の利かない俺を縛り上げると軽々と担ぎ上げられ、車の後部座席へ放り投げられる。しかも周囲には生徒の姿が見えない。えっ、何だよコレ……。もしかして計画的犯行ってやつ！？
「よし。出せ」
俺を殴った男が短く告げると車は急発進する。ちょ、これ本気でどーなるんだよっ！？

華麗なる脱走劇（前書き）

長すぎた……前話をもう少し長く取っておけば良かったと心底反省してます。ｏｒｚ

何はともあれ最終話、どうぞ。

華麗なる脱走劇

両腕を縛られ、目隠しされたままの状態で連行されること小一時間。どこかの倉庫にでも拉致られるのかと思ったがそうじゃなかった。目隠しを外されて真っ先に目に移ったのは見知らぬ廃屋。えっ、何このシチュエーション？　実はドッキリ番組とかそういうオチ？

オーケー、スタンガンは流石にやり過ぎだったがドッキリなら笑って許してやろう。

「さっさと歩け！」

「ちょっと、そんなに乱暴に扱わないで頂戴！」

従順に従う俺とは対照的に会長はまー見事に典型的な暴れ方をしてらっしゃる。とはいえ、大柄な男の腕力の前に女が太刀打ちできる筈もなく、結局力ずくで連れて行かれることになった。

誘導されるまま、廃屋の二階へ歩かされ、ある部屋へ放り入れられる。粗悪なベッドと小汚い木製の椅子とテーブルがあるだけの部屋。

「あなた達、私達をこんなところへ連れてきてどうするつもり？」

「ふん。鳳条院の人間とは思えない発言だな」

見下したように言い放ち、語り始めた。うわー、これ完璧に漫画の世界だよ。誘拐して黒幕がその目的を暴露するとか。

「鳳条院家の人間は実にあらゆる分野において活躍している。政界、財界、商業界……お前の親父や兄弟には四六時中、ガードマンが張りついているせいでなかなか手が出せない」

あー、なるほど。確かに会長なら社会で活躍している人間よりはガードが甘いよなー。あの狭い道なら迎えの車を妨害するなんて造作もないしあの時間帯は結構人通りが少ないから誘拐にするには都合がいい。

「俺たちは権力に興味ないがお前たち『姉弟』をネタにすれば、それこそ馬鹿にならないほどの身代金が手に入る。ま、誘拐した理由

はそういうことだ」
　ちょっと待て。この男いま姉弟って言わなかったか？　もしかしてあれか。俺は目撃者だから誘拐されたとかそんなんじゃなくてとばっちり喰らったって訳？　だとしたらなんでこの男は俺たちを姉弟だと思った？
「何を言ってるのかしら？　彼は鳳条院の人間じゃないわ」
「無駄だ。そいつが昨日、お前と車に乗ったのは確認済みだ」
「うわっ。アレ見られてたのかよ……」
　思わず唸り声が出る。今回の件で会長に責任はない。完全に相手側の勘違いだ。つーか一緒に車に乗ったからという理由で鳳条院の人間だと決め付けるのは早計過ぎるだろ。
「もう一度言うわ。彼は鳳条院家の者じゃない。彼だけでも解放しなさい」
「すると思うか？」
「……。ま、普通しねーだろーな」
　観念したように俺はそう吐き捨てる。ここで俺を解放すれば事が露呈するのは必定。最悪、警察沙汰になる。そうなることを防ぐ為にもこいつ等が誰か一人だけを解放するってのはあり得ない。
　俺の言葉に男は不敵な笑みを浮かべながら口を開く。
「そっちの男は物分りがいいようだな。とにかく、逃げようなんて考えない方がいい。場合によっては――」
　背広の内にあるホルスターから黒塗りの銃を取り出し、わざとらしく撃鉄を下ろし、銃口をピタリと額に当てる。
「殺すことも視野に入れてある」
「……っ」
　すぐ隣で会長が震えたのが分かった。流石の俺でもこればかりは冷や汗が出た。ぶっちゃければ銃を持っているのは予想外だったから。ナイフぐらいなら持ってるだろーなと、思ってはいたけど……。
「兄貴、そろそろ……」
「分かってる」

もう一人の男に催促され、男は拳銃をしまい、部屋から出て行く。それを皮切りに会長はペタンと、埃だらけの床に座り込む。う～ん、こりゃ精神的に相当参ってる感じだなぁ。
「会長、大丈夫ですか？」
「……」
呼びかけても返事はない。俺の声は聞こえていても目まぐるしく変化した状況に脳が付いて来てないんだろう。つーか俺、もう縛られてるフリしなくていいよな？
「よっと……」
「ちょ！？　どうなってるのよ？！」
「いや、これに反応するなら呼びかけにも反応して欲しかったんですが……」
そりゃ、何の動作もなしに縄が解けたりするところを見れば驚くだろうけど俺は呼びかけに無視されたんだぞ？　ちょっとは気遣って……いや、別にいっか。
「縛られる時、縄を数センチだけ握ってたんですよ。そうすれば手を離すだけで縄抜けできますから」
これは俺が自分で得た知識じゃない。親父に教えてもらったものだ。白鷺学園への入学は特に反対はしなかったが、万一の時にと誘拐対処マニュアルなるものを俺に渡してきた。当時はこんなの役に立つのかと半信半疑だったが、本当に役に立つ日が来てしまうとは……。人生、何が起きるか分からないな。
「さて、と。どうやって逃げるかねぇ」
「あなた、ひょっとして逃げる気なの？」
「そりゃそうですよ。助かる保証なんてありませんし……」
言ってから、俺は状況整理に勤める。
携帯は当然ない。縛られる時に没収されたから当たり前と言えば当たり前。あるのは財布となけなしの財産・千百二十五円。それと俺を縛ってた縄。
当然、ここが何処の廃屋かは分からない。駄目もとでドアノブを

回してみる。しっかりと鍵は掛けられてるが突き破ろうと思えば突き破れるかも知れない。
「……。あなた、絶対におかしいわよ。元はといえば私が原因でこうなったのよ？　普通、恨み言とか言うものじゃないの？」
「恨み言？　何故です？」
確かに昨日、会長と関わりを持って彼女の厚意に甘えなければこんな事にはならなかったかも知れない。けどそれはイフの話に過ぎないし、会長が悪いとも思わない。ただ今回は間が悪かっただけの話だ。それに俺とて白鷺学園の生徒。今回の勘違いみたいに学園生イコール金持ち、なんて目で見られて誘拐されても変じゃない。……まぁ、俺単体で誘拐されるとかその確率は宝くじで一等を当てるぐらい低いけど。
「会長、まずは落ち着いて周囲の観察に徹しましょう。言いたいことはここを出てからで充分間に合うでしょう？」
「出る？　私たちは素人よ？　大人しく家の者が助けにくるまで待った方が得策よ」
「あー、まぁ普通ならそう、なんですが……」
やばい、どうしよう。ちょっと正論なんじゃね？　と考えた俺がいます、はい。だけどその、何ていうのか……あの男たちが大人しく身代金をもらったらはい解放～、なんてことをするとは限らないし何か裏があるようにしか思えない。
「……。会長は、父親やお兄さん達が必ず助けてくれると信じているんですか？」
「えぇ。今の携帯ってＧＰＳって機能が付いているんでしょう？あれで逆探知すればここに私が居るって――」
「それは携帯の電源が入っている場合です。そのぐらいの知識は犯人側にもあると考えるべきでしょう」
「……」
今度は会長が押し黙る番だった。えっ、嘘。そんな初歩的なことにも気付けなかったのこの人？　うん、逆探知？

「……今気付いたんですが、会長」
「何かしら？」
うわ、スッゲー機嫌悪くなってるよ。けどこういうのは確認の為に訊いておいた方がいいよな、絶対。
「会長には発信機とか付いてないんですか？」
いつだったか、水瀬と他愛もない話をした時に自分の制服には発信機が付いていると自慢げに話したことがあった。何でも水瀬は子供の頃に誘拐されたらしく、それを教訓に衣服の何処かに発信機を埋め込んであると言ってたっけ。雫さんは誘拐されそうになったことはないそうだが水瀬の誘拐事件を教訓に雫さんの制服にもやっぱり発信機が付いているとか、そうでないとか。
「ないわよ、そんなの。二十四時間監視されてるみたいで気持ち悪いから親に懇願したのよ。もっとも、今回はそれが仇となった訳ですが……」
そうか。ならここを探知するのは不可能だろう。残された道は自力で脱出するか穏便にことが済むのを期待して待ち続けるかのどちらか。
「それで、あなたはまだ脱出を試みるつもり？」
「できる限りのことはするつもりです」
会長に面と向かってはっきり言ってから俺は部屋の散策を始める。散策と言っても床は木製で隠し扉がある訳でもないし引き出しやクローゼットが置いてある訳でもない。ここは一つ、ベッドを持ち上げてそれで扉をぶち破って外に出るか？
「……」
いや、多分というか普通に考えて駄目だ。見張り役が下にいるに違いない。さっき俺が縄を解いたっていう会話が聞こえてなければいいけど……聞こえてないよな？　動きがないし。となれば残る移動手段は窓だな。
「窓なんか開けてどうするつもり？」
会長の言葉を無視して俺はザッと外壁を見渡す。足場になりそう

な箇所がある。そこに足を乗せて雨樋を掴めば隣の窓のサッシぐらいは掴めるかも知れない。命綱代わりの縄を自分の身体に巻きつけ、それを粗悪なベッドの足に括りつける。これで落ちても死にはしないだろう。
「何をする気？」
「隣の部屋に移れるかどうか調べるんですよ」
「なっ――」
「あまり騒がないで下さい。見張り役が駆けつけでもしたら大変ですから」
俺の言葉に会長は開きかけた口に手を添えて、コクコクと頷く。
さて、ここからが問題だ。
俺は慎重に足場に体重を乗せ、雨樋をしっかりと掴む。雨樋を支えてるネジや鉄の老朽化が限界値に達していたらそこでアウトだったが、どうやら俺の体重を支えるだけの耐久力は残っていたようだ。
そっと胸を撫で下ろし、左手で向こう側のサッシを掴み、身体を横へ移動させて窓の外から部屋の中を覗き込む。部屋の構造そのものはそう変わらないがこっちはものがありそうな雰囲気だ。
（よし……）
窓に手を添えて開くかどうか確かめてみる。少し手間取ったがどうにか窓は開いてくれた。窓を全開にして苦労しながら隣の部屋へ乗りうつ――ろうとして俺の身体は急静止した。
何故？　と考えてからすぐに答えが浮かんだ。俺を縛っていた縄が短すぎて隣の部屋まで移動できないのだ。
「会長、すみませんがベッドの足につけた縄を外してくれませんか？　このままでは隣に移動できません」
「命綱を外して大丈夫なの？」
「手はちゃんとサッシを掴んでますから大丈夫です」
「……」
俺の言葉の真意を確認するように窓から身を乗り出して確認を取る会長。いや、そこは確認しないで外そうぜ。

とにかく、俺の言葉が本当だってことを確かめた会長は言葉通りベッドの足に括り付けた命綱を外してくれた。おし、これで隣の部屋を散策できるぞ。

「よっと」

隣の部屋に飛び移ってから身体に巻きつけた縄を解く。会長と一緒に連れてこられた部屋と違ってここにはベッドがない代わりにクローゼットと机がいくつか並んでいる。中をくまなく調べてはみたものの、役に立ちそうなものはなかった。

はっきり言おう。何とも空気の読めない廃屋なんだ……ッ！　普通こういう状況下なら役に立ちそうなアイテムがぽつんとあって、それを見た俺がナイスな閃きでそのアイテムを使って脱出するとかそういう展開が待っているだろーがっ！

……ハイ、ゴメンナサイ。ちょっと現実逃避してみたかっただけです。

しかし人間というのは案外、諦めの悪い生き物である。脱出に役立ちそうなものがないからと言って助けが来るのを大人しく待つのは俺の性分ではない。いや、ケースバイケースで待つこともあるけど。

「……」

四つん這いになって床を調べてみる。隠し通路がある訳でも収納スペースがある訳でもない。どうやら真っ当な手段で脱出するとすればドアを突き破るしかないようだ。

（待つしかないか……）

やるせない気持ちを抱えつつ、俺は会長が待つ部屋へと大人しく戻り、窓を閉める。時計がないから時間を知る手立てはないが空模様からして七時過ぎだろう。いつもの俺なら夕飯の支度を始めてる頃だな。

「流石にご両親が心配？」

窓の外をぼんやり眺めている俺を見て、会長がそう尋ねてきた。

……あぁ、俺がホームシックにかかってると勘違いしたのか。

「父は今日、帰って来ませんから心配も何もありませんよ」
「でも、あなたの母親は――」
「お袋はいない」
会長の言葉を、俺は出来るだけやんわりとした口調で遮った。
「俺が物心付く前に交通事故で亡くなったとしか聞いてないし、どんな人だったのかも知りませんから」
「そう。……紅瀬さんのお父様は、どんな仕事をしてる人かしら？」
「一課勤めの刑事。……あと、これは前から疑問に思っていたことなんですが……」
「なにかしら？」
「会長は何が切っ掛けで、俺のことを知ったんですか？」
ずっと疑問に思っていたことだが会長は俺のことを知っているような態度で俺に仕事を任せてきた。記憶力は良い方とは言えないが少なくとも俺と会長は面識がない。
仮に奨学生としての噂を聞いて知ったとしても名前と顔が一致するとは限らない。つまり、会長は何処かで俺という存在を知っていたことになる。
「私に挨拶したの、忘れたの？」
「挨拶？　生徒会室……じゃありませんよね？」
「何日か前に同じ一年……相原さんと一緒に廊下を歩いてるとき、私に挨拶したでしょう？　そのときに顔だけ覚えたのよ」
一年の女子と廊下を歩いて挨拶って……あっ！　もしかして料理部の見学の時か！　でもあれ、本当に数秒程度のやり取りだし記憶に残るような挨拶は――してたな、俺。めっちゃ緊張した状態で挨拶したのだけは鮮明に覚えている。
「よく覚えてましたね」
「あんなに緊張した態度で挨拶する下級生なんてそうそう忘れるものじゃないわ」
「……」
そこはかとなく侮蔑されたような気がするが黙っておこう。言い

争っても無駄な体力使うだけだし。
「でも、それだけで俺に仕事を任せていいと思わないでしょう？」
「そんなことないわ。部活以外で上級生にちゃんと挨拶する一年生って貴方とあの時一緒に居たあの娘ぐらいだから」
そういうものなのか？　別に知らない人でも挨拶ぐらい普通にすると思うけど。
……いや、きっとそういう時代なんだろう。現に牛丼屋とかで御飯を食べてもご馳走様も言わずに帰っちゃう人間が当たり前のようにいる時代だ。なんて言うか、そういう人は普通にマナーが悪いと思う。
「それより……脱出する手段がないと分かった以上、どうするつもり？」
「脱出が無理と分かれば大人しく待ちますよ」
悔しいことに、この部屋から脱出する術を俺は見つけることが出来なかった。この扉をぶち破ることぐらいは出来るだろう。だがあの大男には勝てるか？　首尾よく見つからずに小屋から逃げ出せたとしてもすぐにバレて追いかけられる。地の利も向こうにあるから闇雲に逃げるだけじゃどうにもならない。
結局俺は、会長の言う通り大人しく助けが来るのを待つことにした。

夜の帳が下りる。薄暗かった外は今や完全な暗闇となり、俺たちがいる部屋も闇と同化しつつあった。目が暗さに慣れてきたとは言え、二メートル先は暗黒の世界が広がってる。
それとなく会長の方を見ると俯き加減でベッドに腰掛けていた。良いトコ育ちな彼女にはきっとこの環境は耐え難いものだろう。埃っぽい地面に光源のない室内。しかも食事さえ出てない上に年頃の野朗と二人きり。精神的に参ってるのは明白だ。
「寒いわね」
「えぇ」

最初の頃と違い、明らかに口数が少ない。いくら暖かくなったとはいえ、薄着で夜を越すのは少し厳しい。しかも会長はスカートだ。足元からの冷えは地味に辛い。冷え性である俺が一番良く知っている。

「隙間風のせいで足元が寒いわ」

あぁ、隙間風のせいで寒い……て、待て。今なんていった？

「足元から冷えるんですか？」

「そうよ。さっきから足元から隙間風が吹いて参ってるのよ」

「……」

会長の言葉に思わず頭をハンマーか何かで殴られたような衝撃が襲った。俺はこの部屋のベッド下を調べただろうか？　否、調べてない。しかも足元から隙間風が吹いてるってことは空気の流れが出来ている可能性があるってことだ。

「会長、ちょっと手伝って」

「今度は何をするつもり？　ドアでも突き破るおつもり？」

不満そうに声を上げつつも会長は手伝ってくれた。二人で苦労してベッドを反対側の隅に移動させてくまなく床下を調べてみる。

するとどうだろう。巧妙に引っ掛け穴が隠されている床が見つかったではないか。そこに指を入れて上へ引っ張ると人一人が通れる程度の穴があった。

「……。灯台下暗しとは、よくぞ言ったものですね」

これぱかりは会長も感心したように声を上げた。やれやれ、俺が始めからベッドの下まで調べておけばこんな無駄な時間を浪費せずに済んだものを……。

「早く降りますわよ」

「おや？　さっきまで助けを待とうと言ってたのは誰でしたかな？」

「さぁ？　私、物覚えの悪い人間ですから」

この女、思い切り開き直ったな。……まぁそれはそれとして、だ。このまま脱出するのは流石にまずいな。

「入りづらくなりますがベッドは戻しておきましょう。穴を発見さ

れる確率を減らしておくに越したことはありません」
「そうね。それにじっとしているのも飽き飽きしていたところだし」
それについては同意できる。やっぱ人間、同じ場所でジッとしていると気力が萎えてくるものだ。脱出するなら気力があるうちにした方がいい。
「急ぎましょう。嫌な予感がします」
会長を急かしてベッドを元の場所へ移動させる。ついでに窓を少し開けて縄を再びベッドの足に縛り付けて外にたらしておく。気休め程度の効果しかないだろうけど何もしないよりはマシだと思う。
「紅瀬さん、いいわよ」
会長の言葉を受けて、俺もベッドの下へ潜り込む。そのとき、部屋の外から階段を軋ませながら誰かが登ってくる気配がした。急がないとやばいな。
「会長。音に気を付けて」
既に穴の中にいる会長にそれが聞こえたかどうか、俺にはそれを確認する術はなかった。全力で後退しつつうつ伏せの状態で足を穴へ入れてゆっくりと落ちるように穴へ潜る会長が俺の足をなけなしの力で支えてくれているお陰でヒューっと落ちずに済んだ。
扉を開錠する音が耳朶に届く。慌てて俺が隠し扉で穴を塞いだ次の瞬間、扉が勢いよく開く音が聞こえた。危ねぇー……映画の世界並みのギリギリをリアルに体験すると心臓に悪いな。
「あの男が来たのね……」
「急ぎましょう」
小声で会長と会話を交わして音を立てないように梯子を一段ずつゆっくり降りる。穴を見つけられたらそこで俺も会長も終わりだが幸い、男がこの穴を見つけるような事態にはならなかった。
正直、この穴を見つけられたのは偶然以外、何でもない。もしあのとき、俺が会長の何気ない発言を聞き逃していたらどんな目に遭ってたか？　考えるだけでも怖いし想像したくもない。
足を踏み外さないように、慎重に梯子を折り続ける。小屋の地下

なのか、土を固めた地面が冷たい空間を演出しているように思えた。
判断を間違えたかと思ったがそれも束の間。正面の壁に窓が見えた。地上から窓まで三メートルほどあるが回りにある机や椅子なんかを積み上げていけば出られそうだ。
会長の方を見やると申し合わせたかのように動く。悠長に構えてる余裕なんかない。まずはテーブルを壁際におき、その上に椅子をおく。これだけあれば充分届くだろう。
「先に上がって下さい。下から持ち上げます」
「え、えぇ……」
この期に及んで何を躊躇ってる？　特に反抗してこなかったから何も言わないでおくけど。
会長はやや躊躇った様子で椅子に足をかけてサッシに手をかけようとして一度だけ俺の方を見下ろす。
「紳士なら覗かないわよね？」
「覗きませんよっ」
さっき躊躇ってた理由はこれか！　今は緊急事態なんだからそのぐらいは我慢しろっつーの！
……いや、別に見たいからそんなこと言ってるワケじゃないぞ？
あくまで状況的にそうだと言ってるだけだ。
「じゃ、お願いよ」
そう言ってから会長は片足をひょい、と上げる。それに合わせて俺は両手を差し出して踏み台を作る。ズシンと、彼女の体重が両手にのしかかる。運動部でもない俺が女とはいえ、人一人分の体重を支えるのは何かと骨だが中学まで空手をしていたこともあってか、どうにか上まで持ち上げた時だった。
『ッ！？』
上の方で何かを引きずるような音がやけに大きく聞こえた。多分、ベッドを動かしている音だ。こうなるまでに時間が掛かったってことはあのロープ、気休めにはなってたのか……。
「早く来なさいっ。捕まったらおしまいですわよ！」

「分かってる。そう急かさないで」
会長に催促されるように俺は脚に力を溜めて一気に飛ぶ。身体が頂点に達した瞬間を見切って会長が手を取って引っ張る。俺はその反動を利用して空いている手でサッシを掴み、腕力だけで上体を上へ押し上げる。
小屋の上は相変わらず騒がしい。かと言って下手に逃げても捕まるだけだ。
「何をしてるの！　早く――」
「ちょっと待って」
少しだけ待ってもらい周囲をザッと見渡す。
崖、川、雑木林、草むら、獣道。
こうして見渡すと逃走ルートはいくつもある。川沿いに逃げれば生活圏に出られるかも知れないが崖を降りなきゃならないので却下。草むらとあぜ道は追いつかれる可能性が高い。
雑木林も賭け的なところが強い。障害物が多く、上手くいけば身を隠すことも出来る利点もある反面、何処に出るか全く予想できないというリスクもある。かと言って会長に大男を振り切るだけの体力があるとは思えない。
「雑木林の方へ――」
「置いていきますわよ！」
……。
いや、まぁこういう状況だし迅速な行動を取るのは殊勝な心掛けだと思う。だけどそう、せめて一ミリだけでもいいから冷静さを保って欲しいと思うが俺の本音だ。切羽詰ってるのは分かるが、何もおいてくことはないだろ。
（やれやれ。猫みたいな奴だな）
胸中でひっそり不平を零しつつも、しっかりと会長の後を追う俺。革靴ということもあって走り辛さが顕著になっているが、四の五の言っていられる状況じゃ――
ぱんっ！　ぱんっ！

「っ！」
突如、夜の静寂を突き破るかのように銃声が響く。治安国家にも関わらず銃を撃ってくるとは……それだけ向こうが本気ってことか、クソッ。
「撃ってきてますわよ？！」
多少の驚きを覚えた俺とは別に会長はビビリまくってる。男はわりとこういうのには強い方だけど女ってやっぱり銃声とかそういうの聞くと怖がるよなぁ。かくいう俺も自分が撃たれた光景がチラリと脳裏に浮かんだワケで……。
「デタラメに撃って威嚇してるだけです」
安心させるようにそう言うと、俺は会長の手を引っ張ってやった。さっきの会長の声で居場所が割れたかも知れないから出来るだけ早くこの場から離れたい。
しかしこの雑木林……夜という悪条件が拍車を掛けてるのか何処をどう走ればいいのかさっぱりワカラン。今だって小屋とは反対方向に走っているだけで何処か安全な場所に出るという確証がある訳じゃない。
ぱんっ！　ぱぱんっ！
「ッ？！」
断続的に銃声が響く。向こうも明かりがないのが幸いしてか発見が困難となっているようだが時間の問題だ。少しずつだけど俺と会長の足音とは別の音が近づいて来てる。
「きゃっ」
不意に、会長がバランスを崩して倒れ込む。慌ててフォローをするが間に合わず、二人してもつれるように倒れて――身体が急に転がりだした。えっ、何。一体どうなってる！？　混乱する俺と会長を他所に身体がどんどん転がっていく。そこで始めて気付いたんだがすぐ横はかなり傾斜の大きい坂になってた。そのまま二度三度と地面を転がって大木に背中をぶつけてようやく失速した。
「っ～～～～！」

声を上げて痛みを誤魔化したかったが耐える。痛みはあっても何かが刺さったような感じはない。
「会長！？」
もつれるように転げ落ちる際に腕を引いて抱きしめるように庇った会長は俺の胸の中で二度三度と頭を振っている。大事はないようだが俺には分かる。今の会長はかなり――いや、とてつもなく機嫌が悪い。こんなときまで会長は会長のままでいるからある意味メンタル面は強いのかも知れない。
「……もう少し力加減というものを考えてくれないかしら？」
「そんなこと言ってる場合じゃないでしょう」
「……そうね。今のは悪かったわ」
よかった、大人しく引き下がってくれて。つっても今更デレを発動させても俺は揺るがないぞ。なんたってツンデレ属性じゃないからな。
「立てるか？」
「立てるわよ……っ」
右足に体重を掛けた時、会長の顔が明らかに歪んだ。全然大丈夫じゃねぇじゃねぇか。さっきの倒れ方とかちょっと不自然だったから捻挫でもしたんだろう。
「足ですね？」
「……えぇ。ごめんなさい」
「いえ。背負って走ります。捕まって下さい」
今までのような逃亡は出来ないけど会長を置いていく、なんて薄情なことはできなかった。そもそもそんなことが出来たらもっと最初の段階で見捨てている。鳳条院家に恩を売ろうとかそういう考えはない。言うなれば性分だ。雫さんの為に料理部存続の糸口を調べたり監査の手伝いをしたりしたのも、結局は俺が頼みごとの弱い人間であるのと父親譲りの正義感が相成ってるからなんだ。
「見つけたぞ！」
『！？』

上から野太い声がして、ハッとなって見上げる。暗くてシルエットしか見えないがあの男だ。完全に男の射程圏内に入っちまったな、こりゃ。
「くそっ」
悪態を付きながら俺は走る。会長の手を引いて走ってたときも全力だったが、今はそれ以上の力で走ってる。頭上から銃弾が飛んできて足元で着弾するが全く気にしなかった。
心臓が早鐘を打つ。汗ばんだ手が熱い。身体が酸素を求めて呼吸を荒くする。全力で走っているつもりなのに身体が思うように動いてくれない。
もどかしい。自分でも腹が立つほど鈍足だ。そしてそんな俺を嘲笑うかのように巨人の足音がじわじわと近づいてくる。
「ッ！？」
不意に肩を掴まれた。身の毛も立つような握力で掴まれると力任せに横薙ぎに倒される。肩口から地面に叩き付けられ、一度だけ身体が小さく跳ね上がった。まるでハンマーか何かで横殴りにされたような衝撃だ。
「手間取らせやがって……。大人を舐めるのも大概にしな」
そう吐き捨てながら男は懐から別の武器を取り出す。
鈍い光を放つナイフ。それには見覚えがあった。確か……そう、都内某所で二十数人を切りつ、あるいは殺したときに使われてたダガーナイフだ。
「お前……庶民だったんだな……」
「始めからそう言ってるだろっ」
どうやってそれを知ったのかは疑問だが……まぁいい。どっちにしろ俺、かなりヤバイし、余計なこと考える余裕とかなさそうだし。
「なに、見せしめに殺してやろうと思って部屋に行けば姿が見えないじゃないか」
「サイッテーだな、お前って人間は……ッ！」
出来るだけ恨み言のように言い放つと近くにあった石を掴んで投

げる。会長に危険が来るってことはないだろうが、まずは注意を俺に向ける。こうなった以上、もう逃げる選択肢は残されてない。
「ふんっ」
俺が投げた石を男は鼻で笑い、横薙ぎにして弾いてみせる。あぁそうさ、俺は漫画の主人公みたいにここ一番で力を発揮するような超人じゃない、ただの人間だ。
格上の人間が相手ならフツーに負けるし一芸達者という訳でもない。刑事の息子だとしても、白鷺学園に通っていても、中身はただの十五歳でしかない。
「そらっ！」
一足で俺との間合いを一気に詰めるとナイフを突き立ててくる。殆ど反射的に両腕で頚動脈をガードして即死は免れたが左腕に今まで経験したことのない痛みが奔る。
「あっ、がぁあ……ッ！」
激痛のあまりみっともない声を出してしまう。その声を聞いて男が歓喜したようにナイフを抜き、わざと立て続けに刺さず回し蹴りで脇腹を蹴る。運良く下げた右腕に当たったお陰で肋骨が折れずに済んだが俺の身体は五十センチほど浮いて地面に叩き付けられた。
「へっ、どうだ？　地べた這いずり回る気分は？　庶民のお前にゃピッタリじゃねぇか」
言うに事欠いて地べタを這うのがお似合いと来たか……。しかも的を射ているから反論できないな、それ。特に親父なんかが職業柄、そうだし。
そのまま男はゆっくりと近づき、一息で俺の喉笛を裂こうとナイフを――
「お止めなさい！」
――振り下ろそうとしたその刹那、この場には不釣り合いなくらい凛とした声が木霊した。その、あまりに凛とした声に男も思わずナイフを振り下ろす腕を止めたぐらい、会長の声には凄みがあった。
「あなた方が必要としているのは彼ではなくこの私……鳳条院燈華

でしょう！　要求通り大人しく捕まる代わりに彼には手を出さないでッ！」
「……」
そこに立っていた彼女は白鷺学園の会長ではなく、鳳条院家の未来を背負う一人人間だった。恐怖で足が震えているのにそれを隠し、虚勢と大声で自分を強く見せようとしている鳳条院燈華……。
だがこの男の関心は今、彼女ではなく俺に向いている。そんな俺の考えを肯定するかのように男は軽く笑い、無造作に俺の腕を持ち上げて言った。
「言ったでしょう、見せしめに殺すと。この男を殺して俺たちが本気だってことをアピールすれば鳳条院家もバカなことは考えねーだろ」
「ッ！？」
「ま、お前の親父さんや兄弟たちが庶民一人の命で動くかどうかは分からないが、パフォーマンスとしちゃ充分だろ？」
確かに……。政治家がたかが庶民一人の為に動くとは考えられない。いや、あえて助けることで慈善っぷりをアピールするという手もあるが選挙でも迫ってない限りはそんなことしないだろう。
……俺の命もここまで、か。あっという間の十五年だったけどなかなか捨てたもんじゃなかったな。遺り残したこと、いっぱいあるしまだまだ遊び足りないけどどうしようもない。
無造作に男が腕を振り上げ、今度こそ俺の喉笛にナイフが刺さろうとしたそのとき――
「……ッ！」
俺の目の前で火花が散った。ダガーナイフは俺の喉元には届かず、代わりに別のナイフがダガーナイフを受け止めていた。
「なっ……！？」
男が呆気に取られたその隙を付いて背広を着た人は俺を男から一気に引き剥がす。俺と男を引き剥がした人の体躯には見覚えがあったがうまく思い出せない。

そうこうしているうちにあっという間に男は取り押さえられた。何かをしている所を見ているつもりなのに何をどうしたかなんて分からない。本当に気付いたら俺を襲ってた男は完封されていた。すげぇ、なんかリアル仮面ライダー見てるみたいだ。

……と、そこでようやく会長が人影を認識して、足を引きずりながらその人のもとへ駆け寄っていく。

「柳瀬さん?!」

柳瀬さん？　はて、どっかで聞き覚えがあるが、何処だっけ？

……。

あっ、思い出した！　この人確か鳳条院家お抱えのボディーガードだ！

「お嬢様、お怪我は？」

「私は平気よっ。それより紅瀬さんを見てちょうだい！」

「お嬢様、落ち着いて下さい。今、救護班がそちらに向かってます」

柳瀬さんはあくまで会長のケアに勤めている。普通に考えるなら雇い主の娘を第一に考えるよなぁ。それに今すぐ失血死するって訳じゃないから救護班が着てからでも遅くないって判断したんだろう。

でも、その……傷口メチャクチャ痛いです。そりゃもう、軽く手を握ることさえままならないくらい痛い。これで後遺症が残ったらあの男に慰謝料をたっぷり請求するとしよう。

「紅瀬様」

俺が痛みと戦っている間に会長の説得が終わったのか、改まった態度で柳瀬さんが俺と向かいって来た。

「私たちの代わりにお嬢様をお守りしてくださったこと、大変感謝します」

「いえ……。守ったというより運が良かっただけですから……」

謙虚でも何でもない、本当に運が良かったとしか言えないのがちょっと悔しい。男が床下の隠し路を見つけるのに時間が掛かったことや雑木林に駆け込んだとき、すぐに見つからなかったこと。もし何処か一つでも男の行動が早ければ間違いなく俺は殺されていたん

だから。
「ところで柳瀬さん。どうして私の居場所が分かったのです？」
「それは後ほどお話します。まずは彼の応急処置が先です」
なんか今、俺の応急処置を口実に逃げたように思えるのですが？

こうして俺と会長の一世一代の誘拐劇は無事、幕を降りた。
まず、柳瀬さんが会長の場所を特定できた理由は会長には内緒で普段から身に着けている貴金属に発信機をつけていたからしい。これには会長も少し怒っていたけど命を助けられた手前、大きく出ることは出来なかった。
また、俺たちを誘拐した男たちは金で雇われた素人だったと柳瀬さんは教えてくれた。目的は身代金の請求という、ごくありふれた理由。会長が狙われたのは単に自分の身辺が一番警備が薄いからだと教えてくれた。自分の周囲が手薄だってことに自覚あったのかと言ったら手痛い突っ込みを受けた。
そして俺自身はと言えば、全治二週間程度の怪我で済んだ。勿論、そのあいだ腕を使えないことに不憫さを感じるが命が助かったと思えばずっと安い代償だ。ただ、見舞いに来た親父にはこっぴどく怒られた。白鷺学園に通っているならこのぐらいのことは考えられるだろとか、安易に人様の車に乗るなとかもー俺に言わせりゃ理不尽以外何でもない。会長の命を守ったんだから少しは大目に見て欲しいと心底思ったよ、ホント。
しかもポイント申請しようとしたら『ポイントはあくまで学園側の利益に繋がる行動をした場合のみ認められるものである』とかぬかしたんだぜ？　信じられねーってマジで。鳳条院議員の娘を助けたんだからちょっとぐらいポイントくれたっていいじゃないか。
因みに今回の事件が切っ掛けで良家の人間はより一層、登下校には充分注意するようにと教職員からの呼びかけがあった。警備状況も今まで以上に厳重にすると言ってたけど庶民な俺にはあまり――いや、全然カンケーないんだよな、これが。

警備をどれだけ厳重にしたところで俺の通勤手段は電車と徒歩。他人事とまではいかなくともまた誘拐される可能性は多いにある。だから自分の身は自分で守る以外、方法なんてない。

――とか思ってたんです。玄関を出るまでは。

「ごきげんよう、弥生さん」

「……」

休み明けの朝。

病院と警察を行き来してた俺は久しぶりの学園へ向かおうと玄関を出た途端、どっかで見た覚えのある高級車が止まっているかと思えば雫さんが後部座席から顔を覗かせ、挨拶をしてきた。

「なに、してんの……雫さん？」

「出迎えだ」

と、やっぱり何処か不機嫌な態度で答える執事の瀬場さん。そりゃあ、娘が馬の骨と仲良くするところを見て面白くないのは分かるけどアンタ仮にも使用人だろ。最低限の社交辞令ぐらいは持つべきだと思うぞ。

「今朝、学園側から連絡があったんです。庶子出身の方は学園側が用意するバス、もしくは知り合いに送迎をしてもらうようにと」

「あぁ、そういうことですか」

そう言われると納得できる。そりゃ、いくら庶民とはいえ今回のようなことがまた起きたら学園の風評はガタ落ち。推薦入試の希望者だって危ぶまれる。けど順当に行けばこの場合、雫さんじゃなくて鳳条院家の車が迎えに来ると思ったんだが……考えても仕方ないか。別に大したことじゃなさそうだし。

けど何だろう？　何か俺、大事なことを忘れてるよーな気がしてならないんだが。

……。

あー！　思い出した、料理部だよ！　連日の騒動ですっかり忘れてたけど料理部の未来を賭けた審査が先週あったじゃないか！

「雫さん、料理部の件どうなりました？」
約束じゃ先週の金曜日に雫さんがオムレツを作ってそれを会長に試食させる筈だっ。俺はその日、精密検査の為に学園を休んでいたからどうなったのか全く分からない。
「はい。そのことでしたら延期になりました」
「延期？」
なんだそりゃ？　合否じゃなくて延期って……一体先輩は何をやらかしたんだ？
「先週、鳳条院会長は今回の件についてのことで実家から呼び出しが掛かったそうです。ですから、料理勝負は持ち越しになった、ということです」
「あー、なるほど。……それで、その再戦日はいつ？」
俺の質問に雫さんは一度、にっこりとした笑顔を俺に向けてからはっきりとした口調で断言した。
「本日の放課後です」

あっという間に放課後を迎え、俺達は家庭科室で会長と向かい合っている。こうして会長と学校で顔を付き合うのって一週間ぶりなんだよな。最後にあったのは先週末の病院だったっけ。いや、今はどうでもいいか、そんなこと。
「紅瀬さん、念のため言っておきますけど命を助けられたからと言って味に妥協は致しませんから」
「なによー、恩人なんだからそのぐらいはサービスしてもいいんじゃない？」
「あら？　御礼なら先日致しましたからイーブンですわよ」
その言葉に先輩が『どうせお金でしょ……』と呟いたのを、俺は聞き逃さなかった。確かに今回の治療費という名目でお釣りが来るぐらいの謝礼金を貰ったけどそれが悪いことだとは思わないしお金だって誠意の一種だと俺は思う。
……むかし、テレビでも言ってたけど十代って本当に無駄に理想

高いなー。俺も人のこと言えないけど。
「先輩、その喧嘩腰で会話するのどうにかならないんですか？」
「別に本気で喧嘩する訳じゃないんだからいいじゃない」
良くない。例え本気で喧嘩する気がなくても怒りっぽく口答えする先輩に不快感を覚える人がいるってことを知って欲しい。雫さんなんかは最たる例だろう。
「お喋りはそのぐらいにして、審査の方に映っても宜しいですか？」
「はい……」
会長の言葉に雫さんが毅然とした態度で答える。なんか俺と先輩が完全に空気化しているような気がするのですが？
「先輩、実際雫さんはどのぐらい上達したんですか？」
「金曜日の時点なら……まぁ厳しかったわね。でも土曜と日曜は私、様子を見てないから何とも言えないけど――」
そこで先輩は一度、勿体付けるように間を取る。テレビじゃないんだからさっさと教えてくれてもいいじゃないか。リアルで間を取るとか全然意味ないぞ。
「紅瀬君も知っての通り、相原さんは努力家だからきっと大丈夫よ」
そんなこと、先輩に指摘されなくても知ってるさ。見た目こそ現代に残る大和撫子だけど、実は自分でこれと決意したことに関しては頑なに譲らない傾向がある。周りは融通が利かないって揶揄するけど、俺は雫さんのそういうところ、結構好きだ。
ただ、それでも彼女には申し訳ないが雫さんが見事な手捌きでオムレツを作る姿が想像できない。単純に俺が雫さんが努力しているところを見てないだけなんだが。
「では、早速作らせて頂きます」
静かに宣言すると雫さんは実に慣れた手付きでフライパンを熱して、その間に卵を割ってボールに移すとフォークで卵を溶かし始めた。あれ、菜箸じゃなくてフォークでやるのか？
「フォークで卵を溶くとね、白身が綺麗に切れるのよ」
俺が不思議そうに手元を見ていると先輩がそっと耳打ちをして教

えてくれた。言われて見ればホテルで料理をする人間って大抵フォークで卵を溶いているけどあれにはそういう意味があったのか。
卵を溶いている間に加熱したフライパンからは煙がもうもうと立つ。テフロン加工されてる奴ならまだしも、今回使っているのは鉄製のフライパン。バターを敷いて調理するにしても充分に熱するのが常識……らしい。これは本で得た知識。
「……」
フライパンにバターを入れてまんべんなく塗りつける。頃合いを見計らって溶いた卵を投入するとフライパンをしっかり握り、激しくも小刻みに揺らしながら　菜箸で卵の状態を確認する。
ときどき、料理人がオムレツを作るシーンをテレビで見るけどそういう人たちって大抵フライパンを激しく揺らすよな。何でだろう？
「フライパンを小刻みに激しく揺らす理由は何ですか？」
考えても分からないことなので俺は素直に先輩に尋ねてみた。聞くのはちょっと恥かしかったけど聞かぬは一生の恥とも言うからな。
「あれはフライパンの温度を一定に保ちつつ全体に火を通す為ね。ふんわりオムレツを作るにはフライパンの温度が一定に保たれてなくちゃいけないのよ。
「高温で熱するとふんわりオムレツが出来なくなるってことですか？」
「まぁ、要はそういうことね」
そうか、だから俺が家でオムレツを作った時は上手にふんわり感を作ることが出来なかったのか。やっぱりなんでも上達したいと思ったらその道の専門家に訊くのが一番だな。
先輩と話している間にも、雫さんは一心不乱にフライパンを振り、菜箸でオムレツの形を作っていく。その一生懸命な姿を見れば彼女がどれだけ失敗を重ねてのか、それがよく分かる。
「……」
フライパンと睨めっこしながら菜箸を操っていく雫さん。俺がフライパンの中を確認した頃には既にオムレツとしての形を成してい

た。初めてオムレツを作った頃と比べれば段違いな出来栄えなのは分かる。
（あとは味か……）
白い皿にオムレツを載せる彼女と会長を一瞥しながら思う。素人目から見てもあのオムレツが一般家庭で作られた代物より上手にできているのはよく分かる。
だが問題は会長がどんな決断を下すかだ。彼女の性格上、人間関係や自分の好みの問題で良し悪しを決めたりはしないだろう。
しかしそれでも俺と先輩の内心はとてもじゃないが穏やかではなかった。仕事の手伝いをした時からそうだが会長は本当に何を言うか分からない。それは先輩も同じだがそれとはベクトルが違う。だからもしかしたら思いがけない理由で駄目だしされるんじゃないかっていう不安があった。
「鳳条院会長、出来上がりました」
「そう」
雫さんの呼びかけに答え、会長は一歩一歩確実に踏み締めるようにオムレツへと向かう。あっ、なんか今頭の中でワルキューレの行進曲が流れた。だって今の会長の歩き方、まさにそんな感じだったし。
「では、早速頂きますわ」
皆に良く聞こえる声でそう言ってからフォークで手頃な大きさにカットして口に入れる。そんなに遅くはないのに口に入るまでの瞬間が恐ろしく長く感じられた。
咀嚼に五秒弱。そしてその余韻に浸ること三秒。最終的な評価が出たらしく、雫さんの方を見てはっきりと明言した。
「風味が足りないわね」
「……っ」
「道具の差もあるのでしょうけど、バターの量が足りなかったんでしょうね。表面も少し加熱時間が長すぎたせいでふんわり感がないし、形も悪いわ」

でもね……と、顔を下に向けている彼女に対して会長は言葉を続ける。慰めの言葉でも掛けるつもりか？
「あなたの努力を否定するほど、私もバカじゃないわ。それにさっきの評価はあくまで個人的なもの。最終的な評価なら料理研究同好会を正式に部として認めてあげるわ」
「えっ！？」
「あら。何を驚いているの？」
あまりに意外な言葉に先輩も雫さんも驚いた顔で会長の方を見る。いや、俺も驚いてると言えば驚いてるぞ？　だってさっきの評価を聞いた限りじゃどう考えても料理部の昇格を認めないという言い回しにしか聞こえなかったから。
「私が言ったこと、もう忘れたのかしら？　彼女が並みの主婦以上の腕前であるなら部として認めるって、言ったでしょう」
あぁ、確かにそんなこと言ってましたね。まぁ、会長に言われるまで綺麗さっぱり忘れてましたけど。
「だったらどうしてあんな回りくどい言い方したのよ？」
「ちょっとぐらい意地悪してもバチは当たらないでしょう？　本当なら……いいえ、私情なんか話しても仕方ないわね」
私情？　何の話だ？　一瞬だけ意味ありげに雫さんの方を一瞥したけど……会長と雫さんとの間で何かあったのか？
「……あぁ、それと桐生さん。あの時、あなたの料理研究部を小馬鹿にしたような言い方をして御免なさい。あなたが遊び半分で部活をしていないのが良く分かったし、私もちゃんと実態を見もしないで勝手な評価を下したことを謝るわ」
「……。そう、分かってくれればそれでいいのよ。それより会長さん、そろそろ仕事の方に戻らなくていいの？」
「言われなくても戻るわ。それじゃ、相原さんに桐生さん、二人で頑張ってね」
そう言って、会長はまるで追い出されたかのように足早に家庭科室から立ち去っていく。昔のことがあるとはいえ、本当に先輩は会

長と仲良くしようと思わないんだな。なんかそういうのって、すごく勿体ない気がする。
「先輩、少しは態度を改めようとは思わないんですか？」
「向こうが態度を改めるならそうするわよ」
だからどうしてそんな喧嘩腰になるんだよ。犬猿の仲とはこのことを言うのか。お互い自分の分野においては妥協を許さないだろうし、仲良くするのはやっぱり無理だろうなぁ。
「弥生さんは鳳条院会長と仲が良いのですか？」
俺と先輩の話が一段落したところで、使った道具を洗い終えた雫さんがタイミングを見計らったかのように会話へ入ってきた。実はさっきから気になっていたから切り出すタイミングを計ってたりして……。いや、雫さんはそこまで計算高くはないか。
「どうだろう？　言うほど仲が良いって訳じゃないけど普通に話す分には問題ないと思う。ただ……」
「ただ、何です？」
「俺は会長にそんなに好かれてはいないらしい」
『……』
俺の言葉に先輩はもとより、雫さんまでもが信じられないと言った態度で俺の顔を注視する。え、なに？　もしかして俺なんか変なこと言った？
「紅瀬君、どうやったらそういう結論に達するの？」
「そりゃあ、話をしても素っ気無いですから嫌われてると思うが普通でしょう？」
「……。弥生さん、女の子は嫌いな殿方と話をするほど強くはありませんよ」
そういうものか？　少なくとも会長には雫さんの言う弱さが会長にはないと思う。そうだとしてもそれは、鳳条院家の人間という暗示を自分にかけるだけで克服できそうに思える。あの日の夜、毅然とした態度で誘拐犯を一喝した会長を見たから殊更そう思う。
「ま、紅瀬君がニブチンなのは今に始まったことじゃないからこれ

以上この話題を引っ張っても仕方ないわね」
「ニブチンって何ですか」
「言葉通りの意味よ。さっ、相原さん。正式に部として認められた訳だし早速部活動を始めるわよっ！」
「いや待って下さい先輩っ。まずは顧問の先生を雇うのが先でしょう！」
「細かいこと気にしないっ。顧問は紅瀬君が連れてくること！　さもなくば会長にあることないこと吹き込んじゃうわよ～？」
「脅迫ですか？！」
「脅迫だなんて人聞きが悪いわね。もし顧問の先生連れてきてくれたらもれなく美女二人の手料理を一番に試食させてあげる権利を付けちゃうぞ♪」
「弥生さん、お願いします」
あぁもう……っ！　なんで最後の最後でこんなオチなんだ！　しかも最後の最後まで俺に頼るとかどんだけだよ先輩に雫さん？！
「男の子だったら美女の我が儘を黙って聞いてあげるのは当然のことでしょ？」
そんな理不尽なこと、さらりと笑顔で言わないで下さい……。

梅雨が明けて、期末テストも無事に終えた生徒たちは開放感に包まれていた。ほんの一週間前までは必死に勉強していた人間が授業終了のチャイムと同時に遊びにいく予定を立てたり、一足早く夏休みの計画を練ったりしている。気持ちは分かるがなお前ら、もう少しは自重というものを覚えたらどうだ？　柊先生なんか苦笑を浮かべながら出て行ったぞ。
かく言う俺の予定はと言えば――
「失礼しまーす。相原雫さんと紅瀬弥生君に会いに来ましたー」
「桐生先輩、ごきげんよう」
ここ最近はもうすっかり見慣れた光景だ。料理研究部が正式に認められ、顧問も決まってからはほぼ毎日のように活動をしている。

俺は一応数合わせの為の幽霊部員として扱われているが週に一度ぐらいは活動を強要されてる。活動と言っても味見して感想言うだけだから部活動をしてるとは言い難いが。
「ごきげんよう、雫。で、弥生ちゃんの方は準備オーケイ？」
「準備も何も、しようがないじゃないですか……」
先輩の物言いに対して、俺はうんざりしたように言い返した。あの一件以来、先輩は暇あれば俺と雫さんと関わるようになり、いつしか雫さんは雫と呼び捨て、俺のことはちゃん付けで呼ばれるようになった。男にちゃん付けなんか似合わないと猛講義したのは記憶に新しい。
「ふふん。例え弥生ちゃんが何もしないにしても心の準備は必要でしょ？　なんたって今日は弥生ちゃんの家で調理自習なんだから♪」
……果たして俺の家で調理自習することに何の意味があるのだろうか？　そりゃ、確かにいつかは俺の家に遊びに行くとは言ったけどまさか本気でそれを実行するとは俺も思わなかったし、行くとしてもそれはもっと先の話だと思ってた。
有り体に言うなら部屋、すんごく汚いです。それこそ女の子を上がらせるのがおこがましいぐらい。
「先輩、出来れば来週――いえ、明日でもいいので延期できませんか？　えぇ、それはもう人様を上げても恥かしくないぐらい綺麗にしますから」
「それじゃ意味ないわよ。普段の生活具合をチェックしなきゃ抜き打ちテストにならないでしょ？」
「抜き打ちテストって……俺は幽霊部員ですよ？」
「でも、何だかんだ言いながら弥生さんは週に一度は顔を出してくれてるじゃありませんか。それだけでも私は充分だと思いますよ」
別に好きで顔を出してる訳じゃないんだが……。しかも顔を出す時ってのは決まって千波に引きずられるように入ってきると思うのですが。
「それにほら、部員の生活態度をチェックするのも部長の務めでし

ょ？」
「部長はそんなことしません。それに遊びたいなら素直に遊びたいって、言えばいいじゃないですか」
「遊びに行くんじゃないわよ。調理自習ついでに弥生ちゃんをいじくり倒すだけよ」
意味分らねぇって。
……はぁ、やめよう。これ以上言い争っても事態が好転する訳じゃない。逃げても絶対押しかけてくるだろうし。
「弥生ちゃんは夏休みの予定、どうするつもり？」
「俺が奨学生だってこと、知っているでしょう。少しは遊ぶかも知れませんけどもっぱら勉強で終わると思います。そういう先輩は？」
「一週間だけど北海道へ家族旅行するって話が出てる。雫はやっぱり海外？」
「いいえ。国内の何処かに出掛けるかも知れませんが夏休みの殆どは家で過ごすと思います」
「あらま。お嬢様にしては珍しい余暇の過ごし方ね」
いや、先輩も一応お嬢様でしょ。
「じゃあさ、夏休みは都合の良い日に三人でどっか出かけない？あ、でも弥生ちゃんがいるから近場の公園とかちょっと遠出していけるような場所とかで」
「それでしたら、お弁当が必要になりますね」
「ふふん。それならお姉さんに任せなさい。そういう訳だから弥生ちゃん、夏休みの予定はしっかり空けといてね」
「……まぁ、無理しない範囲でなら……」
口では素っ気無く答えた俺だけど、本当は先輩ほどじゃないにしても楽しみだった。特に一学期半ばは料理部の為にあれこれ考えたり相手の勘違いで誘拐されたり色んな出来事が目まぐるしく起きてた。だから今回のように純粋に楽しむ行事は白鷺学園に来てからは初めてかも知れない。
「でも、まずは目先にある行事をめいっぱい楽しまないとね」

「やっぱり、ただ遊びたいだけじゃないですか……」
がっくりと肩を落としつつも、俺はきっと笑っているに違いない。
だって、隣を歩いている雫さんが楽しそうに俺を見ているんだから。
夏の空気が漂い始めた七月。俺は今、青春という名の喧騒の中を生きている。

華麗なる脱走劇（後書き）

ここまでお付き合い頂き、本当にありがとう御座います。ＰＶやお気に入り登録は思ったほど伸びませんでしたが『まぁこんなものだろ』という思いもあります。

彼女は正義の味方だったと違い、この作品は個人的にちょっとした思い入れもあって私は好きです。好き……なだけにもっと庶民らしく知恵を絞るような展開を入れておけば良かったと今になって思います。これじゃセレブ学校に通ってる意味ないじゃん！　と突っ込まれたのも今ではいい思い出……。

二次創作と違い、オリジナルは本当に力を使います。手探りから初め、必要な資料を自分で集めて（この作品はそんなに資料集めしてませんが）展開を纏めて……時には夜遅くまで執筆したり……まぁ書いているときは結構楽しかったですが書き終わると軽い燃え尽き症候群になったりします。本当は燃え尽きたくないのになんででしょうね？

もうオリジナル小説を書く機会はないと思われますが基本、気分屋なのでどうなるか分かりません。

でわでわ～。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0401o/

庶民がやってきた

2010年11月2日00時11分発行